茨城県友部町

小原香取・坂場遺跡

千種重樹　水谷　正
飯島栄子　田村みどり　編

友部町小原香取・坂場遺跡発掘調査会

平成6年11月

茨城県友部町

小原香取・坂場遺跡

千種重樹　水谷　正
飯島栄子　田村みどり　編

友部町小原香取・坂場遺跡発掘調査会

1－1

1－2

1－3

第一号土壙出土土器

5－1

5－2

5－3

第五号土壙

5－4

包－1

7－1

第五号土壙(上段)，遺物包含層(下段左)，第七号土壙(下段右)出土土器

序　　文

友部町教育委員会教育長
宮　山　茂　夫

友部町には，多くの遺跡があり，先人達がこの地に長期に亘って生活を営んだ貴重な文化財も多く分布しています。

これらの文化財を後世に伝えることは，私たちの責務と考え，対応に努力しているところです。

この度，町道１級３号線の拡幅改良工事に先立ち発掘調査を実施し遺跡の性格を把握して記録保存することにしました。

この小原香取・坂場遺跡は町史の記述によれば「国道50号線の滝川地内から大原小学校を経て青木地内に通ずる町道を入ると上郷神社がある。この神社をとりかこむように遺跡がある。（中略）神社の東側から南側にかけて土器片が多量に散布されている。

土器片は縄文中期の加曽利ＥⅠ式ＥⅡ式である。神社の南西側からは阿玉台式の土器片を確認できた。縄文中期の研究には重要な遺跡であろう。」とあります。

調査の結果，東北南部のフラスコ状土壙と関東南部の阿玉台式土器を発掘し友部地方が東北と関東の縄文文化の交錯関係を内包しているという興味深い資料を入手しました。

最後に，調査，整理，そして報告書の執筆等，貴重な資料の作成にご努力くださった方々に心から感謝申し上げるとともに，本書が多くの方々に広く活用され，文化財愛護思想の普及に資することを願っております。

例　　言

1　本書は，茨城県西茨城郡友部町大字小原字香取3959外に所在する小原香取遺跡と大字小原字坂場4112外に所在する坂場遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，町道１級３号線の拡幅改良工事に伴うものである。

3　発掘調査は，平成５年10月15日から同年11月29日まで行った。

4　発掘調査は，千種重樹（茨城県埋蔵文化財指導員）を担当者とし，調査員に水谷　正・飯島栄子を加え，地元作業員16名の協力を受けた。

5　小原香取遺跡の調査対象面積は約3,800㎡，坂場遺跡の調査対象面積は約200㎡である。

6　発掘調査は，可能なかぎり原位置法を採用した。

7　本書に収録した写真は，千種重樹が撮影したものを使用した。

8　遺物の整理および報告書の作成作業は，調査終了時より平成６年11月10日まで行った。

9　整理作業は，主として下記の分担で行った。

千種　重樹　遺構図整理，土器・石器・実測図のトレース，遺物関係写真図版，土器接合復元，本文執筆，総合レイアウト。

水谷　　正　接合資料の抽出，土器接合復元。

飯島　栄子　土器拓影図，土器・石器実測原図。

田村みどり　遺構図およびその他の図面のトレース，記号・番号の貼付，完成図面の縮尺割付

10　出土遺物は，友部町教育委員会および友部町立民族歴史資料館が一括保管している。

実　測　図　凡　例

1　出土遺物の種類は次の記号で区別した。

●　土器　　▲　自然石　　△　石器

2　遺物実測図で須恵器は断面を墨で塗りつぶし，内耳土器の断面には網点を施した。

本　文　目　次

原色図版
序　　文
例　　言
本文目次
挿図目次
図版目次
第一章　緒　　言 …… 1
第二章　遺跡の位置と地理的環境 …… 2
第三章　縄文時代遺跡概観 …… 4
第四章　発掘調査の概要 …… 6
第五章　竪穴住居址の調査 …… 15
　1　第一号住居址 …… 15
第六章　縄文時代土壙群の調査 …… 17
　1　第一号土壙 …… 17
　2　第二号土壙 …… 18
　3　第三号土壙 …… 20
　4　第四号土壙 …… 22
　5　第五号土壙 …… 24
　6　第六号土壙 …… 27
　7　第七号土壙 …… 27
　8　第八号土壙 …… 29
　9　第九号土壙 …… 31
　10　第一〇号土壙 …… 33
第七章　落し穴状遺構の調査 …… 33
　1　第一号落し穴遺構 …… 35
第八章　坂場遺跡の遺構 …… 35
　1　第一号竪穴状遺構 …… 35
　2　第一号溝状遺構 …… 35
第九章　その他の遺構 …… 38
　1　第二号溝状遺構 …… 38

2　第三号・第四号溝状構造 …… 38
3　屋外炉址 …… 38
4　遺物包含層 …… 38
第一〇章　出土遺物の概要 …… 42
第一一章　ま と め …… 64
小原香取・坂場遺跡発掘調査会組織，発掘調査作業従事者，遺物整理報告書作成従事者 …… 66

挿　図　目　次

第一図　小原香取・坂場遺跡位置図，付近地形図 …… 3
第二図　小原香取遺跡調査区トレンチ設定図 …… 7～8
第三図　坂場遺跡調査区トレンチ設定図 …… 9～10
第四図　トレンチ土層断面図 …… 11～12
第五図　遺構分布図 …… 13～14
第六図　第一号竪穴住居址実測図，遺物出土状態図 …… 16
第七図　第一号土壙実測図，遺物出土状態図 …… 17
第八図　第二号土壙実測図，遺物出土状態図 …… 19
第九図　第三号土壙実測図，遺物出土状態図 …… 21
第一〇図　第四号土壙実測図，遺物出土状態図，接合関係図 …… 23
第一一図　第五号土壙実測図，遺物出土状態図，接合関係図 …… 25
第一二図　第六号土壙実測図，遺物出土状態図，接合関係図 …… 26
第一三図　第七号・第八号土壙実測図，遺物出土状態図 …… 28
第一四図　第九号土壙実測図，遺物出土状態図 …… 30
第一五図　第一〇号土壙実測図，遺物出土状態図 …… 32
第一六図　第一号落し穴状遺構実測図 …… 34
第一七図　第一号竪穴状遺構実測図，遺物出土状態図 …… 36
第一八図　第一号溝状遺構実測図，遺物出土状態図 …… 37
第一九図　第二号溝状遺構実測図，遺物出土状態図 …… 39
第二〇図　第一号・二号屋外炉址実測図 …… 40
第二一図　遺物包含層遺物出土状態図 …… 41
第二二図　第一号土壙出土接合復元土器（一）実測図 …… 44
第二三図　第一号土壙出土接合復元土器（二）実測図 …… 45
第二四図　第一号土壙出土接合復元土器（三）実測図 …… 46
第二五図　第五号土壙出土接合復元土器（一）実測図 …… 47
第二六図　第五号土壙出土接合復元土器（二）実測図 …… 48
第二七図　第五号土壙出土接合復元土器（三）実測図 …… 49
第二八図　第五号土壙出土接合復元土器（四）実測図 …… 50
第二九図　第七号土壙出土接合復元土器（一）実測図 …… 51
第三〇図　遺物包含層出土接合復元土器（一）実測図 …… 52

第三一図　第一号土壙出土土器拓影図 …… 53
第三二図　第三号土壙出土土器実測図，拓影図 …… 54
第三三図　第四号土壙出土土器実測図 …… 55
第三四図　第五号（上段）・第六号（下段）土壙出土土器実測図，拓影図 …… 56
第三五図　第九号土壙出土土器実測図，拓影図 …… 57
第三六図　第一〇号土壙出土土器実測図 …… 58
第三七図　坂場遺跡第一号溝状遺構出土土器実測図 …… 58
第三八図　遺物包含層出土土器拓影図（一） …… 59
第三九図　遺物包含層出土土器実測図，拓影図（二） …… 60
第四〇図　遺物包含層出土土器実測図（三） …… 61
第四一図　石器・石器片実測図 …… 62

付　　図　友部町内縄文遺跡分布図　『友部町史』より …… 63

図　版　目　次

図版第　一　遺跡の遠景〈南方より〉（上）
遺跡から眺めた西方の景観（下）
図版第　二　調査区の現況（一）〈南側より〉（上）
調査区の現況（二）〈南側より〉（下）
図版第　三　遺跡中心部の現況〈南側より〉（上）
調査安全祈願祭を厳修して（下）
図版第　四　第1トレンチ調査風景〈南側より〉（上）
第1トレンチ全景〈南側より〉（下）
図版第　五　第2トレンチ調査風景〈南側より〉（上）
第2トレンチ遺物出土状態〈南側より〉（下）
図版第　六　第2トレンチ全景〈南側より〉（上）
石鏃出土状態（下）
図版第　七　第3トレンチ全景〈南側より〉（上）
第4トレンチ全景〈南側より〉（下）
図版第　八　第5トレンチ全景〈南側より〉（上）
第1トレンチ第一号竪穴状遺構遺物出土状態〈西側より〉（下）
図版第　九　調査風景（第一号竪穴住居址）〈南側より〉（上）
第一号竪穴住居址全景〈西側より〉（下）
図版第一〇　第一号土壙遺物出土状態〈南側より〉（上）
第二号土壙遺物出土状態〈南側より〉（下）
図版第一一　第三号土壙遺物出土状態〈東側より〉（上）
第三号土壙遺物出土状態〈西側より〉（下）
図版第一二　第四号土壙遺物出土状態〈西側より〉（上）
第四号土壙埋没土層の状況〈西側より〉（下）
図版第一三　第五号土壙遺物出土状態〈東側より〉（上）
第五号土壙全景〈東側より〉（下）
図版第一四　第六号土壙遺物出土状態〈南側より〉（上）
第六号土壙全景〈南側より〉（下）
図版第一五　第七号土壙遺物出土状態〈東側より〉（上）
第七号土壙（上），第八号土壙（下）全景〈南側より〉（下）

図版第一六　第九号土壙遺物出土状態〈西側より〉（上）
第九号土壙全景〈南側より〉（下）
図版第一七　第一〇号土壙全景〈西側より〉（上）
第２トレンチ遺物包含層遺物出土状態〈西側より〉（下）
図版第一八　第１トレンチ溝状遺構遺物出土状態〈南側より〉（上）
第一号落し穴状遺構〈西側より〉（下）
図版第一九　接合復元土器（一）
図版第二〇　接合復元土器（二）
図版第二一　第一号・二号・三号土壙出土土器
図版第二二　第三号・四号土壙出土土器
図版第二三　第四号土壙出土土器
図版第二四　第四号・五号土壙出土土器
図版第二五　第五号・六号土壙出土土器
図版第二六　第九号土壙出土土器
図版第二七　第一〇号土壙・遺物包含層出土土器（一）
図版第二八　遺物包含層出土土器（二）
図版第二九　遺物包含層出土土器（三）
図版第三〇　遺物包含層出土土器（四）
図版第三一　溝状遺構出土土器
図版第三二　出土石器・石器片

第一章　緒　言

友部町は茨城県のほぼ中央に位置し，水戸市に近く，首都100km圏内にあり，ＪＲ常磐線，水戸線の分岐点である友部駅を擁するという立地条件から，昭和40年代の高度経済成長期以降は，特に旭町を中心に宅地造成がすすみ，人口増加が急激な伸びを記録し，昭和63年には人口３万人に達した。

常磐自動車道の岩間ＩＣに隣接し，北関東自動車道と国道355号の合流地点にＩＣが設けられることになり，「多極分散型国土形成促進法」に基づく県の「振興拠点地域」としての産業振興の基盤整備が進められている。

平成６年　月に就任した常井貞利町長は「生活環境を整備し“住んで良かった”と実感できるような福祉文化の町を目指す」としているが，常磐自動車道と北関東自動車道のＪct周辺に面積約110haの先端総合流通センター施設を整備する構想があり，都市化と人口増に拍車をかけることになるだろう。

町としても幹線道路や上下水道の整備事業に取り組み，住み良い環境づくりを推進している。

平成６年４月１日現在の人口は33,276人を数え，これに比例して小・中学校の児童生徒数も増加の一途を辿り，教育環境の整備を等閑にできない重要課題である。

友部町には小学校５校，中学校２校が設置されているが，小学校の児童数を概観すると，平成６年４月１日現在で宍戸小19学級522名，友部小26学級823名，北川根小13学級396名，大原小10学級275名，友部二小18学級561名，合計2,607名となる。

この児童数は，茨城県水戸教育事務所管内24市町村（４市・14町・６村）の中でも上位に属する順位で，水戸市17,113名，勝田市8,052名，那珂町3,392名，茨城町2,784名につぐ第５位である。

友部町の通学路はおおむね整備されているが，大原小の通学路だけが未整備で国道50号の滝川地内から南へ入って小原神社と大原小学校を経て青木地内に至り，涸沼前川に架かる江戸橋付近までの延長約2,000ｍの町道１級３号線が，もっとも危険な通学路となっている。

この道路は大原小学校の正門前を通過する幅員４ｍの通学路であるが，国道50号と友部市街地を結ぶ肋骨道路でもあるため，自動車の交通量が多く，登・下校時の児童たちは常に交通事故の危険に曝されている。そこで友部町は児童たちの交通安全を確保するため，全線にわたって歩道（幅2.5ｍ）を設けた幅員10ｍの拡幅改良工事を実施することになった。

道路は小原香取・坂場両遺跡内を通過することになるので，工事着工前に記録保存のための発掘調査を行うことになり，平成５年10月13日発掘調査会を組織し，茨城県埋蔵文化財指導員千種重樹を調査担当者とし，平成５年10月15日から11月29日まで発掘調査を実施した。

第二章　遺跡の位置と地理的環境

小原香取遺跡は茨城県西茨城郡友部町大字小原字香取3959外に，坂場遺跡は茨城県西茨城郡友部町大字小原字坂場4112外に所在する。

『友部町史』（友部町史編さん委員会・平成２年３月）は両遺跡について次のように記述している。

小原香取遺跡

「国道50号線の滝川地内から大原小学校をへて青木地内に通ずる町道を入ると上郷小原神社がある。この神社を取り囲むように遺跡がある。

遺跡のある台地の南側には涸沼前川が流れている。この川にかかる川原橋あたりから遺跡の南東側にあたる不動谷津池にむかって谷津が入り込む小川かあり，涸沼前川に流れこむ。

遺跡はこの舌状台地のふもとにあたり，標高75ｍから85ｍの平坦部と緩斜面で，桑畑・畑地・栗畑から構成されている。

神社の東側から南側にかけて，土器片が多量に散布している。土器片は縄文中期の加曽利Ｅ$_{1}$，Ｅ$_{3}$式である。

神社の南西側からは縄文中期の阿玉台式土器，北側は少量であるが縄文中期の土器片を確認できた。縄文中期の研究には重要な遺跡であろう。

坂場遺跡

国道50号線，滝川集落より南側の町道を入る。香取神社がある。

神社の東側，南側，西側の桑畑。標高75ｍから85ｍの平坦部及び緩斜面。

縄文中期加曽利Ｅ$_{3}$式，後期安行Ⅱ式。

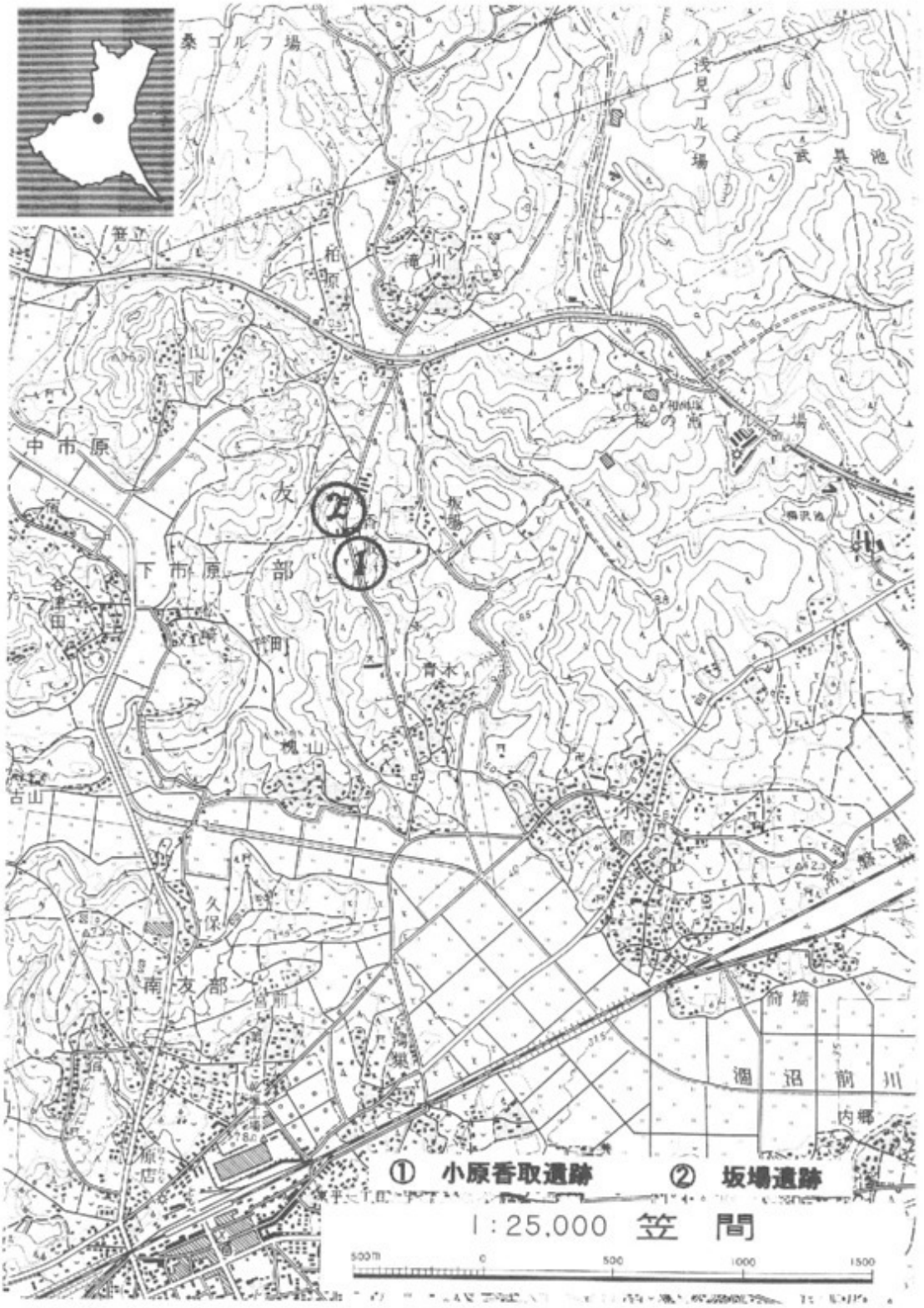
この記述から判断できることは，小原香取・坂場両遺跡はかなりの部分が重複しているということができよう。

友部町の町域を概観すると，北西部は鶏足山塊末端の丘陵性山地，中・南部は東茨城台地の一部を形成し，それらを涸沼川，涸沼前川，枝折川の開析平野が刻んでいる。

遺跡の所在する小原地区は涸沼前川上流域に位置し，町の北西部にあたり，友部丘陵の一角を占める。友部丘陵は八溝山地・鶏足山塊の南縁に発達している丘陵で，広義には水戸市北西部から内原町，友部町，笠間市，岩瀬盆地周縁まで分布するが，狭義には内原町から友部町にかけて東西に長く南北に狭い丘陵をいう。

比較的起伏が少なく，かなり広い平坦面を残している。更新世の海成砂礫層からなり，上部に関東ローム層を載せている。南関東の多摩面に対比され，古い海岸平野または海岸段丘が開析されたものと考えられている。

水戸市全隈町付近で標高50～80ｍ前後，遺跡付近は標高80ｍ前後となっている。



第一図　小原香取・坂場遺跡位置図，付近地形図

第三章　縄文時代遺跡概観

友部町は昭和30年１月15日，宍戸町・大原村・北川根村が合併して成立した。現在の総面積は58.73㎢である。

笠間市北部の国見山と，水戸市・東茨城郡常北町・笠間市の境にある朝房山に源を発し，涸沼に注ぐ延長63.3㎞の涸沼川と，友部町上市原を上流端とし，東南流して東茨城郡茨城町で涸沼川に合流する延長21.2㎞の涸沼前川を挟む両岸の台地は，縄文時代から人々の生活の場であった。

昭和62年，茨城県教育委員会発行の『埋蔵文化財包蔵地地名一覧表』には，友部町の縄文時代遺跡24か所が登載されているが，平成２年発行の『友部町史』には36か所の縄文時代遺跡が紹介されている。

これは，町史編纂の資料収集のために綿密な見直し分布調査が行われた結果であろう。

文化庁への未登録遺跡もあるが，『町史』に掲載されたからには周知化された遺跡であると見做すことができよう。

本章では『友部町史』の記述を参考に，友部町内の主要な縄文時代遺跡を概観してみたい。

１　石山神遺跡　（先土器～前期）

北山不動尊の山道を登って行くと新池に至る。新池の急カーブの道を登りつめると３叉路にあたる。左折して笠間市外３町広域斎場に向う途中の標高100ｍの位置に遺跡がある。

現在ここには茨城県教育研修センターが立地している。

平成元年９月に茨城県教育財団が発掘調査を行い，縄文時代早期後半と前期に位置づけられる竪穴住居址５軒，炉穴25基，土壙500基，狩猟用の落し穴25基が確認された。

遺物としては，琥珀の玉，蛇紋岩の首飾り，滑石の玦状耳飾りなどの石製装飾品や尖頭器も出土している。

２　柏井遺跡　（中期～晩期）

涸沼川と，その支流である枝折川の合流点から枝折川の上流に向って1.5㎞の北側の台地に位置する。台地は標高27～30ｍで桑畑，栗畑，畑地となっている。

縄文土器片の豊富な分布地で，口縁部，胴部，底部などの土器片が採集された。

これらの土器片は縄文中期の阿玉台式・加曽利ＥⅡ式，後期のものとしては加曽利Ｂ式・安行Ⅱ式，晩期の安行Ⅲａ式土器で，縄文中期から晩期にいたる遺跡であることが確認されている。

また，茨城県立歴史館に保管されている土版が発見された遺跡でもある。

３　北山不動遺跡　（中期～後期）

南友部金平1436ほかに所在する。

県立友部高校入口付近からＳＫＢ友部射撃場と白鳥湖の傍らを通って北山不動尊の西側の山道

を登って行くと新池がある。右折して町営グランドを左に見ながら進むと常陸霊園に至る。

霊園管理事務所の南側の標高98mの台地平坦部が本遺跡である。

水道タンク建設と町道2級4号線拡幅改良工事に伴う記録保存のための発掘調査が，平成2年6月から平成3年9月にかけて行われ，縄文時代中期中葉の竪穴住居址1軒，中期～後期の土壙39基，屋外埋甕炉址5基，石囲炉址1基，有床平地式住居址1軒などが発見された。

出土遺物は中期後葉の加曽利ＥⅡ式土器のほかに，石鏃，石斧，石棒，石剣，凹石，石皿，砥石などが発見された。

4　橋爪遺跡　（中期～後期）

県立友部病院から橋爪地内に通ずる道路，常磐線にかかる大沢跨線橋をわたり，老人憩いの家に向う南側の畑地，桑畑が本遺跡で，南側の涸沼川からの水田が広がっている先端部までの台地で広い範囲である。標高25～40mである。

本遺跡からは，縄文中期の加曽利ＥⅡ式や後期の安行式土器片が採集されているが，平成6年3月，宅地造成に伴う部分的な発掘調査が行われ，中期後葉の加曽利ＥⅡ式土器をはじめ，土製円板が出土した。

石器は，石鏃，石斧，磨石，敲石，石皿などが出土した。

5　松崎台遺跡　（中期）

涸沼前川にかかる古山橋の東側の台地の先端部で，台地の南東部には槻山池がある。

台地の地目は畑地，栗畑，桑畑，山林である。標高60～70mの平坦部及び緩斜面に縄文土器が多量に散布している。

縄文中期の加曽利Ｅ式や阿玉台式が中心である。

このほかにも釈迦堂遺跡・仁古田遺跡・西仁古田遺跡・住吉遺跡・寺山遺跡・川郷地池西側遺跡・上郷遺跡・長兎路遺跡・大古山遺跡・山内金山遺跡・撰子池遺跡・御城遺跡・宮前本郷遺跡・久保遺跡・家前遺跡・五平内郷遺跡・本郷遺跡・下宿遺跡・稲荷神社北側遺跡・南小泉遺跡・善九郎遺跡・内田遺跡・完全寺遺跡・八幡台遺跡・城の内遺跡・屋山遺跡など数多くの縄文遺跡があり，友部町は原始・古代の研究には事欠かない地域であるということができよう。

第四章　発掘調査の概要

今回の調査は町道１級３号線の拡幅改良工事に伴う記録保存のための発掘調査である。

拡幅工事のための用地買収予定面積は7,362㎡であるが，未買収の部分がかなり残っており，調査の対象となる面積は小原香取遺跡が約3,800㎡，坂場遺跡は約200㎡である。

調査方法はトレンチ法とし，遺構が部分確認された場合でも拡幅予定区域内の範囲でプランを拡張するにとどめるという制約を余儀なくされた。

このような状況下で設定したトレンチは次のとおりである。（第二・三図参照）

坂場遺跡	第１トレンチ	幅２ｍ	長さ50ｍ	面積100㎡	南北方向
小原香取遺跡	第２トレンチ	幅２ｍ	長さ20ｍ	面積 40㎡	南北方向
	第３トレンチ	幅４ｍ	長さ70ｍ	面積280㎡	南北方向
	第４トレンチ	幅２ｍ	長さ30ｍ	面積 60㎡	南北方向
	第５トレンチ	幅２ｍ	長さ50ｍ	面積100㎡	南北方向

発掘したトレンチの総面積は580㎡で拡張した部分を含めても約600㎡である。

これは遺跡全体の面積からみればまことに狭小で，この調査の結果から遺跡全体を律することは到底不可能であるが，確認された遺構は次のようにまとめることができる。

第１トレンチ　竪穴状遺構１基　溝状遺構１条

第２トレンチ　土壙４基　溝状遺構１条　ピット２個

第３トレンチ　竪穴住居址１軒　土壙６基　ピット２個

第４トレンチ　遺構検出なし

第５トレンチ　落し穴状遺構１基　屋外炉址２基　溝状遺構２条

これらの遺構のうち第１トレンチの溝状遺構からは内耳土器が出土しているので11世紀以降と考えられるが，この遺構以外は阿玉台式土器を中心とする縄文時代中期前葉の遺構である。

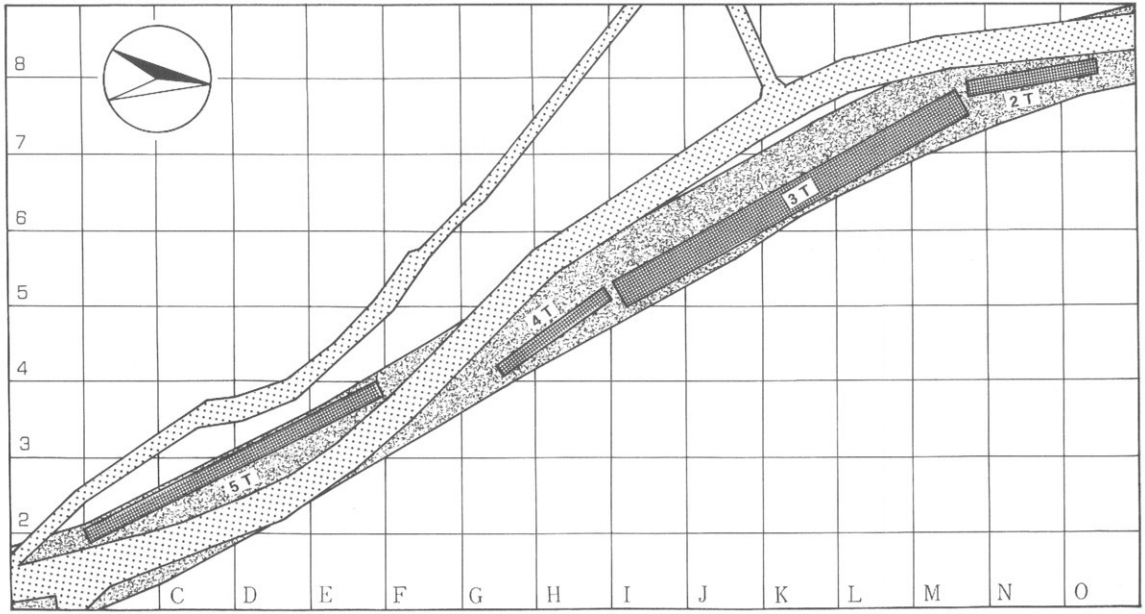
周辺部にはこうした種類の遺構が多数埋没し，大きな集落を構成しているように思われる。

調査方法は，遺構が確認できた時点から記録することにつとめた。すべての遺物を原位置のまま柱状に残し，出土地点番号（遺物番号と同一）・表裏関係・出土レベルを記録し，合せてその状態を観察して収納することにした。

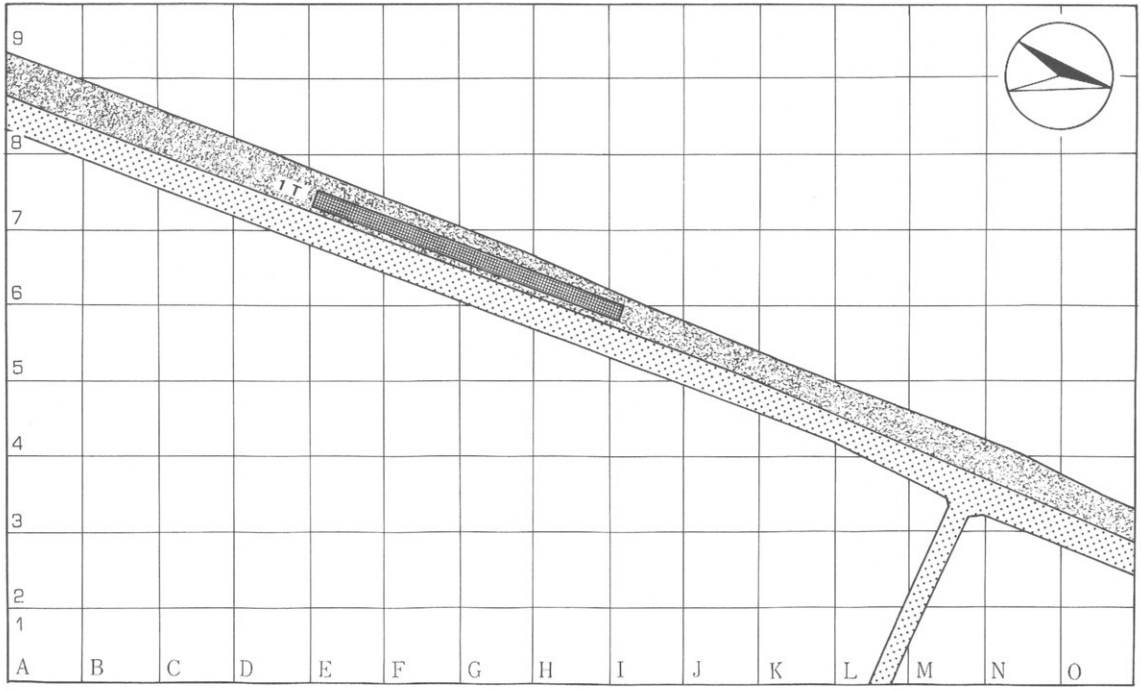
このことは個々の遺物を研究上の基礎資料として活用する際に重要な意味をもつことになる。

したがって，従来から終始一貫堅持してきたいわゆる“原位置論による発掘法”を，今回も可能なかぎり採用実践することにした。

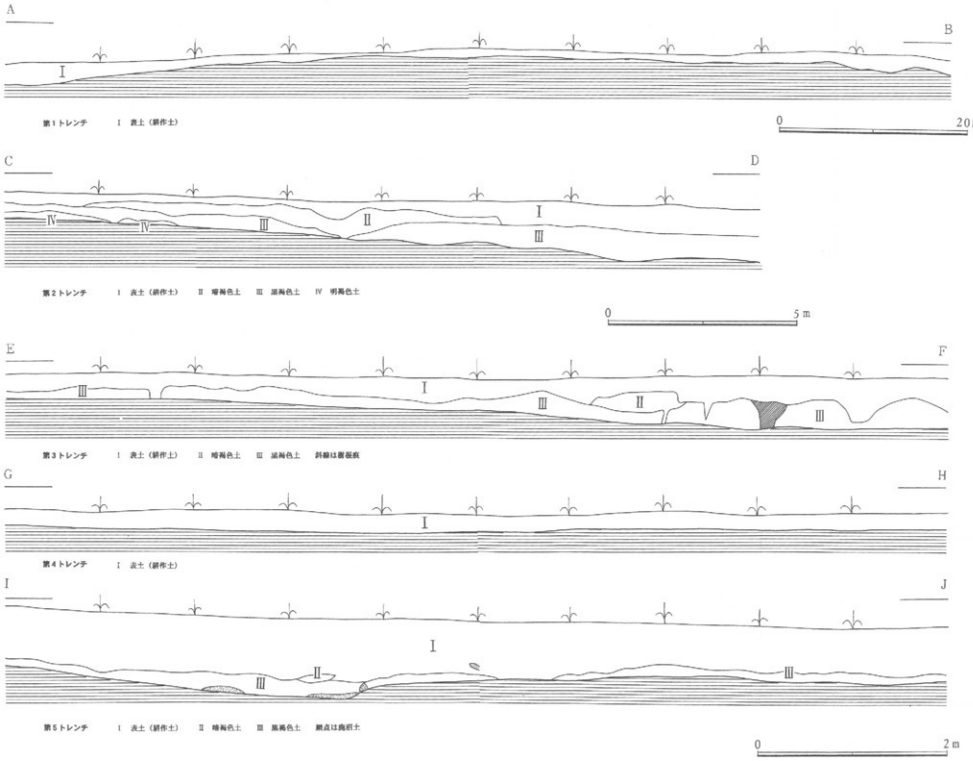
また，完形品や大形破片については，時間の許すかぎり，実測図にその形を記録することにつとめた。



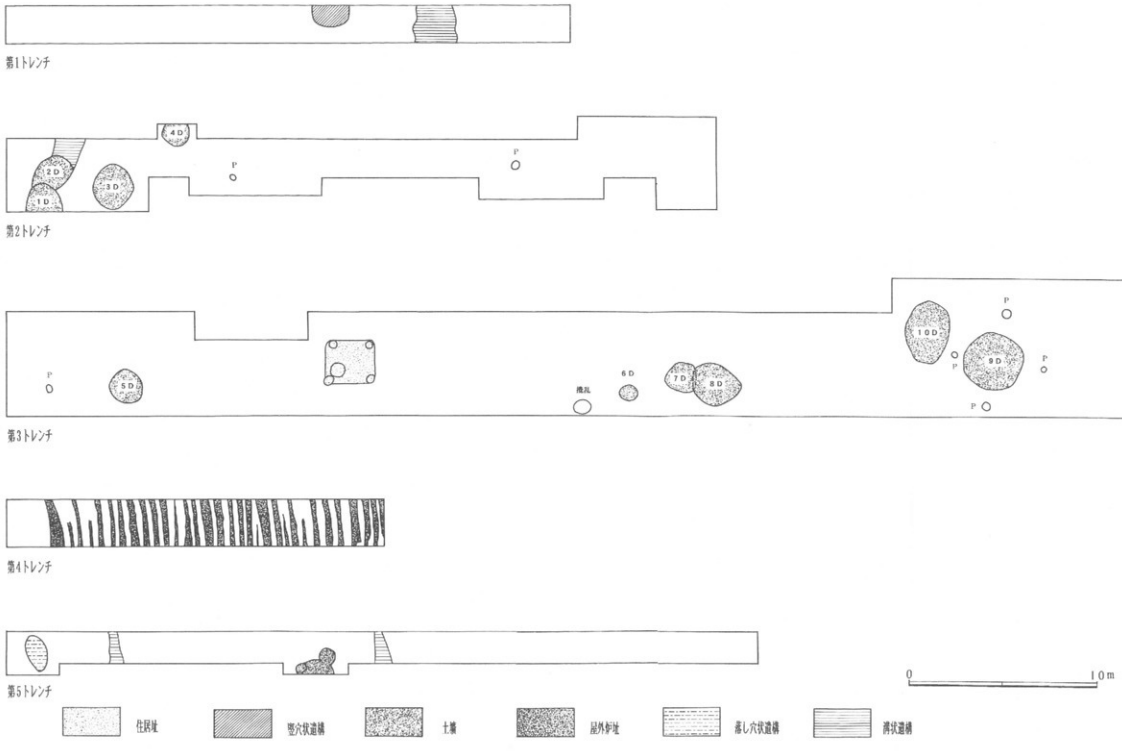
第二図　小原香取遺跡調査区トレンチ設定図



第三図　坂場遺跡調査区トレンチ設定図



第四図　トレンチ土層断面図


第1トレンチ
第2トレンチ
第3トレンチ
第4トレンチ
第5トレンチ
1D
2D
3D
4D
5D
6D
7D
8D
9D
10D
P
0
10m
住居址
竪穴状遺構
土壙
屋外炉址
落し穴状遺構
溝状遺構

第五図　遺構分布図

第五章　竪穴住居址の調査

1　第一号住居址

遺存状態　本址は，第３トレンチの北端部から17ｍほど南側へ寄った位置からプランの全容を確認した。ローム確認面上には明瞭な黒色土の隅丸長方形状のプランを確認したが，東側が低い緩斜面上に構築されており，竪穴西壁の掘り込みに対して中央部より東側は極端に浅くなっている。おそらく黒色土面から構築されたものと思われる。

形状・規模　平面形状は隅丸長方形を呈し，東壁（Ｘ－Ｙ間）2.65m，西壁（Ｗ－Ｚ間）2.60m，南壁（Ｙ－Ｚ間）2.20m，北壁（Ｗ－Ｘ間）2.20ｍの各辺長を測り，面積は5.7㎡前後となるだろう。

現存する壁高は西側がわずかに８㎝の高さで残っているが，東側の壁面はほとんど残存しない。構築時の高さを明らかにすることはできないが，もっと高たっかものと思われる。

床　面　Ｗコーナーとコーナーを結ぶ対角線の西側は平坦で硬度３，東側は硬度２に相当する。硬度２の床面には凹凸が存在する。

中央より北壁寄りのＷコーナー近くに石組炉が構築されている。

柱　穴　床面からは12個のピットが検出された。このうちＸ・Ｙ・Ｚコーナー付近に各１個，Ｗコーナーに２個の計５個のピット（P_1～P_5）が柱穴と考えられる。

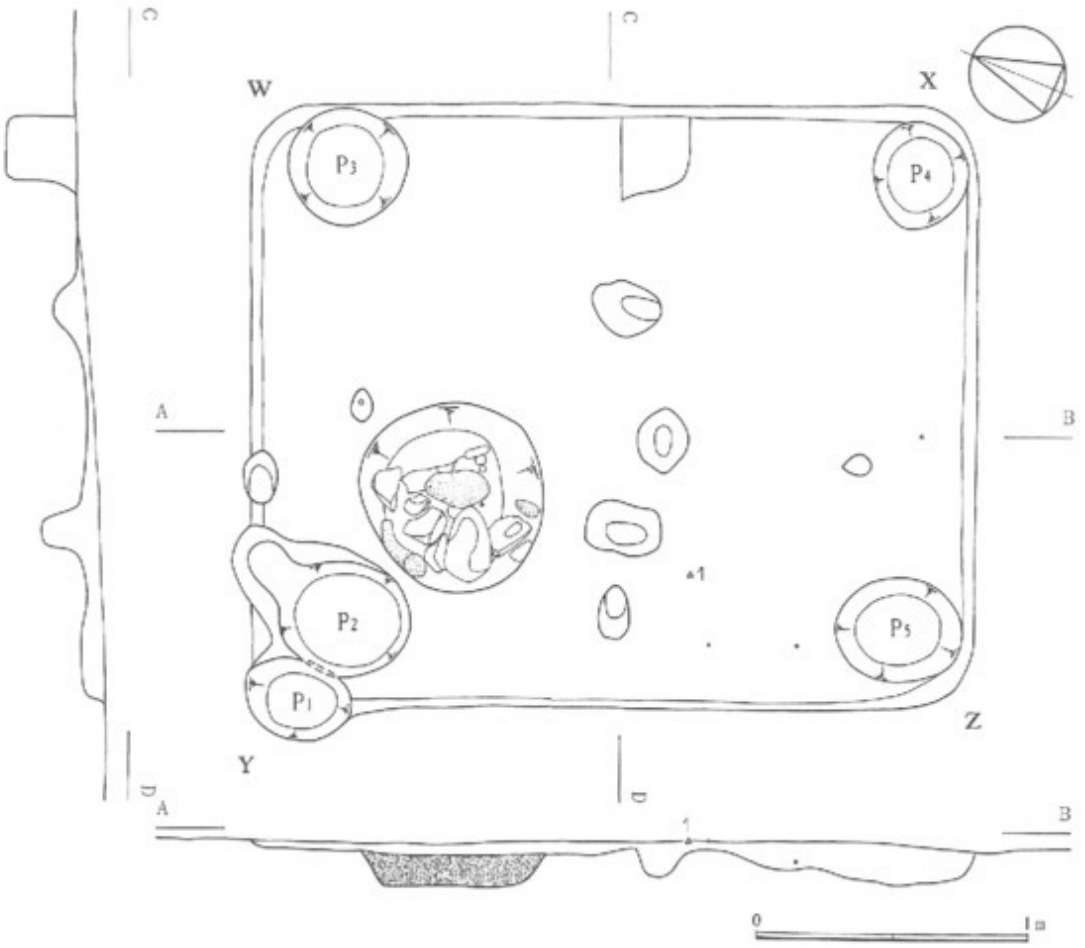
これらのピットを観察すると，ＷコーナーのP_1は直径約35㎝，深さ72㎝，P_2は約40㎝，深さ80㎝，ＸコーナーのP_3は直径約40㎝，深さ64㎝，ＹコーナーのP_4は直径約35㎝，深さ65㎝，ＺコーナーのP_5は直径約40㎝，深さ80㎝で，各コーナーを結ぶ対角線上に位置することや，規模がほぼ共通していることから考えて，この５個のピットは主柱穴と見做してよいだろう。

P_6～P_{12}の７個の小ピットは補助柱穴と木根腐朽穴と思われる。

埋没土　Ａ－Ｂ・Ｃ－Ｄセクションに現れた埋没土の性状を観察すると，埋没土層断面の全体に微量のローム粒子を混入する黒褐色土が堆積する。竪穴住居址としては埋没土の堆積量が２～15㎝ときわめて浅く，水戸市薬王院東遺跡のように周壁に黒色土を利用したことも考えられる。

遺物の出土状態　本址の出土遺物はわずかに縄文土器破片４個にすぎない。平面分布状態をみても空白部が大部分を占め，Ｚコーナー付近だけに偏在する。小破片でいずれも摩滅がいちぢるしく拓影資料にはならなかった。

集石炉址　Ｗコーナー付近より検出された。規模は東－西径70㎝，南－北径68㎝，住居址の床面を11㎝ほど掘り下げ，15個のこぶし大の石が積まれていた。これらの石は風化が顕著で収納不可能なものが多かった。本址の場合は，床面に凹みを設けて焼石を置き，その上に食物をのせ，さらに焼石を積んで蒸焼きにするアース・オーブン法の炉址ではないかと思われる。



第六図　第一号竪穴住居址実測図，遺物出土状態図

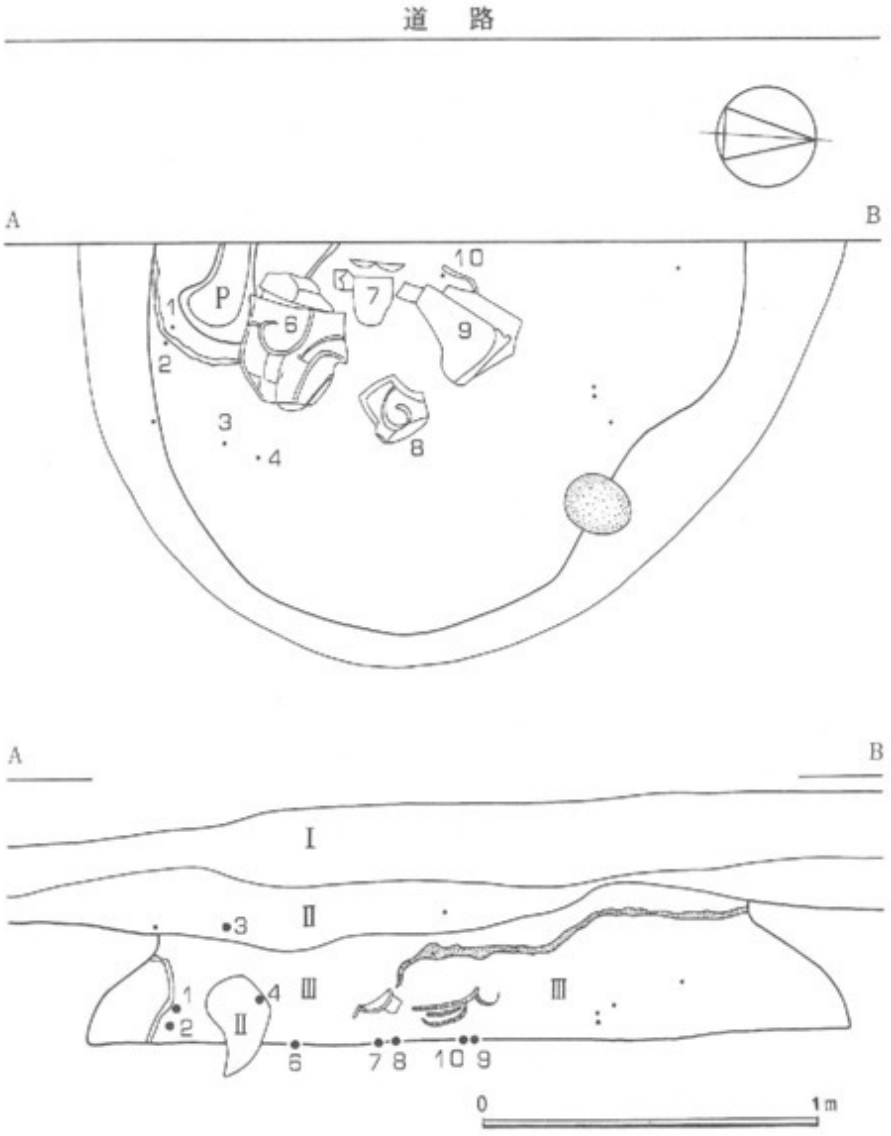
第六章　縄文時代土壙群の調査

1　第一号土壙

本土壙は，小原香取遺跡第２トレンチの北端部より検出された。

プランの西側約50％は道路の下に埋没しており完掘することはできなかった。

検出された部分の開口部の大きさは，東－西115cm，南－北175cmを計測し，平面形はおおむね半円形を呈する。深さは中心部で32cmを測り，底径は東－西127cm，南－北228cmで，底面形もほぼ半円形状である。底面は平坦で踏みかためられており硬度３に相当しよう。



第七図　第一号土壙実測図・遺物出土状態図

道路側に設定したA－Bセクションで断面形を観察すると，開口部からわずかに垂直に掘り下げ，開口部の直径より若干頸部が小さくなって内湾しながら大きく外側に開き，底面は平坦となるフラスコ状（袋状）の断面を呈する。

壁面は堅固で崩落の痕跡は全く認められず，ほぼ原形をとどめている遺存状態の良好な土壙であろうと思われるが，道路下の埋没部分については交通量が多いので陥没の虞があるため，抉り掘り程度にとどめ，完掘することを断念せざるを得なかった。

土壙内の埋没土（Ⅲ）は，微量のローム粒子を混入した暗褐色土が充満し，壁面から崩落したような土砂のブロックは認められない。

しかし，中間層に厚さ2～5㎝の砂鉄状（磁気はない）の層がライ・ビトウィーンしており，第七図に示した範囲で恰も遺物を庇護するように被覆している。

この埋没土の性情は明らかに人為的な埋め戻しであることは言を俟たないが，中間層の存在意義については完掘していないので明確な判断は困難である。

発掘部分からの出土遺物総数は16個で，内訳は縄文土器15個，自然石1個である。

土壙内の遺物出土状態を平面分布のドットから観察すると，中央部より南側に偏在する傾向を指摘できる。

垂直分布のあり方をみると，底面及び底面直上からの出土が多い。

本土壙からは復元可能な阿玉台式の深鉢形土器が出土した。

2　第二号土壙

本土壙は第2トレンチの北端部から確認された。西側は第一号土壙と，東側は第2号溝状遺構と重複している。

開口部の大きさは東－西195㎝，南－北160㎝を計測し，平面形はおおむね楕円形を呈する。

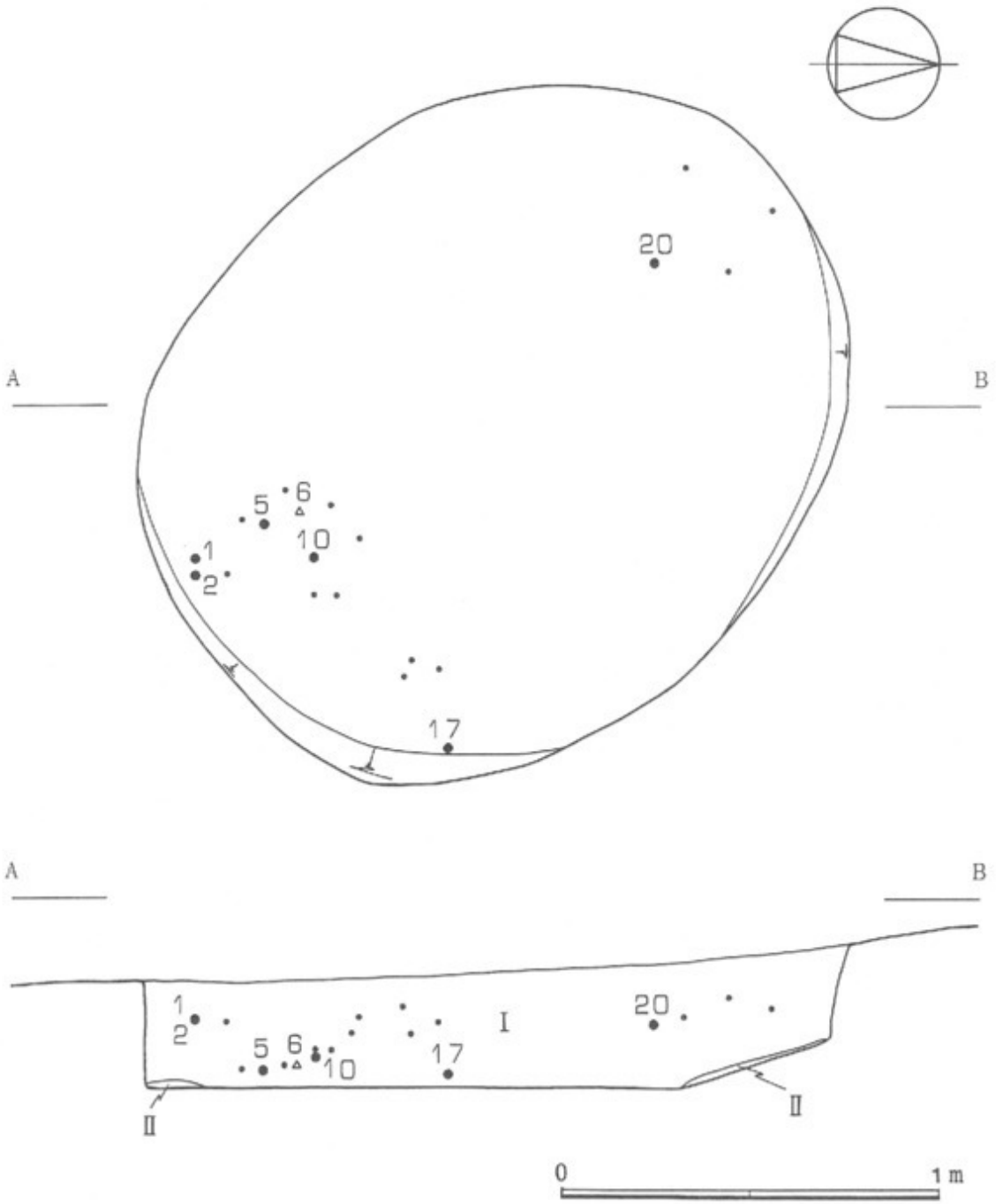
深さは中心部で30㎝を測り，底径は東－西190㎝，南－北155㎝で，底面形も楕円形である。

A－Bセクションで掘り方の断面形を観察すると，南壁はほぼ垂直に掘り下げ，北壁はわずかに斜めに掘り込んでいる。底面は平坦で硬度は3に相当する。底面は黄褐色粘土を踏み固めたものである。壁面は切り合いの部分を除けば比較的堅固である。

土壙内の埋没土は微量のローム粒子を混入する褐色土Ⅰが充満するが，南北両壁下の底面直上部には厚さ2㎝ほどの黄褐色粘土Ⅱが堆積する。

遺物の出土状態を平面分布のドットから観察すると，中央部は全くの空白で，北東隅と南西隅に偏在し，特に南西隅に集中する傾向を指摘することができる。

この状態をA－Bセクションに投影して垂直分布のあり方をみると，中層部から下層部にかけて万遍なく分布している状態を看取することができる。



第八図　第二号土壙実測図，遺物出土状態図

3　第三号土壙

本土壙は第２トレンチ北端部に位置する第二号土壙の南側1.5ｍの位置に部分検出した。

道路ぎりぎりまで西側へ拡張して全容を把握することができた。

確認面の開口部の大きさは，東－西210cm，南－北225cmを測り形状は不整円形を呈する。

中心部の深さは43cmで，底径は東－西260cm，南－北270cmを計測し，底面形も不整円形である。底面は平坦で固く踏みかためられており，硬度は３に相当する。

Ａ－Ｂセクションで断面形を観察すると，外側に大きく膨らんで掘り込まれており袋状を呈する。壁面の崩落は認められない。

土壙内の埋没土の性状は，ローム粒子とローム小ブロックを混入する褐色土の単一層である。

中央部より南側はやや黒色の色調が強くなるが，明確な区分線を引けるほどの変化ではない。

この埋没土の堆積状態は，明らかに人為的埋め戻しによるものである。

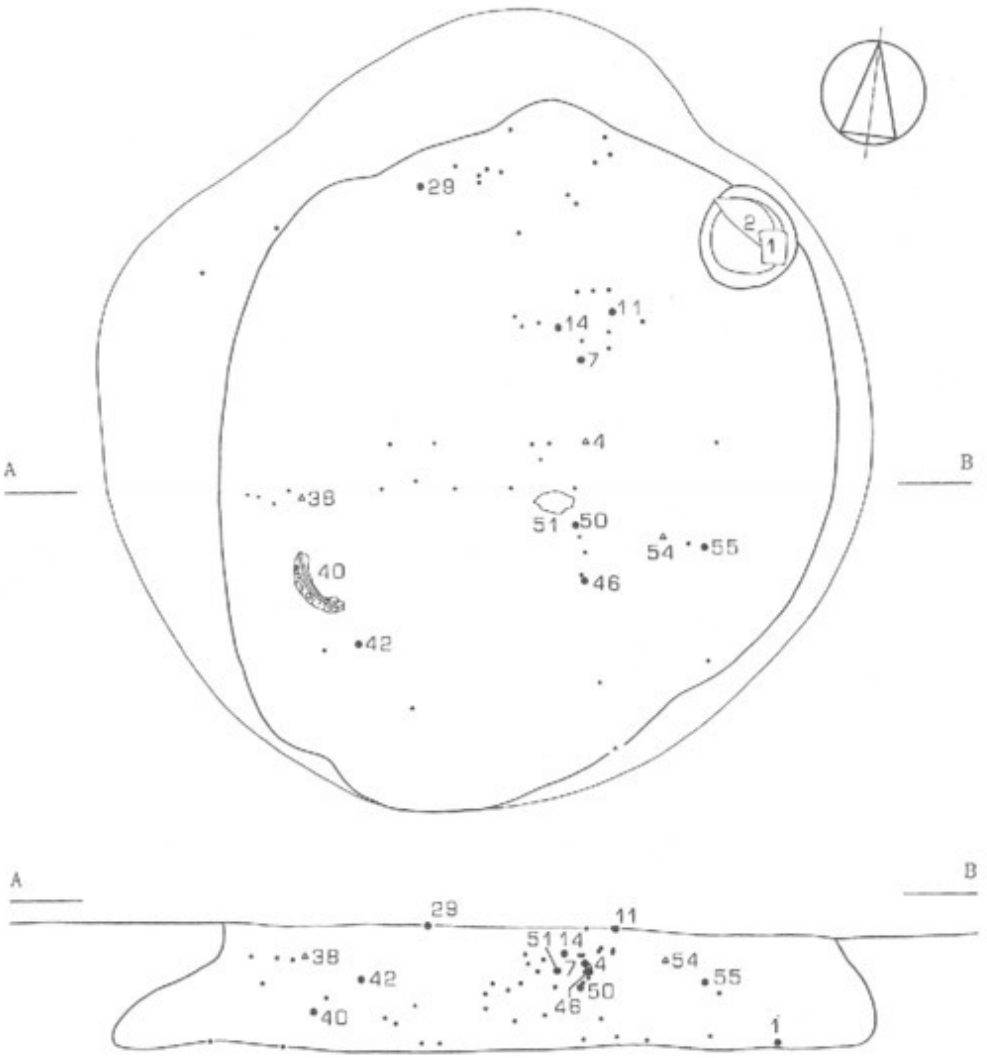
北東部の壁際に径35cm，深さ76cmのピットが１個存在する。本土壙に付随して掘られたものであろう。

出土遺物総数は64個で，内訳は縄文土器片55個，自然石６個，石器３個である。

縄文土器片55個の表裏関係は，表（△）25個，45.5%，裏（▽）23個，41.8%，立ち〈▷）７個，12.7%という比率になる。

遺物の出土状態をドットマップによって観察すると，平面分布のあり方は開口部の範囲内に平均的に散在し，特に変った傾向は指摘できない。

Ａ－Ｂセクションの断面図に投影したドットの垂直分布は，確認面から底面付近までまばらに存在するが，主として中層部にまとまりをみせている。



第九図　第三号土壙実測図，遺物出土状態図

4　第四号土壙

本土壙は第２トレンチの北端部より８ｍほど南側へ寄った東壁際に部分検出された。

許容範囲の限界まで拡張したが全容を捉えることはできなかった。完掘したかった土壙である。

開口部の平面プランは，東－西145cm（推定），南－北150cmを測り，開口部平面形状は円形を呈するものと思われる。

ローム確認面からの深さは中心部で90cmを測るが，東壁をセクションとした埋没土の層序のあり方を観察すると，本土壙の掘削の時点で関東ローム層の上に有機質土壌つまり黒色土および黒褐色土が30cmほどの厚さで堆積しており，この面から掘り込んでいる様相が窺える。

したがって，掘削当時の深さは120cm前後ではなかったかと思われる。

断面形は開口部径150cmに対して頸部が小さくなって内湾しながら外側に開き，袋状に底部がひろがっている。底面はほぼ平坦で硬度は３に相当する。

底径は東－西200cm（推定），南－北200cm，底面形も円形とみてよいだろう。

壁面は，調査区域外については不明であるが，発掘部に限れば比較的堅固で，崩落は認められず良好な遺存状態といえる。

土壙内の埋没土は，黒色土がベースでローム粒子を多量に混入する暗褐色土の単一層であるが，中間に黄褐色粘土ブロックと炭化物を混入する褐色土層が介在する。

土壙内の出土遺物総数は119個を数える。内訳は縄文土器片113個，自然石６個である。

縄文土器片113個の表裏関係は，表（△）57個，50.4%，裏（▽）42個，37.2%，立ち14個，12.4%という割合になる。

遺物の出土状態をドットマップによって観察すると，平面分布のあり方はすべての遺物が開口部の範囲内に分布している。

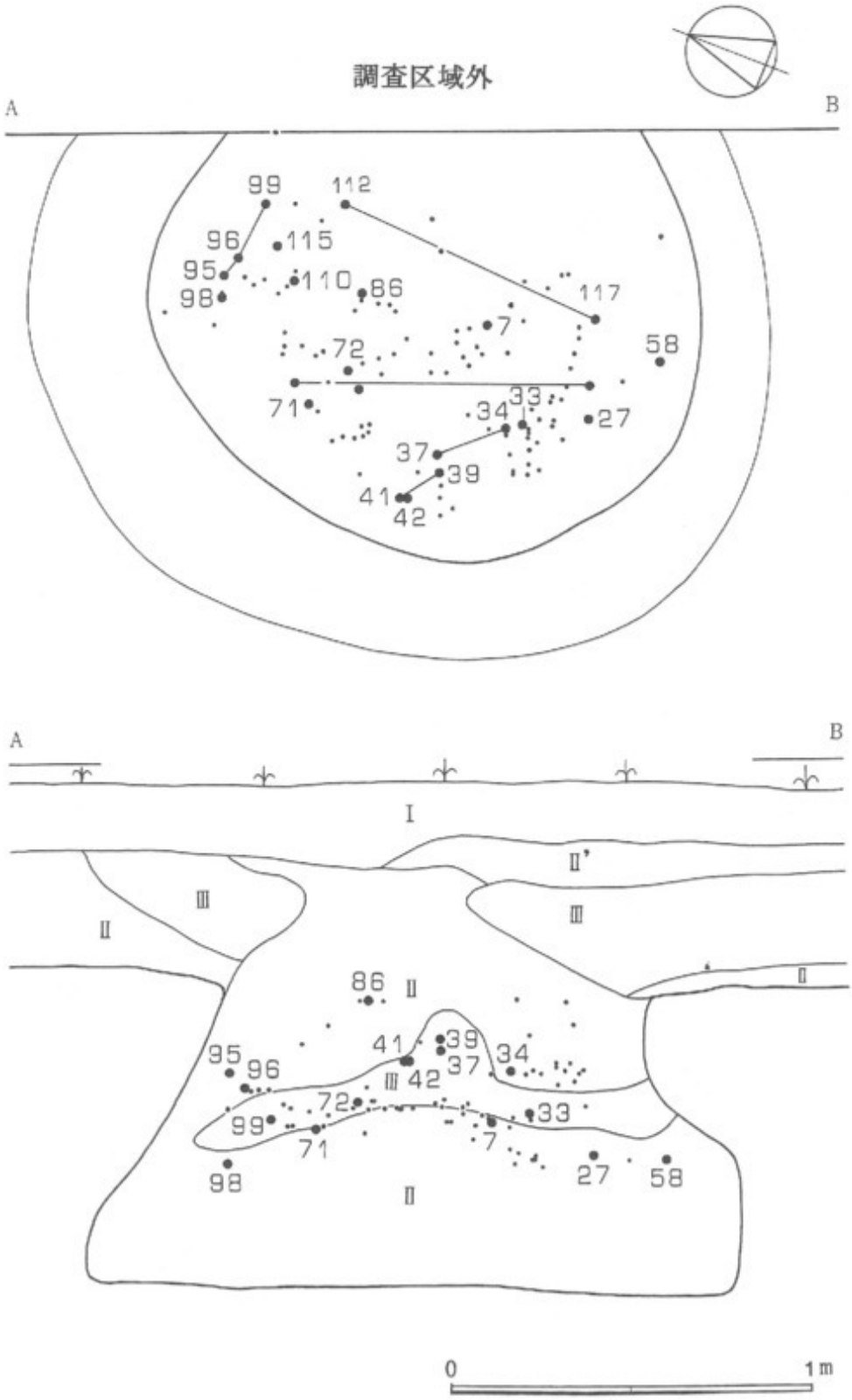
東壁側にやや空白の部分が認められるけれども，おおむね平均に散在しており，平面分布のあり方には特に変った傾向は指摘できない。

Ａ－Ｂセクションの断面図に投影したドットの垂直分布は，開口部と底面付近は皆無で，中層部に集中する状態を看取することができる。

接合資料には５例を抽出することができたが，平面図に現れた接合線のあり方をみると，遺物番号58を基点として方位記号と同じ指向方向で扇形状に展開している。

これは，土器の投棄の際における飛散状況を示すもので，遺物の一括投棄の同時性と方向性を示唆するもので，接合線の方向が端的にそれを物語っているといっても過言ではあるまい。

この事象は，土壙の時期決定に有力な資料となるものである。



第一〇図　第四号土壙実測図，遺物出土状態図，接合関係図

5　第五号土壙

本土壙は第３トレンチの北端部寄り西壁際からプランの全容を確認した。

開口部の大きさは東－西180cm，南－北175cmを測り，開口部平面形状は円形を呈する。

中心部の深さは46cmで，底径は東－西220cm，南－北220cmを計測し，底面形も円形である。

底面は平坦で固く踏みかためられており，底面硬度は３に相当する。

Ａ－Ｂセクションによって掘り方の断面形を観察すると，開口部から内湾気味に外側に大きく膨らんで掘り込まれており，断面は袋状（フラスコ状）を呈する。

壁面は堅固で遺存状態の良好な土壙である。開口部北壁の崩落痕は，調査期間中の11月３日夜の大雨によって完掘後に崩落したものである。

土壙内の埋没土は２層に区分することができる。この識別は極めて明瞭である。

底面上の下層には，黒色土がベースでローム粒子・ローム小ブロックを混入する褐色土Ⅱが堆積し，上層には黒褐色土Ⅰが堆積する。

この埋没土の性状と区分線のあり方は，周囲の土砂の自然流入とは考えられず，明らかに人為的な埋め戻しによるものである。

土壙内の出土遺物総数は74個を数える。内訳は縄文土器片70個，自然石４個である。

縄文土器片70個の表裏関係は，表（△）40個，57.2%，裏（▽）29個，41.4%，立ち（▷）１個，1.4%という比率になる。

遺物の出土状態をドットマップによって観察すると，平面分布のあり方は土壙内の全面から万遍なく出土しており，特に変った傾向は指摘できない。

Ａ－Ｂセクションの断面図に投影したドットの垂直分布をみても，確認面から底面直上までまばらに散在している。

本土壙からは一部欠損品，半完形品，復元可能品など大形破片が数多く出土しており，本調査区ではもっとも良好な資料が出土した土壙である。

これらの遺物の大部分は，底面上あるいは底面付近から出土している。

遺物番号69浅鉢形土器の接合線のあり方は，遺物投棄の方向性を示唆するものであろう。

6　第六号土壙

本土壙は第３トレンチ中央部付近の西壁寄りの位置から全容プランを確認した。

確認面開口部は不整形を呈し東西径105cm，南北径140cmを測る。頸部はほぼ円形を呈して90cm，底面の径は180cm，深さは70cmである。断面形は典型的な袋状を呈する。

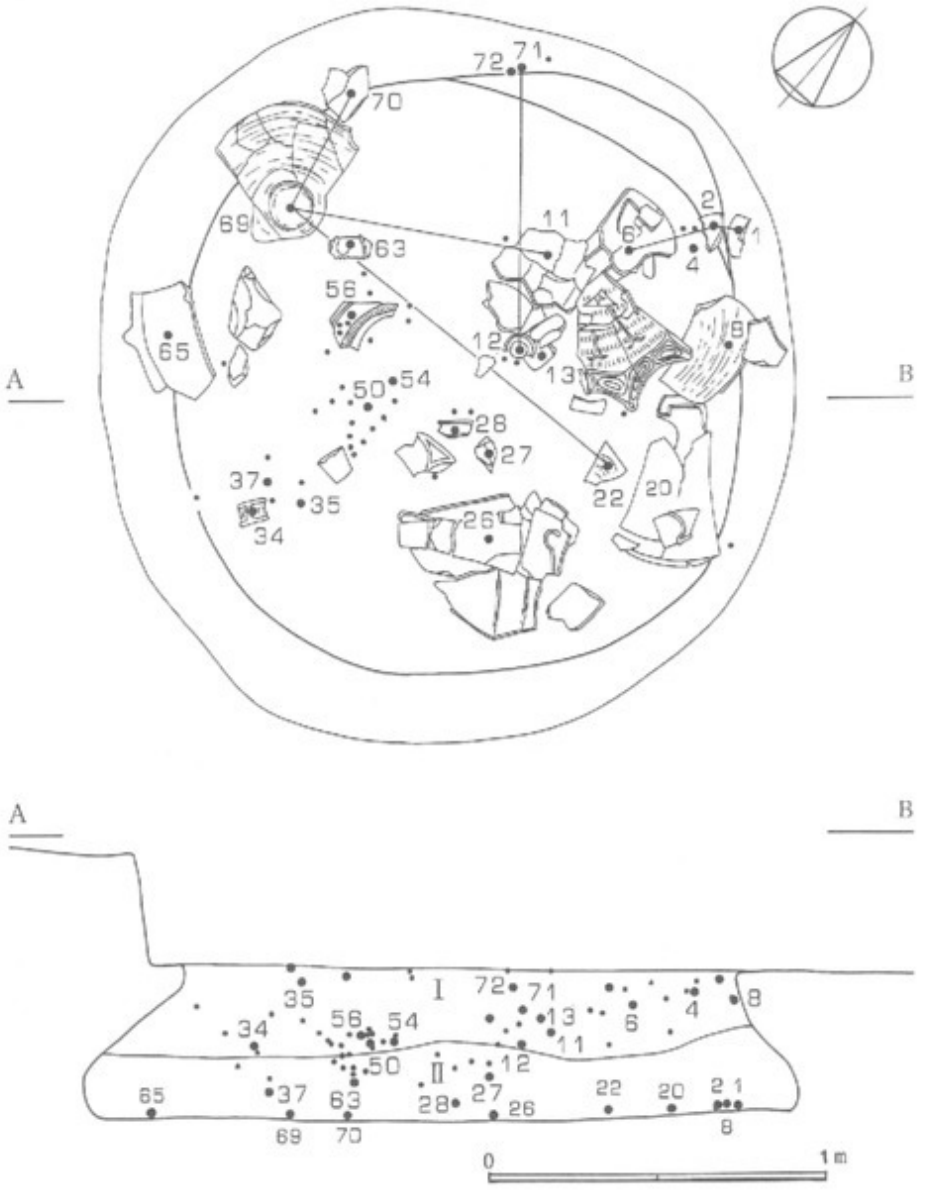
確認面より40cm以下は鹿沼層を掘り込んでおり，底面はロームと鹿沼土の混合土で硬度３程度に踏み固めている。

埋没土は2層に区分でき，底面からローム粒子と鹿沼土の混合明褐色土，黒褐色土の順に堆積する。中間層には木炭細片や焼土粒子も含まれている。

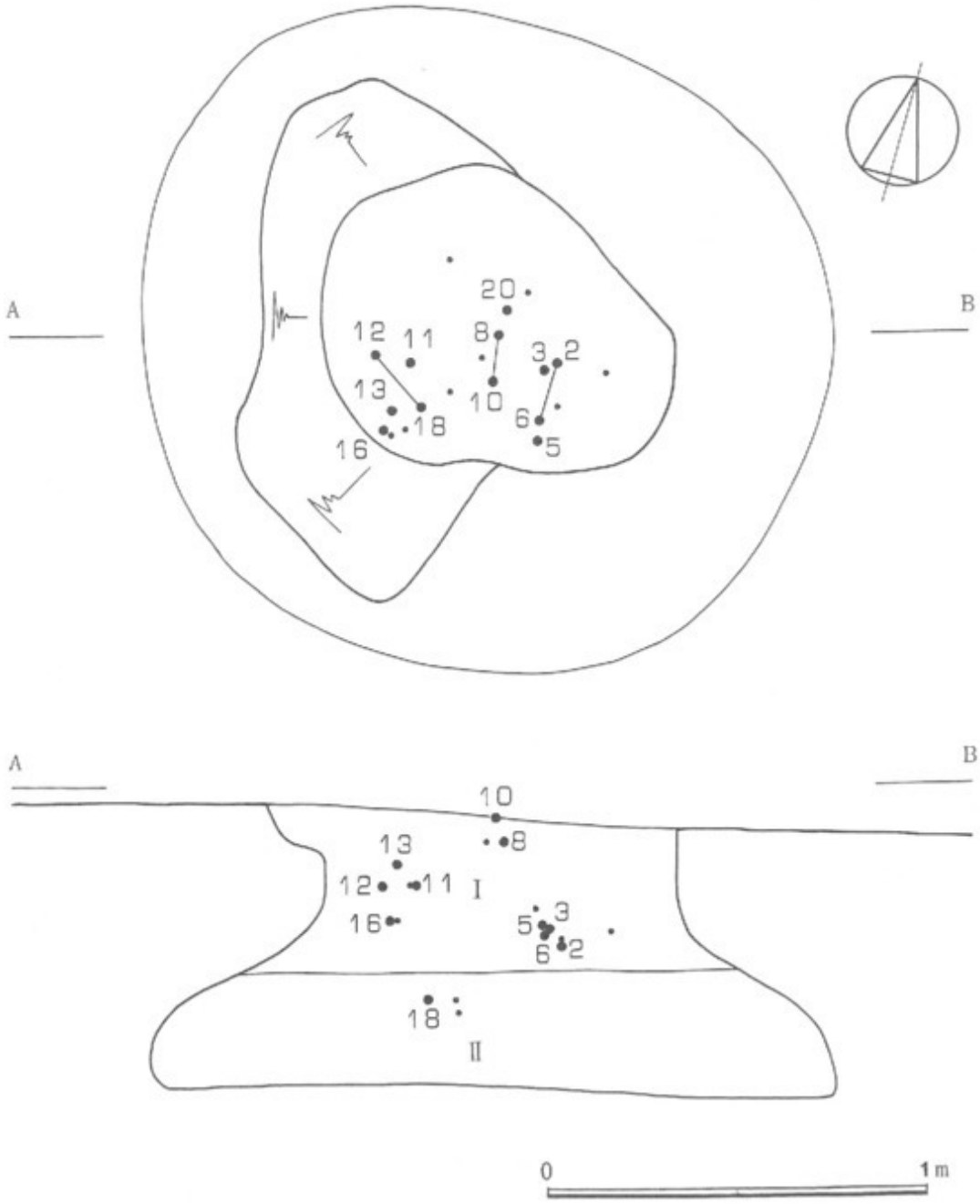
こうした土層の堆積状態と性状は，人為的に埋め戻した土砂であることは多言を要しない。

土壙内の出土遺物総数は縄文土器片20個である。平面分布のあり方は，すべての遺物が頸部の範囲内に散在し，垂直分布は確認面から中間層にかけてまとまりをみせている。

接合資料は3例を抽出することができた。



第――図　第五号土壙実測図・遺物出土状態図・土器接合関係図



第一二図　第六号土壙実測図・遺物出土状態図・接合関係図

7　第七号土壙

本土壙は第３トレンチ中央部よりやや南側へ寄った位置から全容プランを確認した。

南側の一部は第八号土壙と重複している。

第八号土壙の北壁部分を破壊して第七号土壙が掘られており，両者の新旧関係は第八号が旧く第七号が新しい。

確認面開口部の大きさは東－西径150cm，南－北径145cmを測り，開口部の平面形状は不整円形を呈する。

中心部の深さは25cmで，底径は東－西160cm，南－北160cmを計測し，底面形も不整円形である。

断面形をＡ－Ｂセクションでみると，南北の両壁面はわずかに外側に膨らんで掘り込まれており，浅いけれども小規模の袋状を呈する。底面はおおむね平坦で硬度は３に近い。

埋没土は２層に区分される。北側は底面から確認面まで微量のローム粒子を含んだ黒色土が堆積し，中央部より南側の確認面付近には第八号土壙との切り合い部に至る範囲で，厚さ10cmほどの暗褐色土が堆積する。この層序と性状は人為による土砂の埋め戻しであることは言を俟たない。

土壙内の出土遺物総数は18個で，内訳は縄文土器17個，石器１個である。

遺物の出土状態をドットマップによって観察すると，平面分布のあり方はきわめて散発的で空白の部分が多い。これを断面図に投影すると底面付近から確認面直下までまばらに散在している。

接合資料は１例が抽出できた。

8　第八号土壙

本土壙は第七号土壙の南側から全容プランを確認した。北壁の一部は第七号土壙構築の際に切断されている。

形状は，開口部の大きさが東－西220cm，南－北250cm（推定）を測り楕円形を呈する。

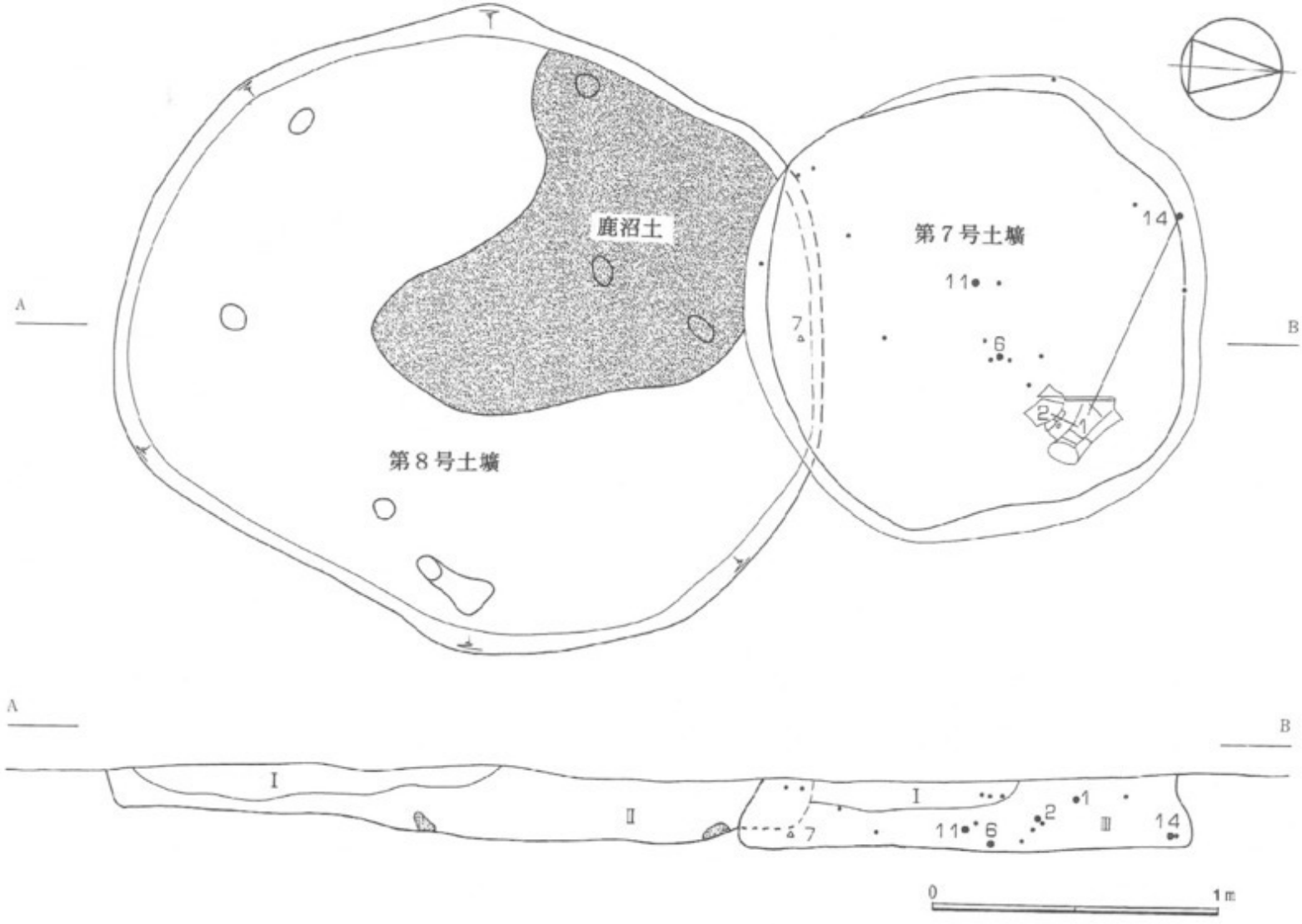
底径は東－西205cm，南－北240cm（推定）で，底面もおおむね楕円形である。

深さは中央部が25cm，南壁際13cm，第七号土壙との切り合い北壁際16cmと全体に浅い。

中央部から北西方向の壁際までの底面には，扇形状に鹿沼層が露出する。底面に硬さはない。

Ａ－Ｂセクションで断面形を観察すると，南壁は内側へ斜めに掘り込まれている。北壁は第七号土壙に切断されているので断定はできないが，切り合い部分の残存状態から判断すると南壁と同様の掘り込みであろうと想定される。周壁際が浅く中央部がやや深い舟底状に近似する断面形であるといえるだろう。底面には深さ10cmほどの小ピットが７個存在する。

土壙内の埋没土は２層に大別できる。底面から確認面まで黒色土とローム混合の褐色土が堆積し，鹿沼ブロックが点在する。中央部から南壁際へかけての確認面直下には，厚さ10cmほどの暗褐土層が存在する。人為的埋め戻しであることは勿論である。出土遺物は皆無である。



第一三図　第七号・第八号土壙実測図・遺物出土状態図

9　第九号土壙

本土壙は第３トレンチの南端部より６ｍほど北側へ寄った位置からプランの全容を確認した。

確認面開口部の大きさは東－西径300cm，南－北径320cmを測り，本調査区ではもっとも大きい土壙で，開口部の平面形状はほぼ円形を呈する。

底部は東－西335cm，南－北355cmで底面もおおむね円形である。

深さは西壁際64cm，中央部63cm，東壁際30cmを計測し，西壁側がやや深くなる傾向がみられる。

Ａ－Ｂセクションで断面形を観察すると，両壁面とも外側へ膨らんで掘り込まれており，袋状を呈している。

掘り込みは田原ローム層（上部関東ローム層）を掘り抜いて底面は鹿沼層に達しており，底面硬度は２程度であるが，中央部から北西方向へ扇形状に展開する底面積の約¼に相当する部分の底面上には，土器破片を一面に敷きつめたいわゆる土器敷が存在し，この面は硬度３に相当する。

土器敷の下からは遺物も遺構も発見されなかった。

底面には６個のピットが存在する。これらのピットの規模を短径×長径・深さ（計測単位cm）の順で表すと次のとおりである。

P_1＝25×43・39，P_2＝14×15・20，P_3＝８×13・14，P_4＝17×23・22，P_5＝17×20・10，P_6＝14×15・21となる。

以上の規模や位置関係から判断すると，土壙内のピットは柱穴のような役割を果していたものではないと思われる。

これに対して壁外の確認面から発見されたP_7，P_8，P_9，P_{10}の４個のピットは，土壙内のピットとは性格を異にする。

壁外から発見された４個のピットの規模は，P_7＝37×40・38，P_8＝35×38・50，P_9＝38×41・38，P_{10}＝25×26・60という計測値である。

この４個のピットはほぼ等間隔で対角線上に配置されていること，口径・深さなどの規模がほぼ共通することなどから総合的に判断すると，柱穴としての要件を備えているように思われる。

４本の柱穴を伴う上屋構造を有する本土壙の性格は，竪穴遺構にも近似するが，前述の土器敷と関連があるものと考えられる。

縄文時代中期末葉に盛行した敷石遺構の特徴と同様に，一般住居説，共同祭祀場説などが脳裡を往来するが，本土壙の場合は底面が鹿沼層で軟弱であるから上記の説は該当しない。

袋状土壙の性格から推考すれば，埋葬施設の可能性も否定できないが，特定することは困難である。

埋没土は３層に大別することができる。底面から褐色土，黒褐色土，暗褐色土の順に堆積し，東壁際に黒褐色土，西壁際には褐色土が小範囲に存在する。下層の褐色土層には鹿沼ブロックが

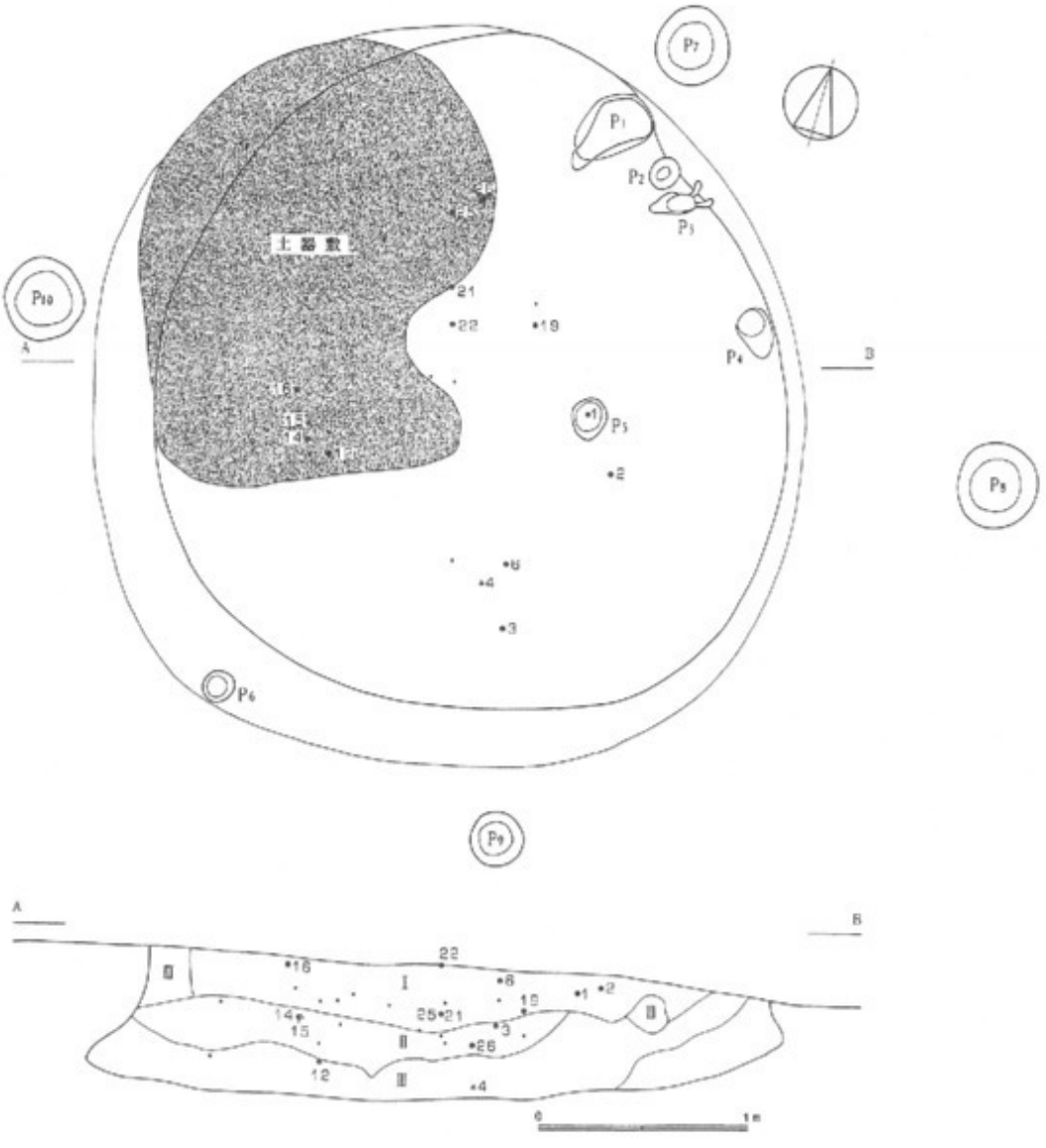
点在する。

この複雑な層序の在り方は，周囲の土砂の自然流入とは考えられず，人為的な埋め戻しであることは明らかである。

土壙内の出土遺物総数は31個で，内訳は縄文土器破片24個，石器２個，自然石５個となる。

ドットマップに記録した平面分布の状態は，きわめて散発的で，中央部にややまとまりをみせてはいるものの，周壁に近い周縁部は全くの空白状態である。

Ａ－Ｂセクションの断面図に投影した垂直分布の姿を観察すると，底面上は皆無で中層から確認面までの間に散在しており，特別な傾向は指摘できない。



第一四図　第九号土壙実測図・遺物出土状態図

10　第一〇号土壙

本土壙は第九号土壙の北側1.5mの位置に部分検出し，トレンチを東側へ拡張して全容を把握した。確認面は東側へ15°の緩斜面である。

開口部の大きさは東－西径320cm，南－北径250cmを測り，開口部の平面形状は楕円形を呈する。底径は東－西155cm，南－北165cmで，底面はほぼ円形である。

中心部の深さは154cmを計測し，鹿沼層の下の宝木ローム層にまで達しているが，底面はやわらかく硬度は1程度である。

断面形を観察すると2段掘り込みのようにみえるが，壁面に固さはなく脆くて崩れやすい。

如上のことから総合的に判断すると，本土壙は規模は大きいけれども土壙というよりはむしろ枯損大樹の風倒木痕と見做した方がよさそうである。

埋没土は底面上に暗褐色土Vが堆積し，その上に確認面まで黒褐色土Iが堆積する。

このI層の中に粘性のある黒色土ブロックが点在する。

西壁際は壁面に沿って，下から茶褐色土VI，鹿沼土III，褐色土IIの順に堆積している。この状態は短時日の間に埋め戻されたことを物語るものである。

遺物は中層から20個が出土している。いずれも縄文土器片であるが，これらの遺物は出土量であって，遺構にかかわる保有量ではない。

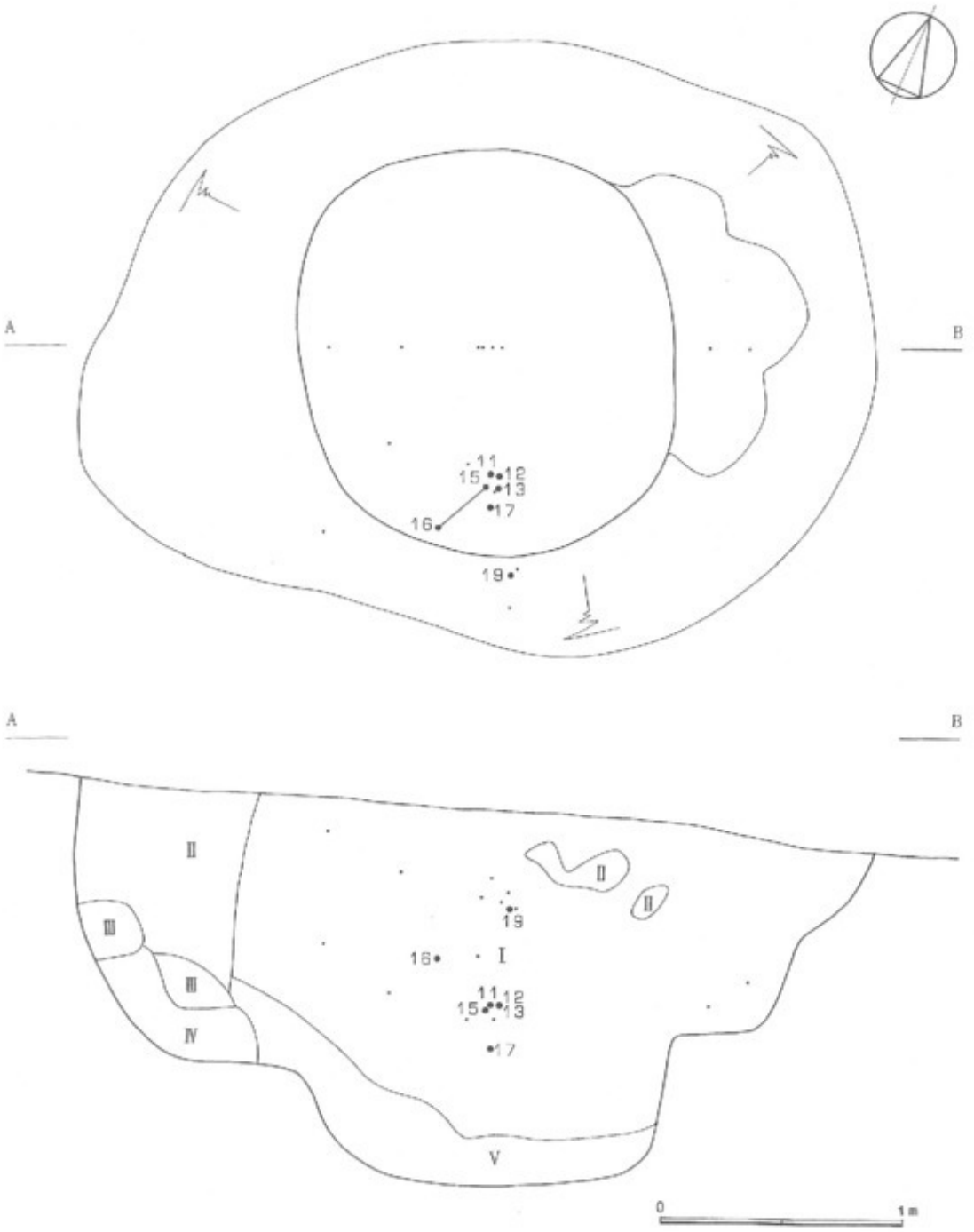
したがって，20個の土器片は埋め戻しの土砂に紛れ込んだものと考えられる。

小原香取遺跡　土壙一覧表

土壙番号	形状	開口部径	底径	深さ	時期	分類	備考
D 1	円形	115×175	127×228	32	縄文中期	袋状	
D 2	楕円形	160×195	155×190	30	同		
D 3	不整円形	210×225	260×270	43	同	袋状	
D 4	円形	145×150	200×200	120	同	同	
D 5	円形	175×180	220×220	46	同	同	
D 6	不整形	105×140	180×180	70	同	同	
D 7	不整円形	154×150	160×160	25	同	同	
D 8	楕円形	220×250	205×240	25	——		
D 9	円形	300×320	335×355	63	縄文中期	袋状	
D 10	楕円形	250×320	155×165	154	——		風倒木痕

1）土壙開口部径・底径は短径×長径の順に記載した。

2）開口部径・底径・深さの計測単位はcmである。



第一五図　第一〇号土壙実測図・遺物出土状態図

第七章　落し穴状遺構の調査

第一号落し穴状遺構

本遺構は調査区の南端部に設定した第５トレンチの北端部から検出した。長軸方向Ｎ－45°－Ｅ。

開口部のプランは東－西径195cm，南－北径102cmを測り，平面形状は長楕円形を呈する。

深さは115cmで，底径は東－西170cm，南－北35cmを計測し，底面形は隅丸長方形を呈し平坦である。

Ａ－Ｂセクションによって掘り方の断面形を観察すると，開口部の長楕円形から両壁を内側へ斜めに掘り込み，80cmほど掘り下げた所からほぼ垂直に底面にいたる。「Ｖ」字状に近い断面形である。壁面は堅固で崩落の痕跡は全く認められない。

壁面に現れた自然層序を精査すると，確認面から33cmまでは上部関東ローム層（田原ローム層），その下に厚さ20cmの鹿沼軽石層，鹿沼層の下は下部関東ローム層（宝木ローム層）に移行する。

底面には２個のピットが存在する。このピットは底面の中央長軸線上を３等分する位置に配置されており，その規模はＰ₁の口径が10×10cm，深さ20cm，Ｐ₂は口径14×20cm，深さ22cmを測る。

このピットの性格は，落し穴の機能を高めようと，穴に落ちた獣を確実に捕獲するために，先端を鋭く尖らせた槍状または錐状の道具を垂直に突き刺しておいた穴であろうと思われる。

埋没土はローム粒子を僅かに混入する暗褐色土の単一層で，土層の変化を確認できるような区分線を引くことはできない。勿論短時日の間に人為的に埋め戻された土砂であることは言を俟たない。本遺構からの出土遺物は皆無である。

〔考　察〕

落し穴は住居や家族を獣から守るため，獲物を捕獲するために構築されたものであろうと考えられているが，友部町では本遺跡以外にも，平成元年に県教育財団が発掘調査を行った石山神遺跡からも28基の落し穴（陥し穴）が確認されている(1)。

報告書ではこれらの落し穴の底面の幅や深さなどから３つに分類している。

Ⅰ類　平面形がほぼ長方形や楕円形を呈し，上端部と比較して底面の幅が極端に狭く（８～14cm）なり，断面形が「Ｖ」字状を呈しているもの。

２基がⅠ類に該当し，１基は開口部が長方形を呈し，長径260cm，短径90cm，深さ90cm，底面幅10～14cm。もう１基は開口部が不整楕円形を呈し，長径254cm，短径126cm，深さ122cm，底面幅８～12cmである。

Ⅱ類　平面形が長方形や楕円形を呈し，底面の幅が20～50cmを有するもの。

24基がⅡ類に該当し全体の85％を占めている。開口部は長方形を呈するものが18基，楕円形を

呈するものが6基である。

規模は長径134～236cm，短径52～126cm，深さ100～180cmである。底面形状は長方形を呈するものが多く，幅20～50cm，長さ110～180cmである。

Ⅲ類　平面形がほぼ長方形や楕円形を呈し，底面の幅が広く60～70cmを有し，深さが200cm以上の大形の落し穴，2基がⅢ類に該当し，1基は開口部が不整楕円形で，長径260cm，短径180cm，深さ214cm，底面形状は長方形を呈し，幅50～60cm，長さ140～150cmである。

もう1基は開口部が楕円形で，長径266cm，短径150cm，深さ220cmである。

底面形状は不整長方形を呈し，幅60～70cm，長さ150～160cmである。

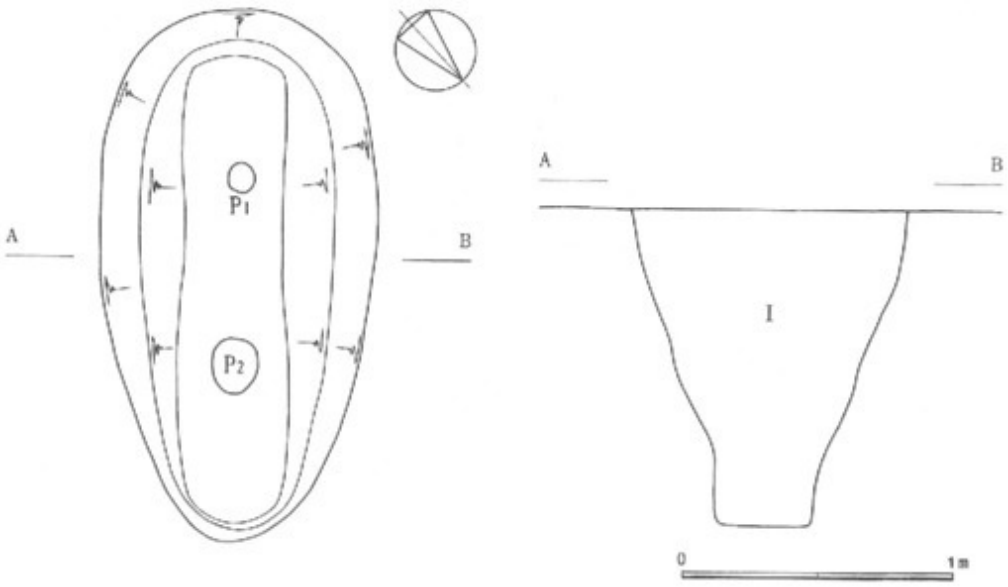
以上のように分類しており，構築の時期を縄文時代早期に比定している。

本遺跡の落し穴は上記の分類に拠ればⅡ類の範疇に入ることになるが，決定的な違いは底面に2個のピットが存在することである。

石山神遺跡ではピットを有する落し穴は確認されておらず，本遺跡の落し穴は特筆に値する落し穴であるということができよう。

構築の時期については，遺物の出土がないので明確にすることはできない。

(1)　茨城県立総合教育研修センター（仮称）建設用地内埋蔵文化財調査報告書
　　石山神遺跡　㈶茨城県教育財団　平成2年9月



第一六図　第一号落し穴状遺構実測図

第八章　坂場遺跡の遺構

坂場遺跡のエリアで今回調査の対象になった面積は，第１トレンチだけのわずかに200㎡ほどである。したがって検出された遺構は竪穴状遺構１軒と溝状遺構１条のみであった。

坂場遺跡は縄文時代中期の遺跡として周知されているが，溝状遺構から須恵器・土師器・内耳土器などが出土し，複合的な性格が強くなった。

１　第一号竪穴状遺構

第１トレンチ南端部付近の東壁側に検出されたが，平面プランの50%以上は東壁外既存道路下に埋没しているものと思われる。

確認された規模は，東壁（道路際）190cm，西壁170cm，南壁110cm，北壁110cmで，面積は約２㎡ほどである。

掘り方の状態を東壁Ａ－Ｂセクションで観察すると，確認面からほぼ垂直に掘り込んだのち，底面付近は斜めに掘り込んでいる。底面はおおむね平坦であるが固さはない。

遺構内の埋没土はロームをベースとして黒色土が混入する暗褐色土が充満し，埋没土の層序に変化は認められない。

出土遺物はわずかに４個で，３個は摩滅した縄文土器小破片，１個は砥石の破損品である。

２　第一号溝状遺構

第１トレンチ竪穴状遺構の南側に，トレンチを東西に横切って存在する溝状遺構を検出した。

幅は210～230cm，深さは40cmほどである。

埋没土の性状を観察すると，ロームを主体として若干の黒色土粒子を混入する暗褐色土の単一層で，層序の区分線が引けるような変化は認められない。

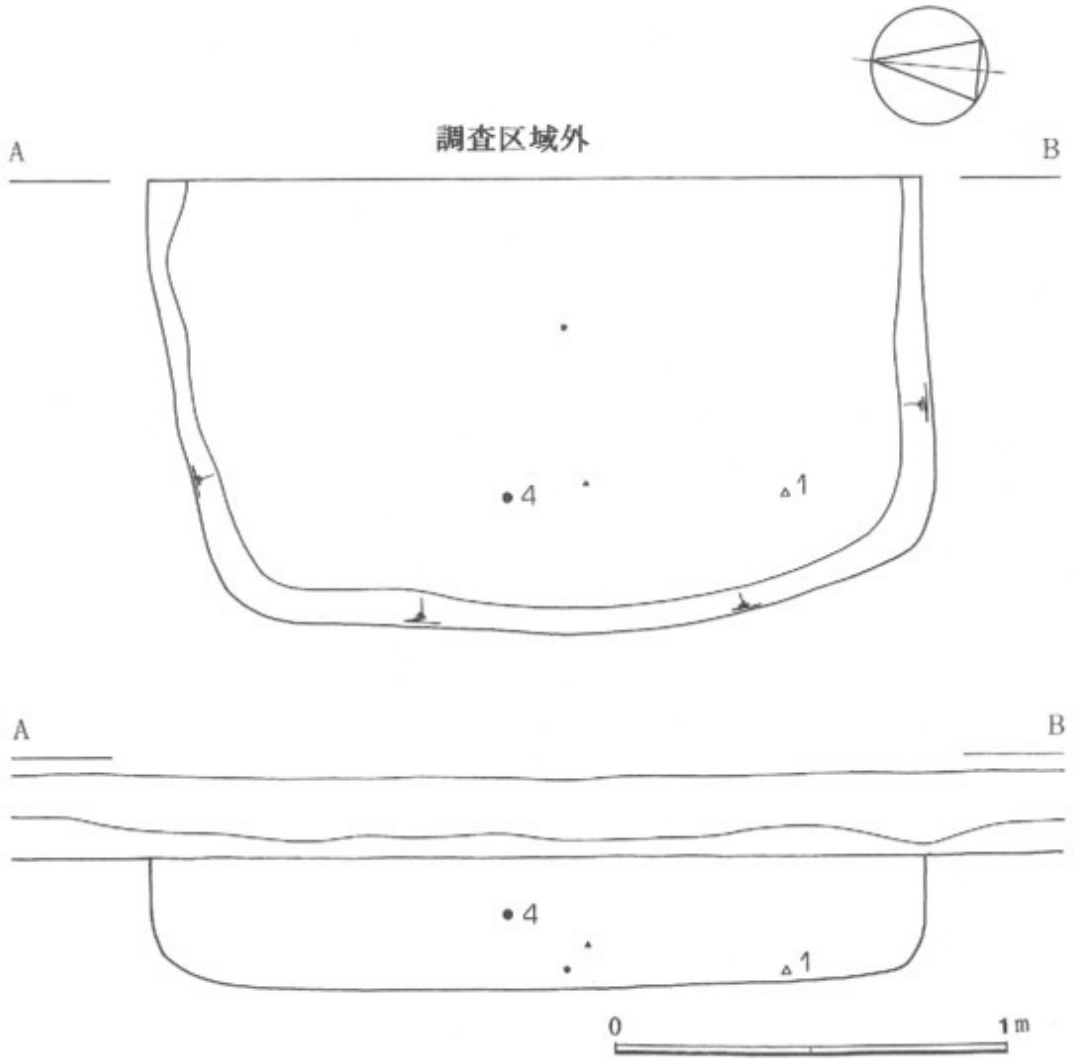
出土遺物総数は39個で，内訳は土器片27個，自然石12個である。

さらに出土土器を分類すると，縄文土器は皆無で，土師器15個，須恵器５個，内耳土器７個である。いずれも小破片で摩滅が著しく良好な資料とはいえない。これらの土器片は溝状遺構が保有する遺物ではなく，投棄または周囲から流れ込んだものであろう。

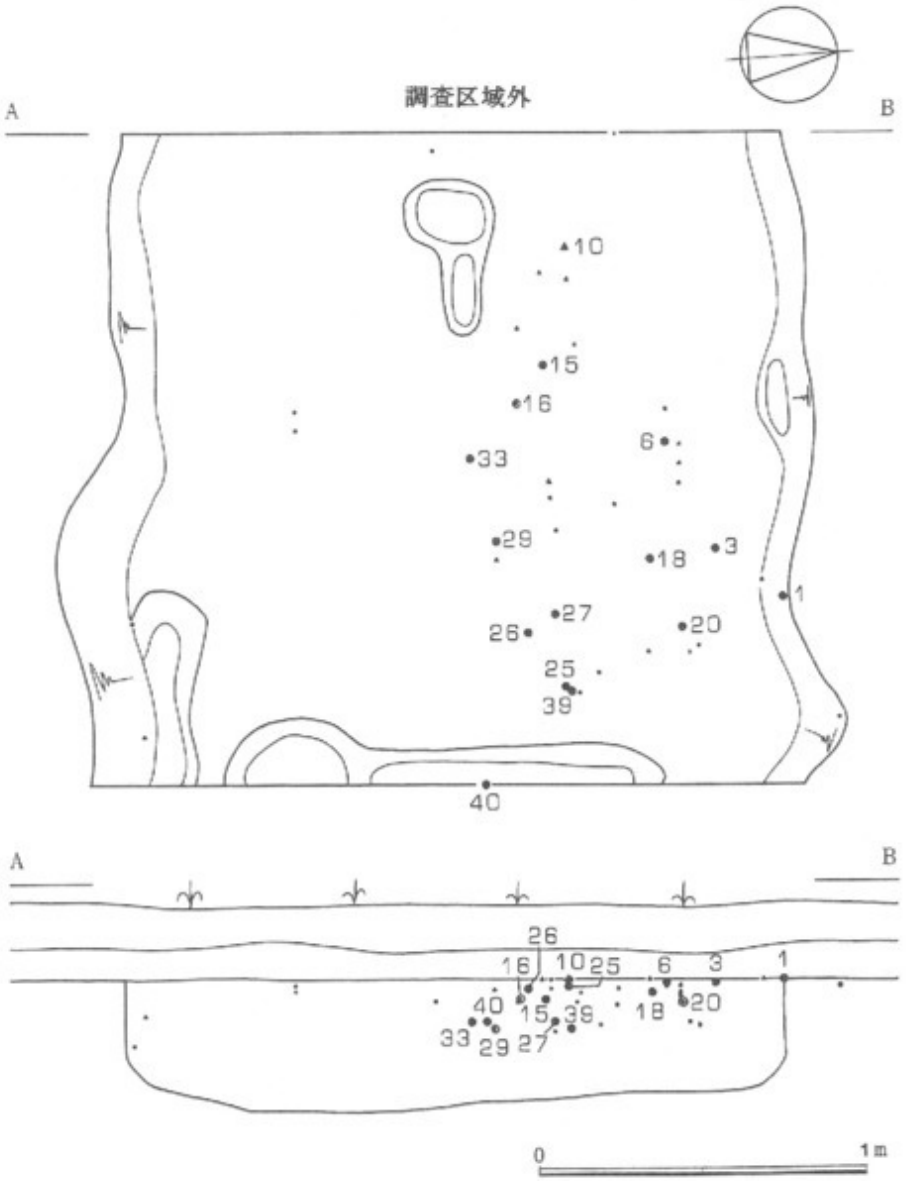
坂場遺跡の調査区から検出された遺構と出土遺物の概要は，以上に記述したとおりであるが，今回の調査は遺跡全体の片鱗を窺知するにとどまった。

したがって狭小範囲からの少量の出土遺物をもって，坂場遺跡全体の性格を論ずることは軽率の譏誇は免れない。

調査区域外に多数の遺構が拡散埋没していることは自明の理であり，遺跡全体を律するためには更に今後の究明が待たれるところである。



第一七図　第一号竪穴状遺構実測図・遺物出土状態図



第一八図　第一号溝状遺構実測図・遺物出土状態図

第九章　その他の遺構

1　第二号溝状遺構

本遺構は第２トレンチの北端部から検出された。トレンチを東西方向に横切る形状であるが，西側は第二号土壙掘削の際に切断されている。

幅150cm，深さは中心部で30cm，底面および南壁際に４個のピットが存在する。

出土遺物は14個で，内訳は縄文土器片12個，自然石２個である。

いずれも細小破片で，良好な資料であるとはいい難く，溝内に流れ込んだ可能性が考えられる。

2　第三号・第四号溝状遺構

第５トレンチから検出され，両者とも東西方向にトレンチを横切っている。

規模はほぼ共通しており，幅は40～60cm，深さは20cmほどである。

遺物の出土は皆無である。

3　屋外炉址

第５トレンチのほぼ中央部西壁際より検出された。

第一号炉址の平面プランは東－西100cm，南－北95cmのほぼ円形を呈し，焼土は東－西90cm，南－北70cmの範囲で堆積する。

焼土の厚さは中心部で20cmを測るが，中心部から南側へかけて深さ61cm，64cm，34cmの３本の山いも掘りの穴によって破壊されている。出土遺物はない。

第二号炉址の規模は，東－西75cm，南－北55cmの楕円形を呈し，焼土は東－西60cm，南－北35cmの範囲で堆積し，中心部の焼土層の厚さは15cmを測る。出土遺物はない。

4　遺物包含層

第２トレンチの南端部，第３トレンチと接する付近の西壁際より多量の遺物が出土した。

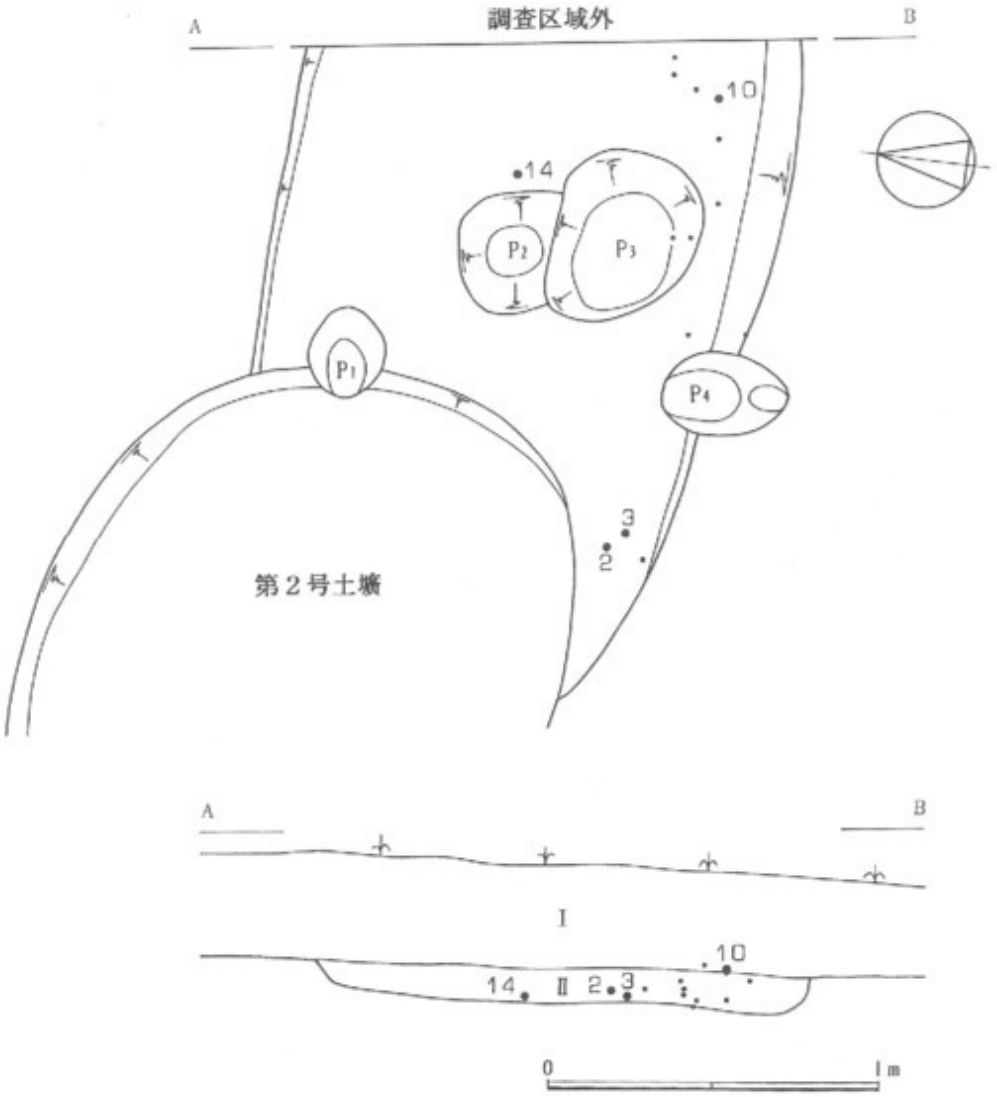
既存道路ぎりぎりまで拡張して確認した出土遺物数は112個である。

表土から遺構確認面までの深さは100cmであったが，遺物の出土はその中間の黒色土層に位置する。西壁道路側は層位が高く東側が低くなり，恰も土器を一括投棄したような，或いは西側から東側へ流れ込んだような様相で土器片が出土した。

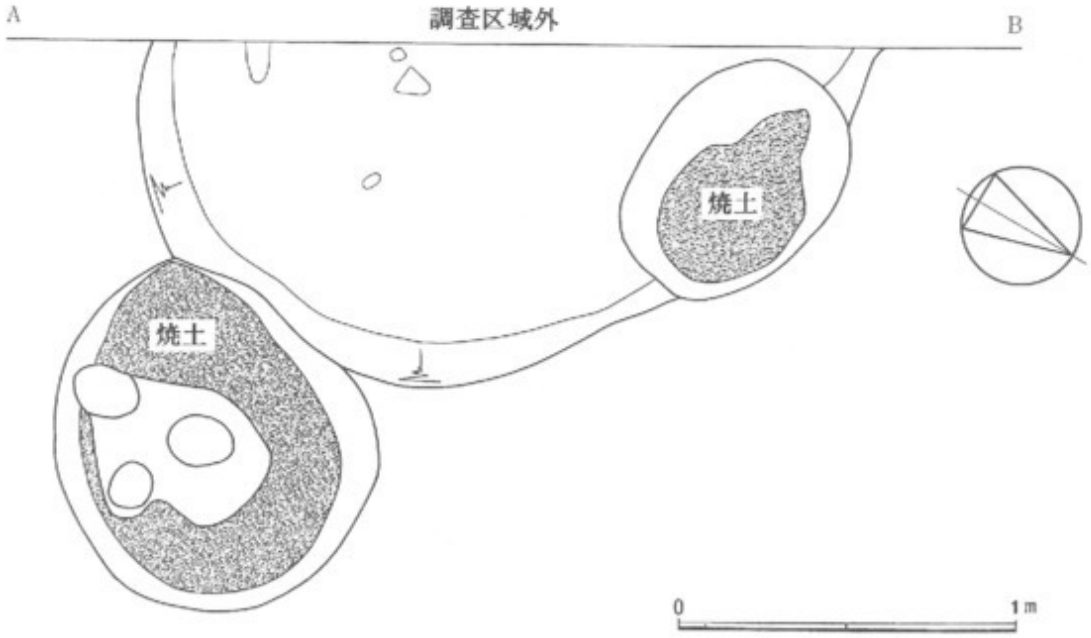
遺構の存在も考えられたので丹念に精査したが，その存在は全く認められず，遺物包含層として取り扱うこととした。

出土遺物を観察すると，阿玉台式期末葉の特徴を有する土器破片が大部分を占めており，接合復元資料も１個抽出できたが，ゴミ捨場的性格が強いように思われる。

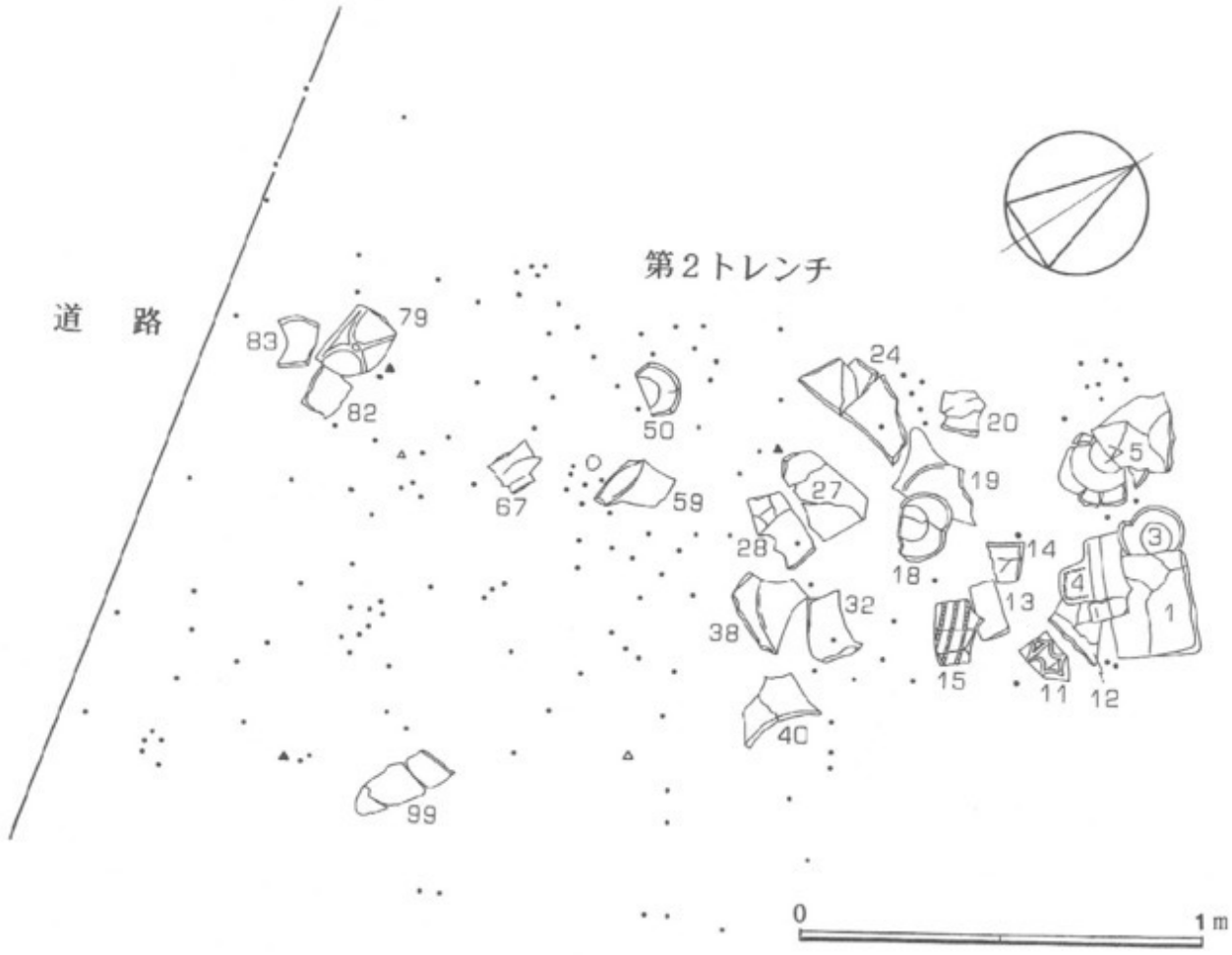
かたわらの確認面からは第五号袋状土壙が検出され，接合復元された阿玉台式期末葉の良好な資料が４個出土している。



第一九図　第二号溝状遺構実測図・遺物出土状態図



第二〇図　第一号・二号屋外炉址・実測図



第二一図　遺物包含層遺物出土状態図

第一〇章　出土遺物の概要

小原香取遺跡の出土遺物は，縄文時代中期前葉の阿玉台式の土器群が大部分を占めている。

接合復元資料を中心に概観してみよう。

第一号土壙接合復元資料一（第二二図・原色図版第一上段左・図版第一九）

大型の山形状突起の器面に太い隆起線で渦巻文を描出し，隆起線に沿って角押文・沈線を配し，空間には縄文を充填している。

口辺部と胴部は２本の太い隆起線によって区切られ，隆起線の間には幅広の角押文・沈線が横にめぐり，空間には縦位の縄文が施されている。

胴部は太い隆起線が垂下し，胴部の中央部で円弧状に横切ってさらに底部付近まで垂下する。

胴部の中央部では小渦巻文を形成する。隆起線に沿って両側に幅広の角押文と沈線が並走し，隆起線以外の空間には縦位の縄文が回転施文されている。

復元口径推定35cm，器高約50cmの大型に属する土器で，金雲母片を多量に含み阿玉台式末葉の典型的な土器である。

第一号土壙接合復元資料二（第二三図・原色図版第一上段右・図版第一九）

口辺部が外反し，頸部がくびれている平縁の深鉢形土器である。

復元口径約24cm，器高36cmで，口辺部と胴部の文様は連弧状にめぐる隆起線によって２分される。

口辺部の文様は上段に３本，下段に２本の細い沈線をめぐらせ，上下の沈線の間には２本の鋸歯状沈線が一周する。

胴部文様は，連弧文の接点から隆起線を垂下させ胴部を縦に４区画に分割し，区画内は並行沈線によって上半部を半円形状に，下半部を楕円形状に区画している。

上半部の半円形状区画内には中央部に２本の細い鋸歯状沈線が垂下し，連弧文より底部にかけては縦位の回転縄文が充填している。胎土には多量の金雲母片を含んでいる。

第一号土壙接合復元資料三（第二四図・原色図版第一下段・図版第一九）

波状口縁の深鉢形土器で，円筒形の胴部に内湾曲して開く口辺部がつき口縁が外反する。

底部は欠失している。突起状の波頂部はＶ字形の隆起線で加飾し，逆三角形の盲孔を穿つ。

口縁部に沿って半截竹管の内側で刺突した有節沈線がめぐっている。

口辺部と胴部には縦位による縄文が施されている。口径27cm，器高36cmである。

第五号土壙接合復元資料一（第二五図・原色図版第二上段・図版第一九）

無文の浅鉢形土器である。口縁部の内側には稜を有し，現存する口縁部の内側には細い半截竹管工具による有節沈線が４本めぐっている。

口縁部には2個単位の小突起が4か所に付加されるようである。

復元された土器の口径は約50cm，器高は19cmである。

浅鉢形土器の用途としては，盛りつけ皿・粉などのこね鉢などが考えられている。

第五号土壙接合復元資料二（第二六図・原色図版第二下段左・図版第一九）

口辺部から口縁部にかけて内湾曲しながら開く平縁無文の深鉢形土器である。

胴部から底部にかけて6か所に隆起線を貼付け垂下させ，隆起線上に刻目を施している。

口径21.5cm，器高は29cmである。

第五号土壙接合復元資料三（第二七図・原色図版第二下段右・図版第二〇）

口辺部を内湾曲させながら大きく開く深鉢形の器形を呈する。口径29cm，器高は39cmである。

山形の大きな波状口縁をつけており，文様は隆起線で波頂部に小楕円形文を配し，口辺部は楕円形文より垂下する隆起線と頸部を一周する断面三角形の隆起線によって4区画に分けられ，区画内の空間には単列または複列の有節沈線をつけている。

胴部には断面三角形のY字形隆起線を4か所に垂下させ，頸部から底部にかけてほぼ等間隔に5段の爪形文列を巡らせている。

第五号土壙接合復元資料四（第二八図・原色図版第三上段・図版第二〇）

口径の直径よりも胴部の直径の方が大きい無文地の深鉢形土器である。

復元口径は約28cm，胴部直径約35cm，器高は40cmである。

頸部のくびれ部には隆起線をめぐらせ，ところどころをU字形にして加飾している。

頸部をめぐる隆起線に限り指頭による押捺が施されている。

胴部のもっとも膨らんだ器面上には隆起線を貼付け，4か所から底部付近まで隆起線を垂下し刻目を施している。

第七号土壙接合復元資料一（第二九図・原色図版第三下段右・図版第二〇）

器面全体に縄文が縦位に回転押捺されている平縁の深鉢形土器である。

復元口径約24cm，器高は約30cmである。

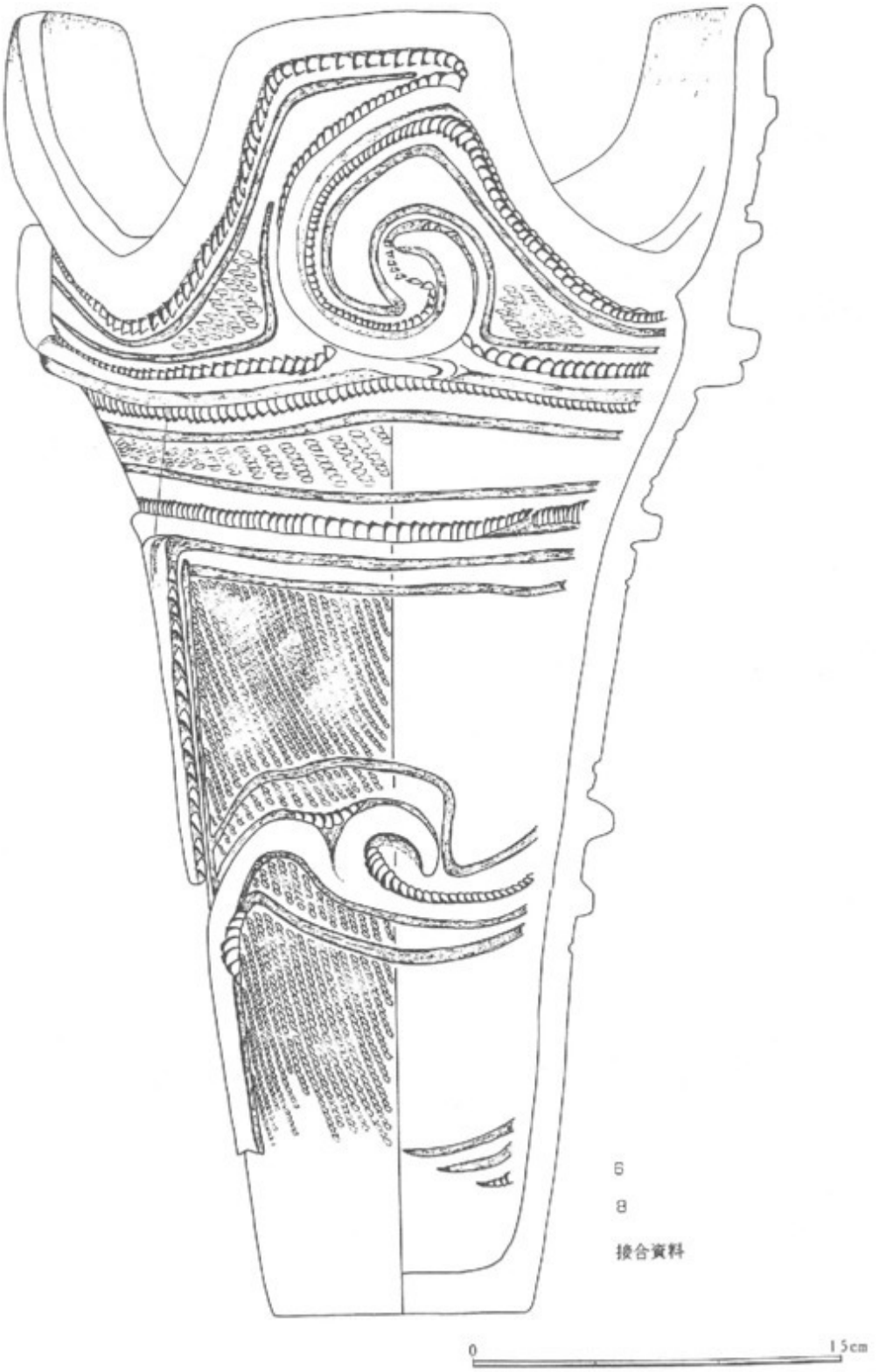
遺物包含層接合復元資料一（第三〇図・原色図版第三下段左・図版第二〇）

復元した土器を観察すると，底部を欠失した無文の深鉢形土器の器形を呈する。

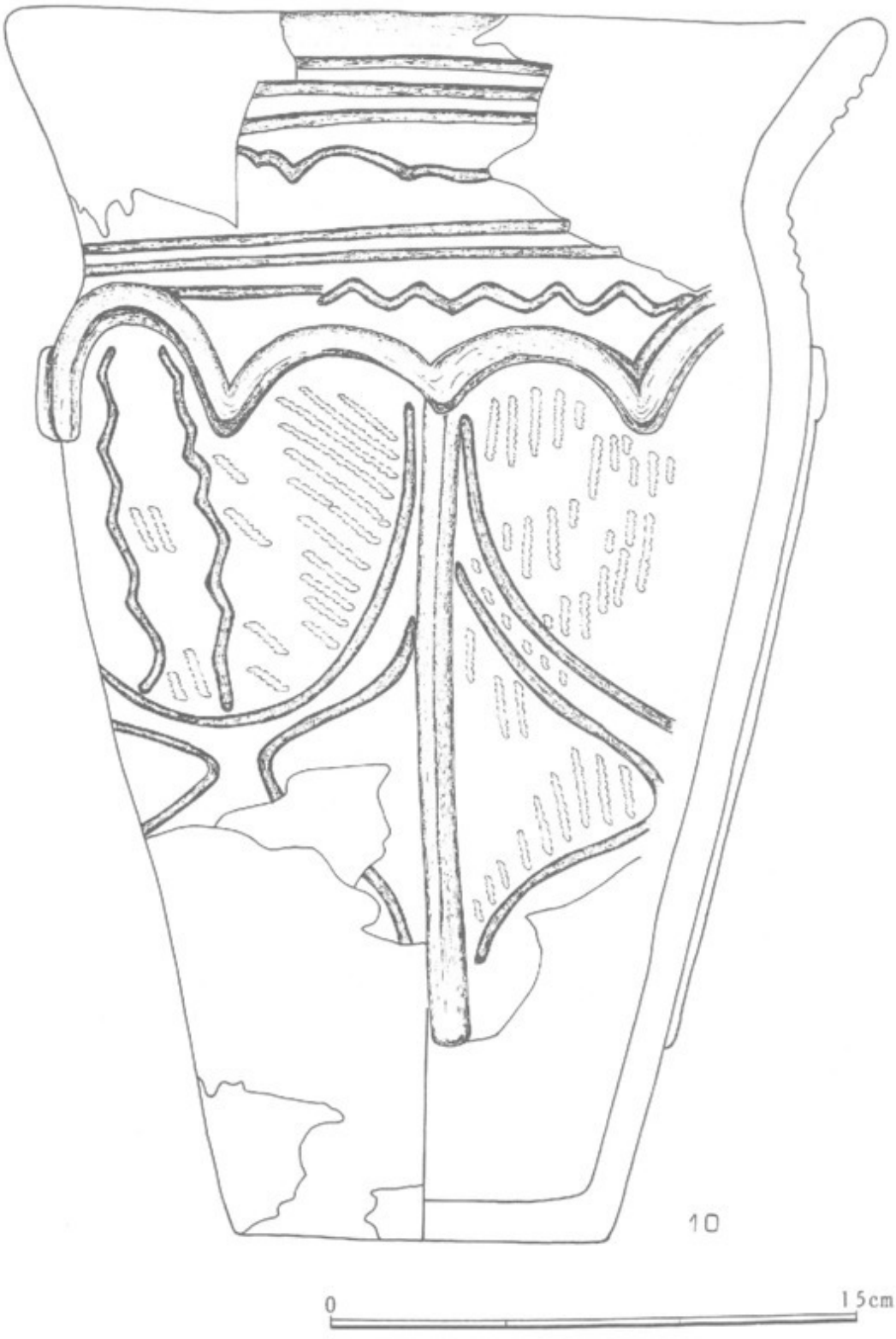
口辺部の器形は弱く内湾曲しながら大きく開き，口縁部はゆるい波状を形成する。

ほぼ等間隔で4か所に縦長の突起が付加され，突起から隆起線が垂下し，隆起線上に刻目が施される。

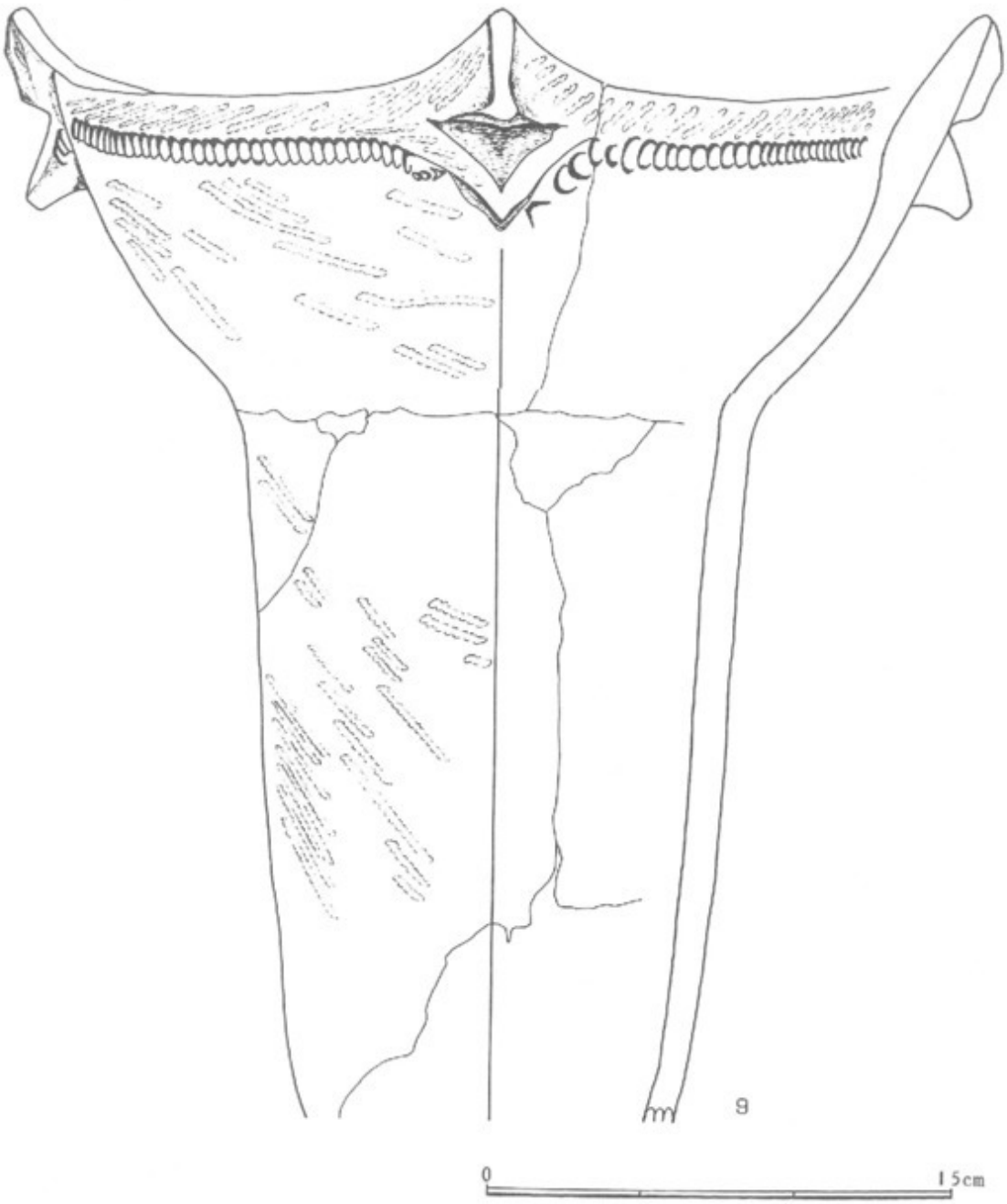
復元した口径は約29cm，器高は40cm前後となろう。



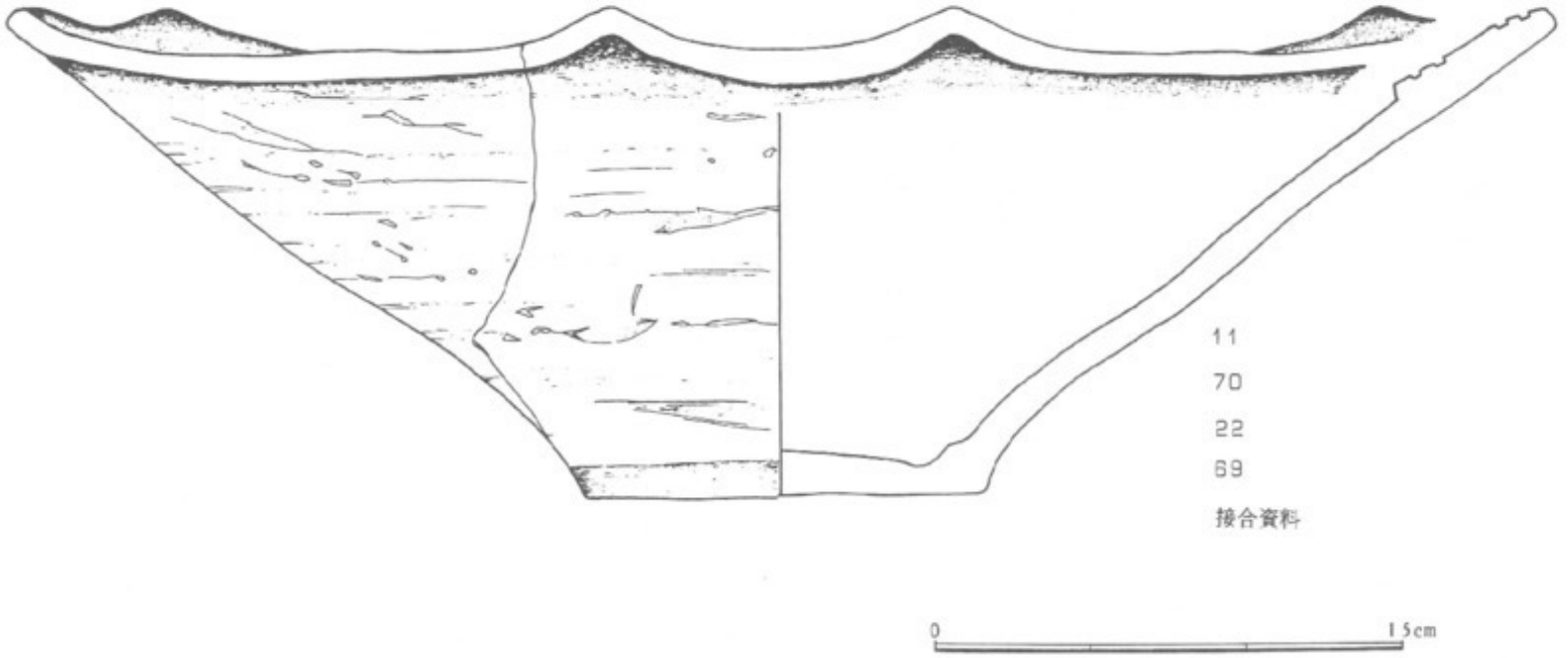
第二二図　第一号土壙出土接合復元土器（一）実測図



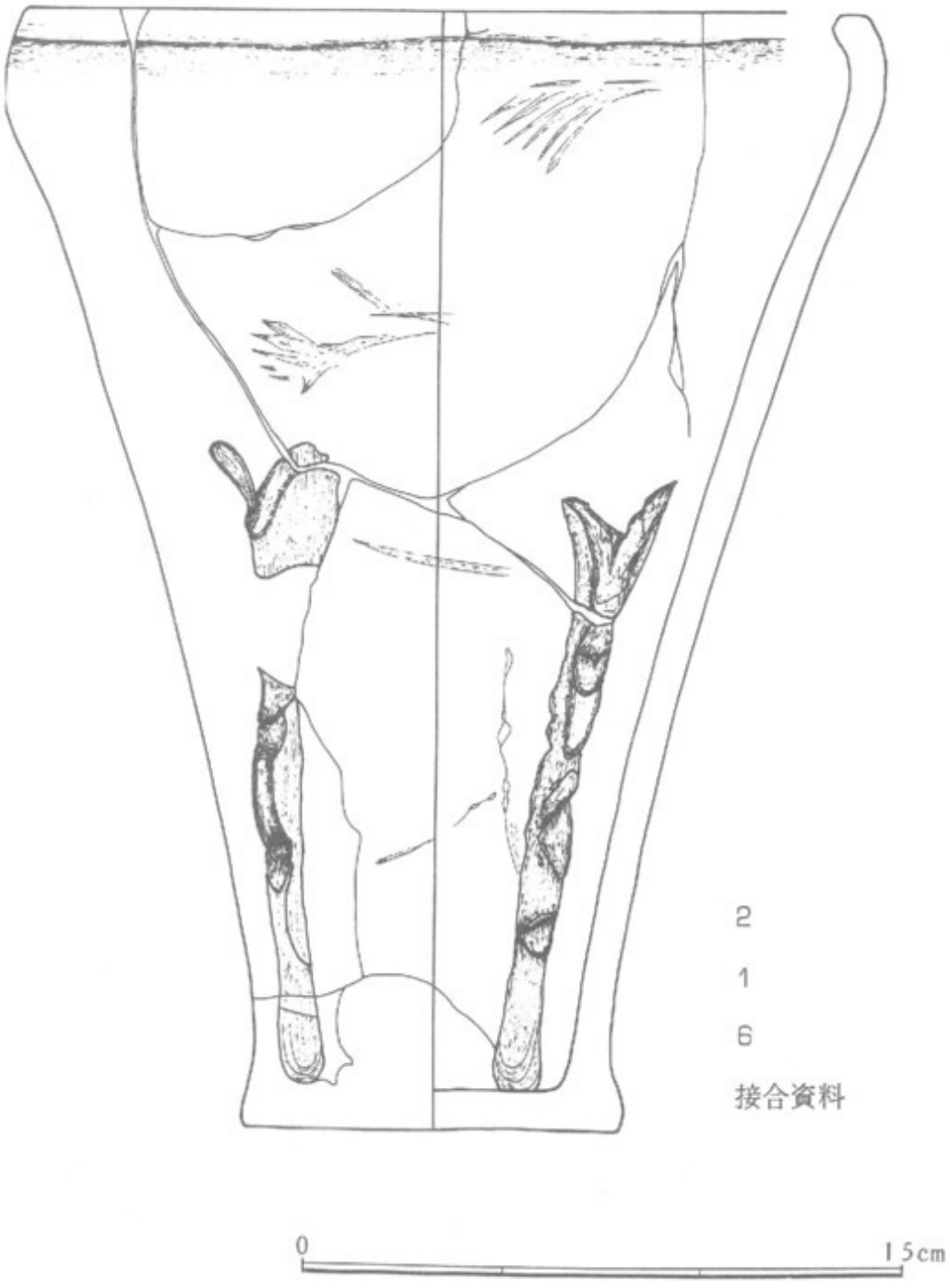
第二三図　第一号土壙出土接合復元土器（二）実測図



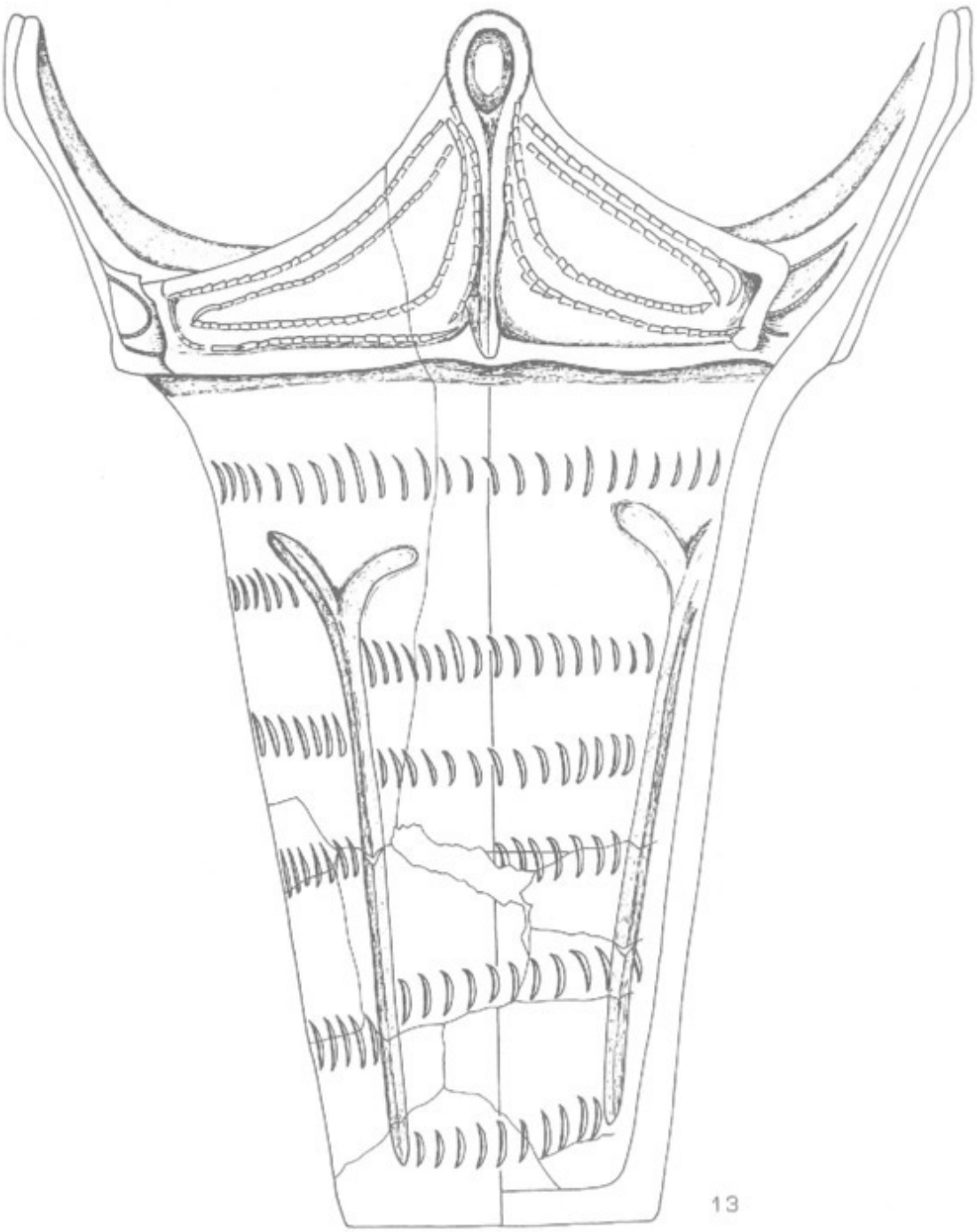
第二四図　第一号土壙出土接合復元土器（三）実測図



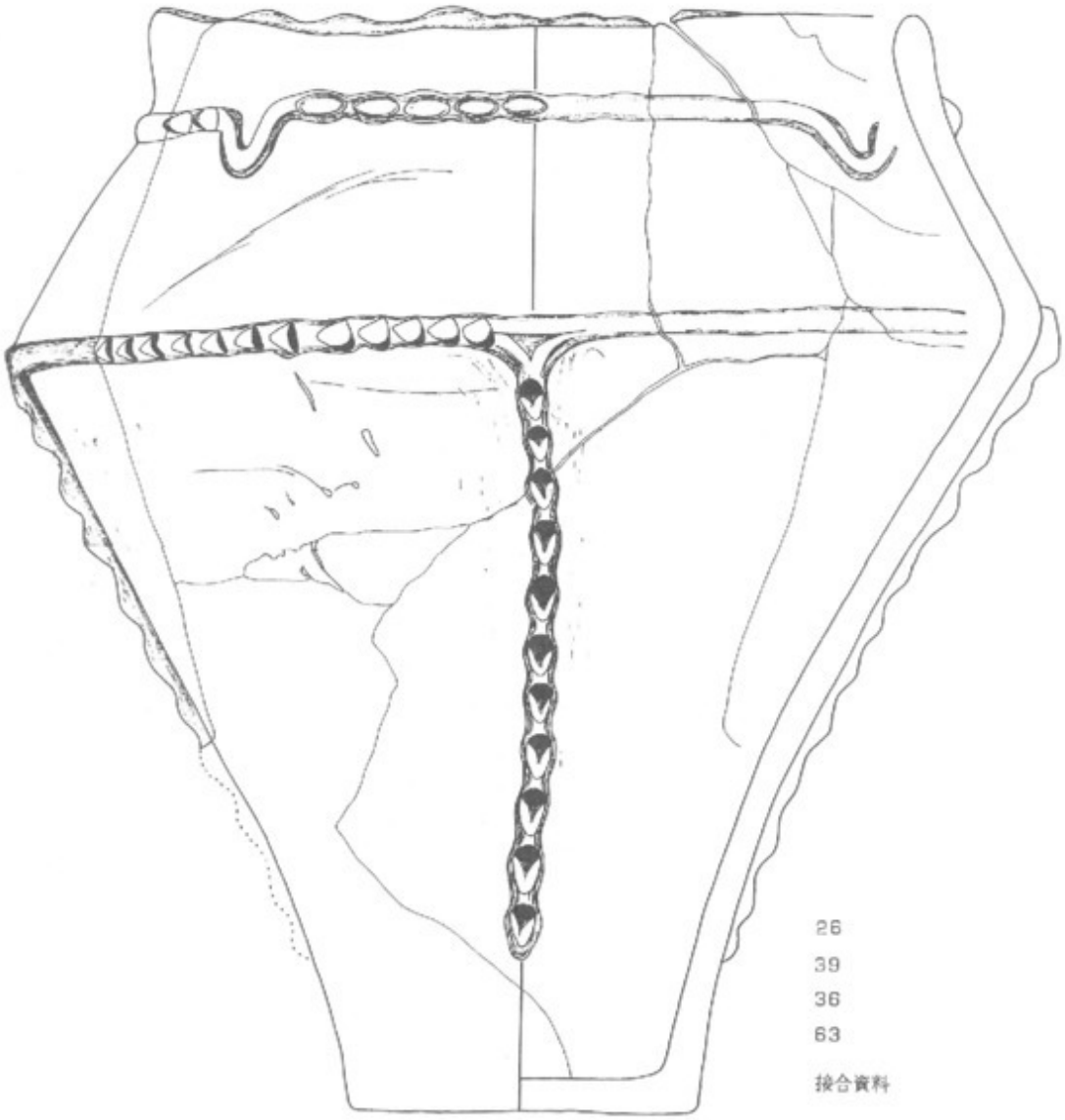
第二五図　第五号土壙出土復元土器（一）実測図



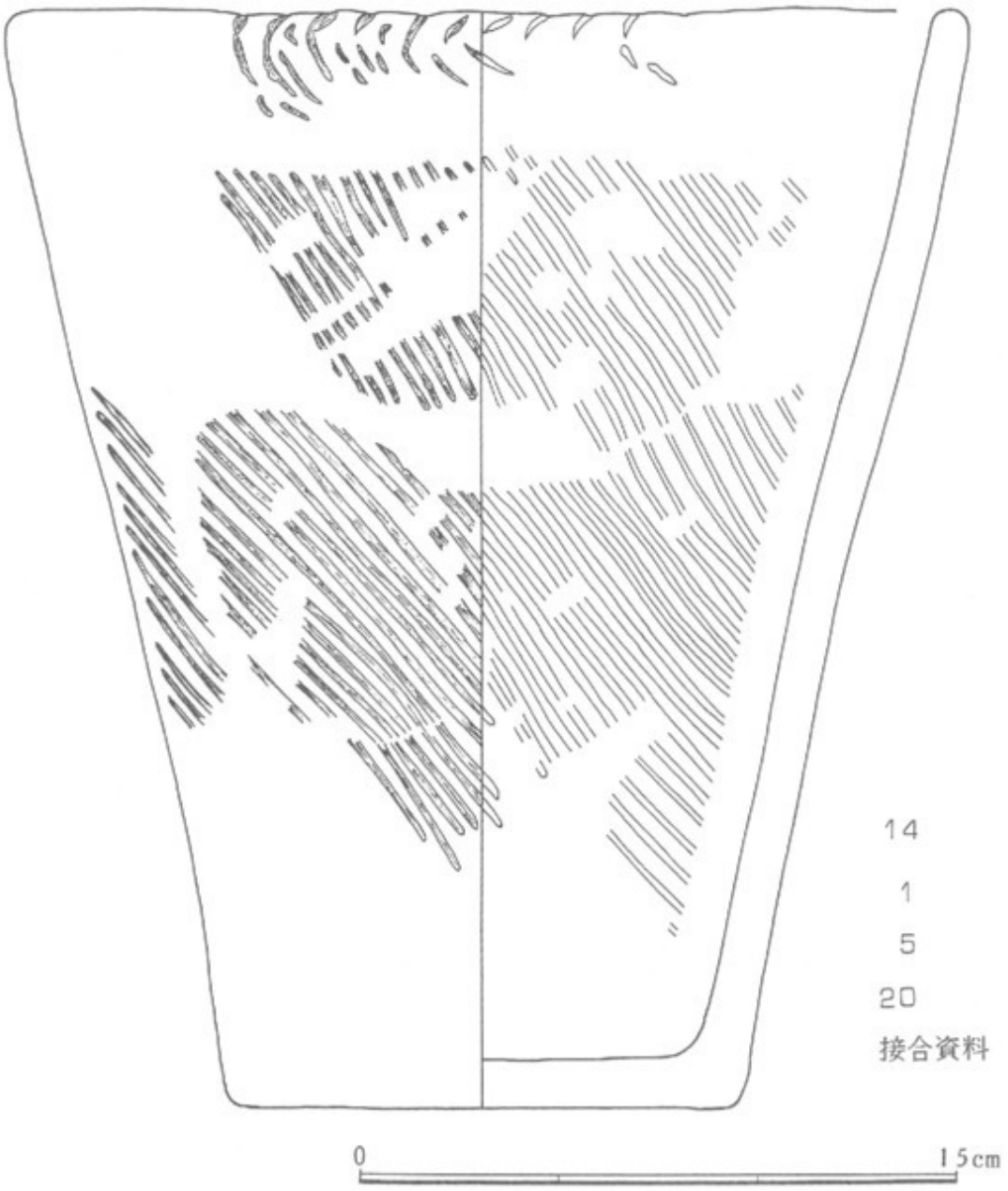
第二六図　第五号土壙出土接合復元土器（二）実測図



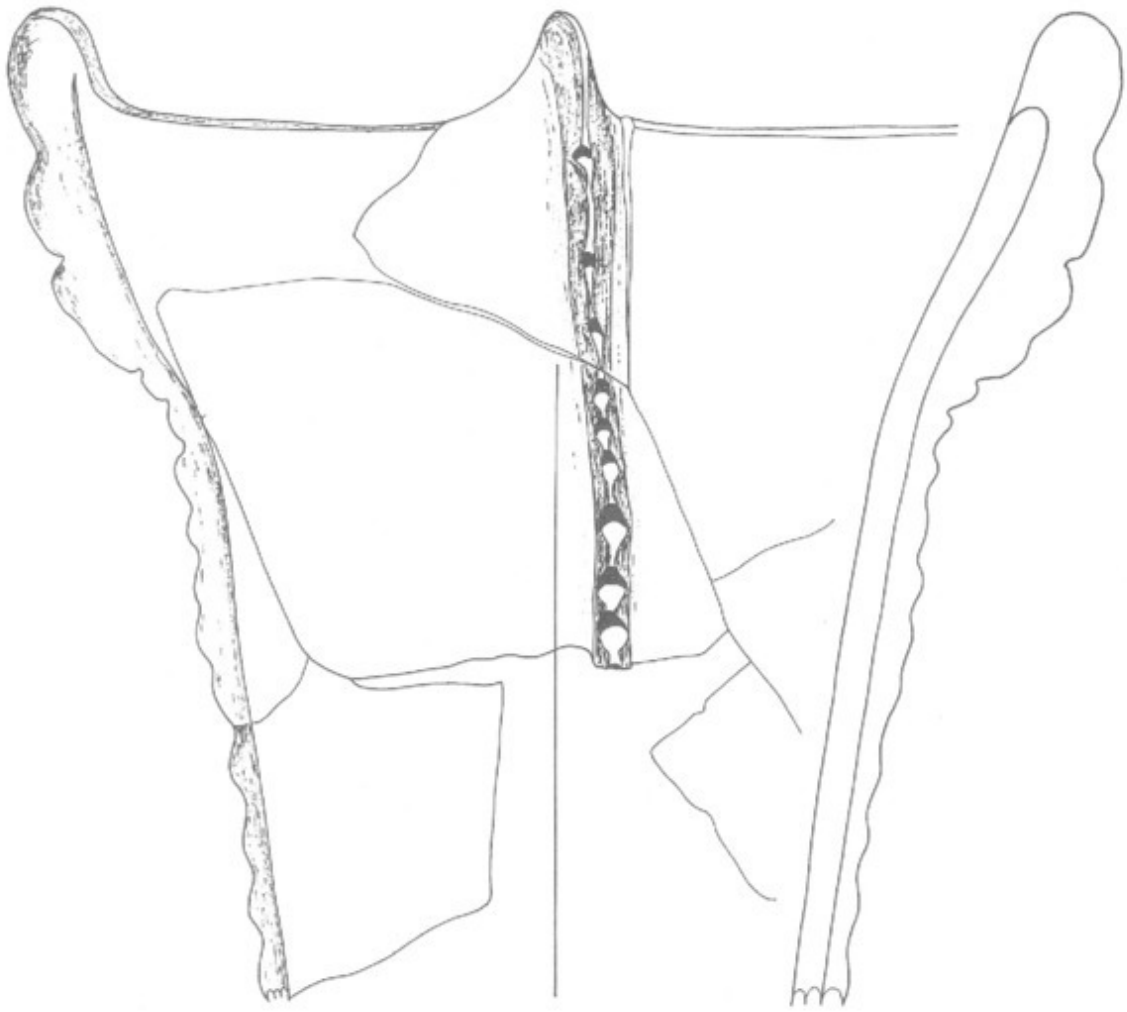
第二七図　第五号土壙出土接合復元土器（三）実測図



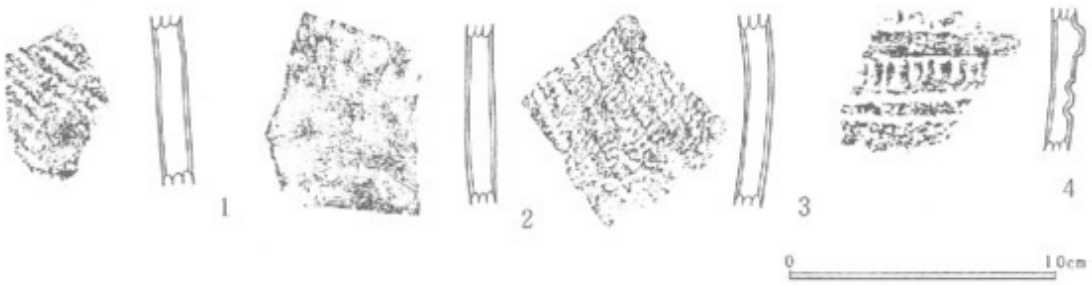
第二八図　第五号土壙出土接合復元土器（四）実測図



第二九図　第七号土壙出土接合復元土器（一）実測図



第三〇図　遺物包含層出土接合復元土器（一）実測図



第三一図　第一号土壙出土土器拓影図

出土した土器は，復元できた一部のものを除くと，大部分の資料は破片である。

これらの土器を概観すると，

① 阿玉台式に該当する一群。

② 隆起線と有節沈線を組合わせて文様を構成する一群。

③ 縄文地に沈線文を加飾させたものとに大別できると思われる。

①には口縁部の突起や枠状に区画した隆起線に沿って，半截竹管の外側・内側で有節沈線文や角押文を配する一群があり，1～2条のものと3条のものとが認められる。

第三八図の沈線はⅠ類の手法を思わせるものがある。

波頂部には周縁に刻目を付した円形把手が加えられ，2～3条の有節沈線文や側面に幅広い角押文を施文しているものがある。これらはⅡ類に包括しうるもので遺物包含層出土の土器には好資料が多い。

外反する口辺部にY字形の隆起線を貼付する例，爪形文列が横位に配される例，隆起線に付随して半截竹管や櫛状工具の沈線，爪形文を施すのはⅢ類になろう。

②は，縄文地に隆起線を貼付し，有節沈線文が盛行する一群である。

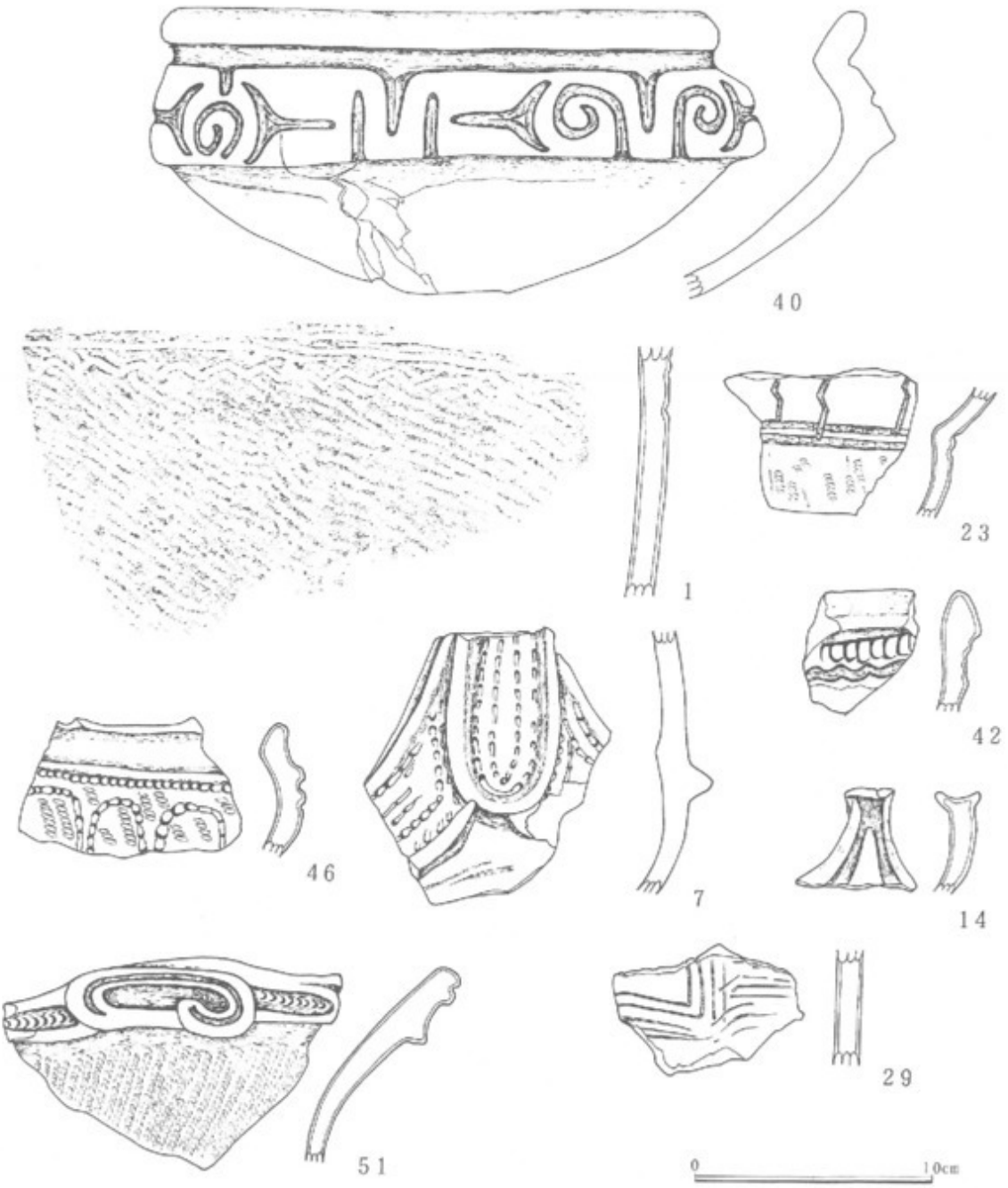
口縁部の形状には平縁と波状があり，有節沈線は半截竹管工具の外側を使用してやや太目である。羊歯状文，渦巻文などの曲線を主体とした文様を構成するものもある。

③は，縄文地に沈線文が多用される一群で，有節沈線に代わって半截竹管の外側を使用した沈線文が旺盛にみられる。

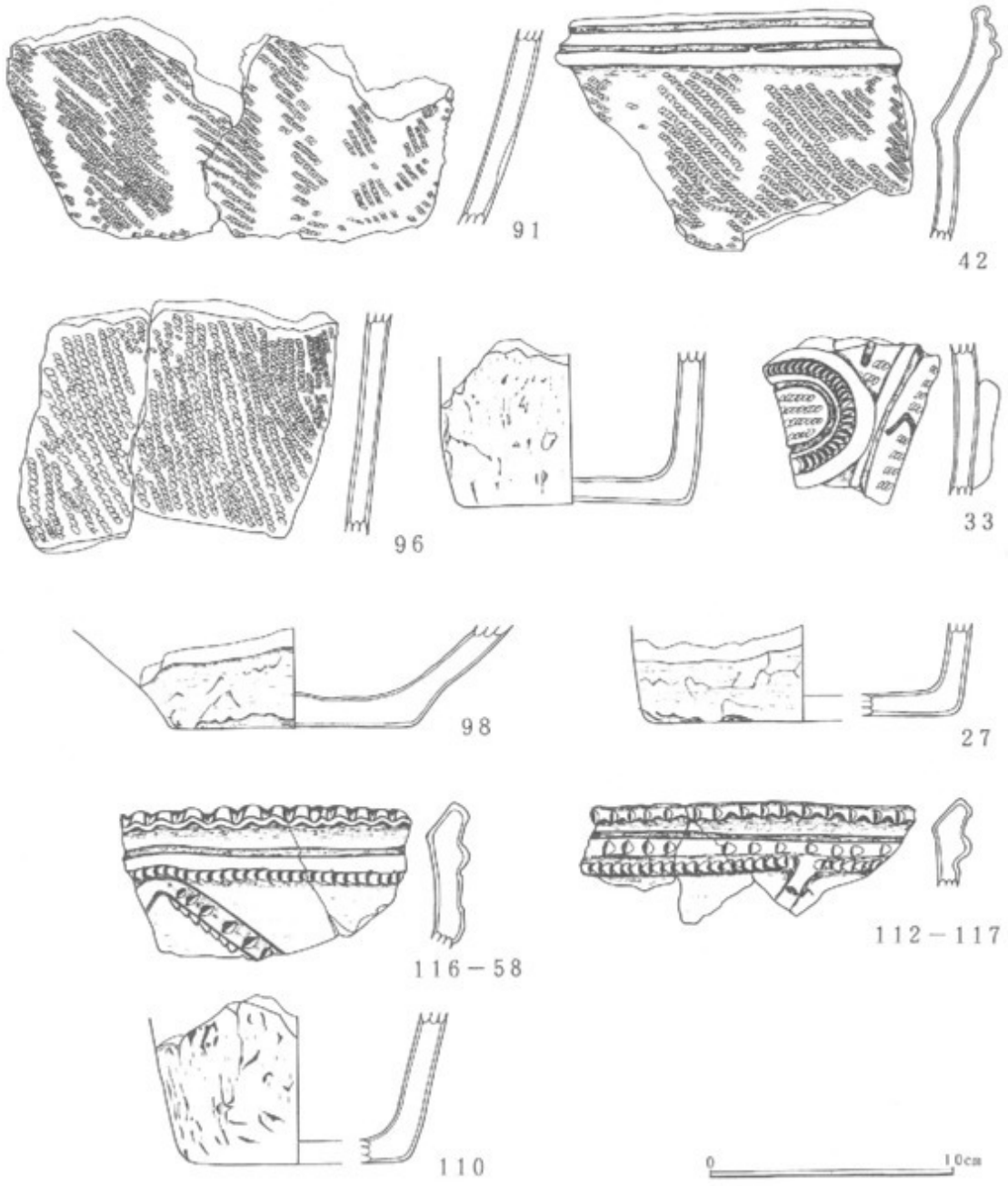
口縁部は横位の直線文，山形文などを数条施文し，胴部に曲線その他の文様が加飾される。

坂場遺跡の第一号溝状遺構より出土した土器は，土師器では坏形土器・甕形土器の小破片，須恵器の器種としては坏形土器・甕形土器，第三七図20は長頸壺形土器になるかもしれない。1・3は内耳土器である。

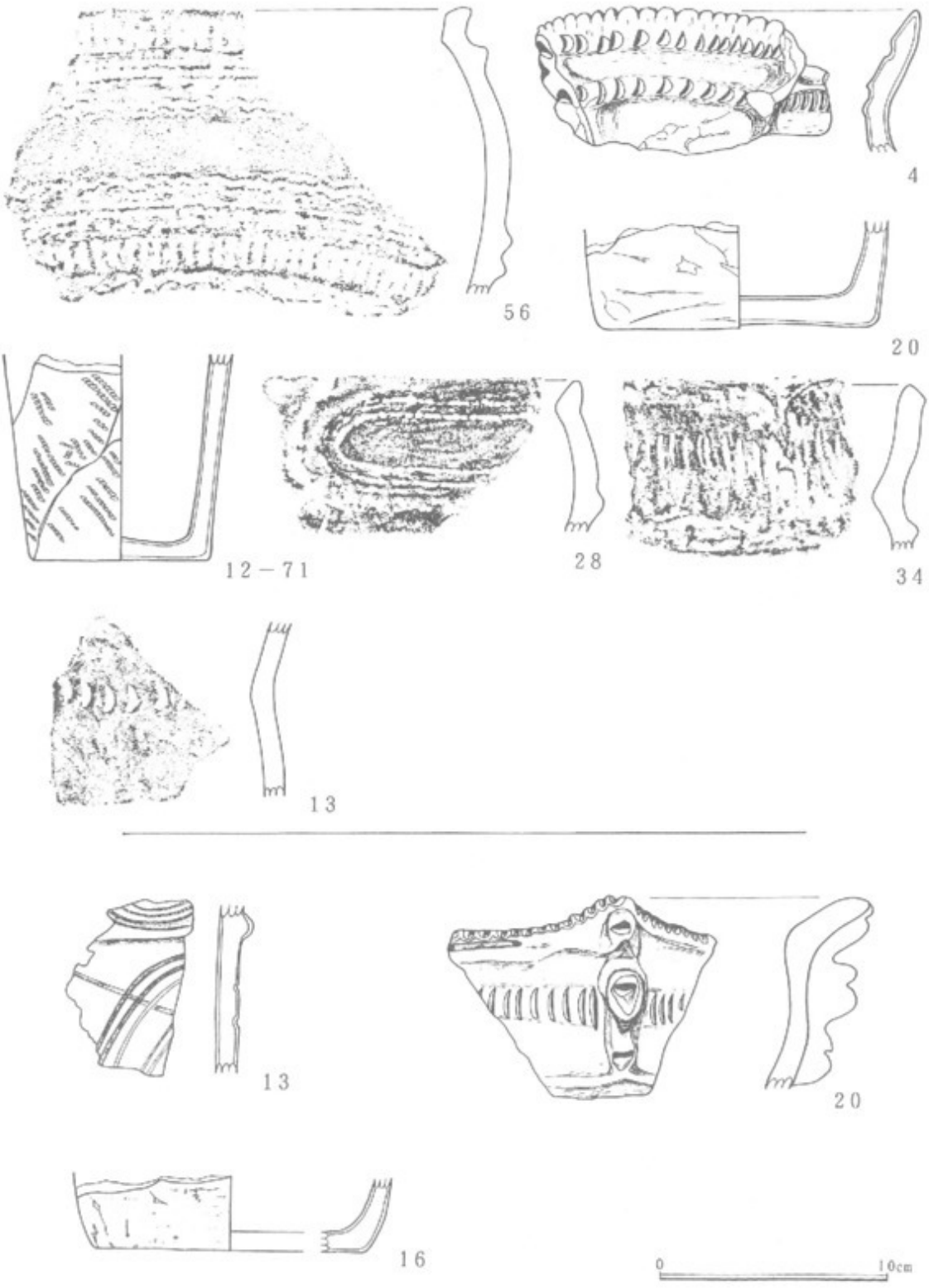
石器の出土はわずかで敲石・磨製石斧・石鏃・砥石など数点のみである。



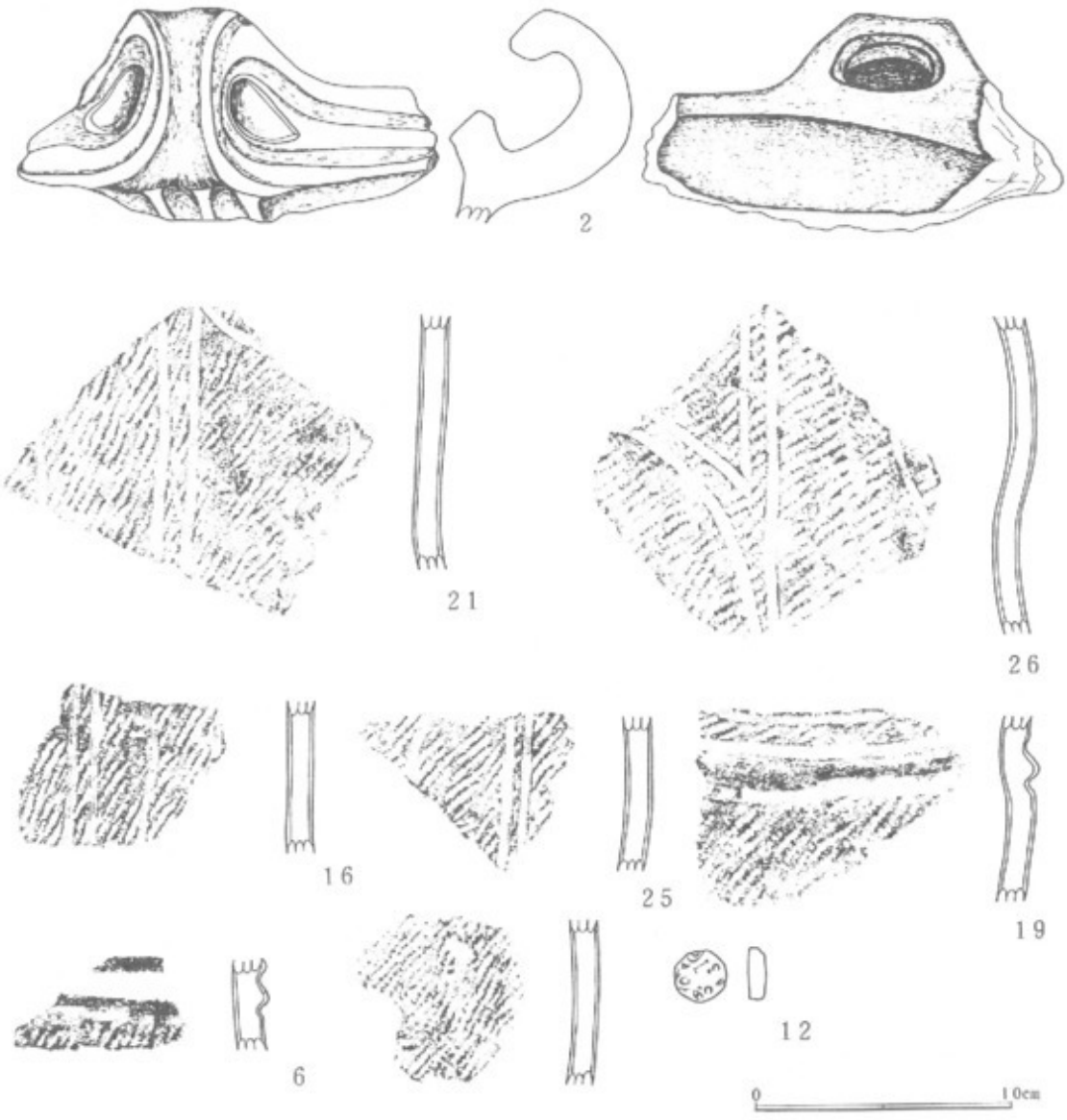
第三二図　第三号土壙出土土器実測図・拓影図



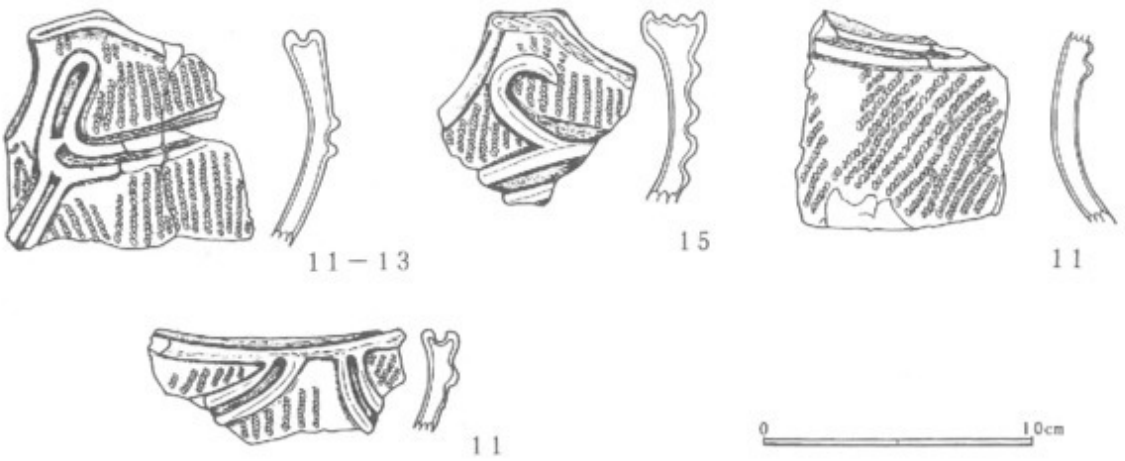
第三三図　第四号土壙出土土器実測図



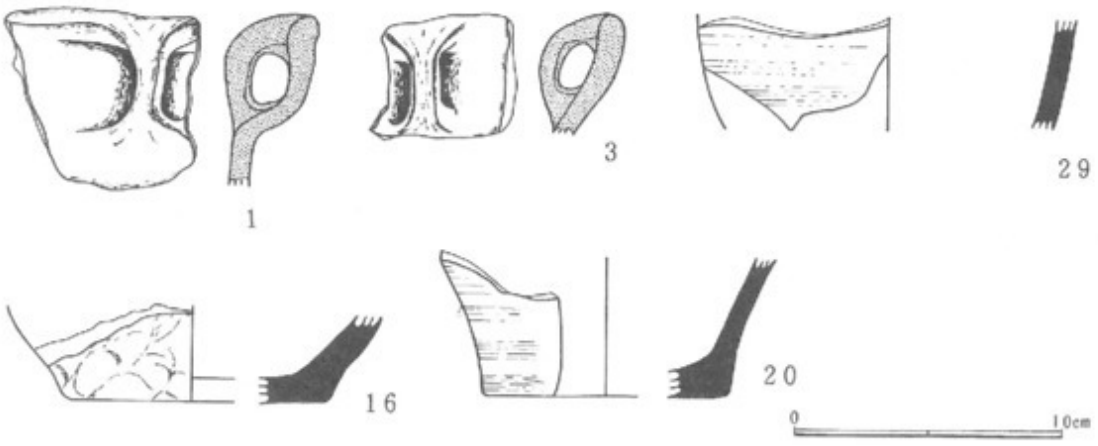
第三四図　第五号・第六号土壙出土土器実測図・拓影図



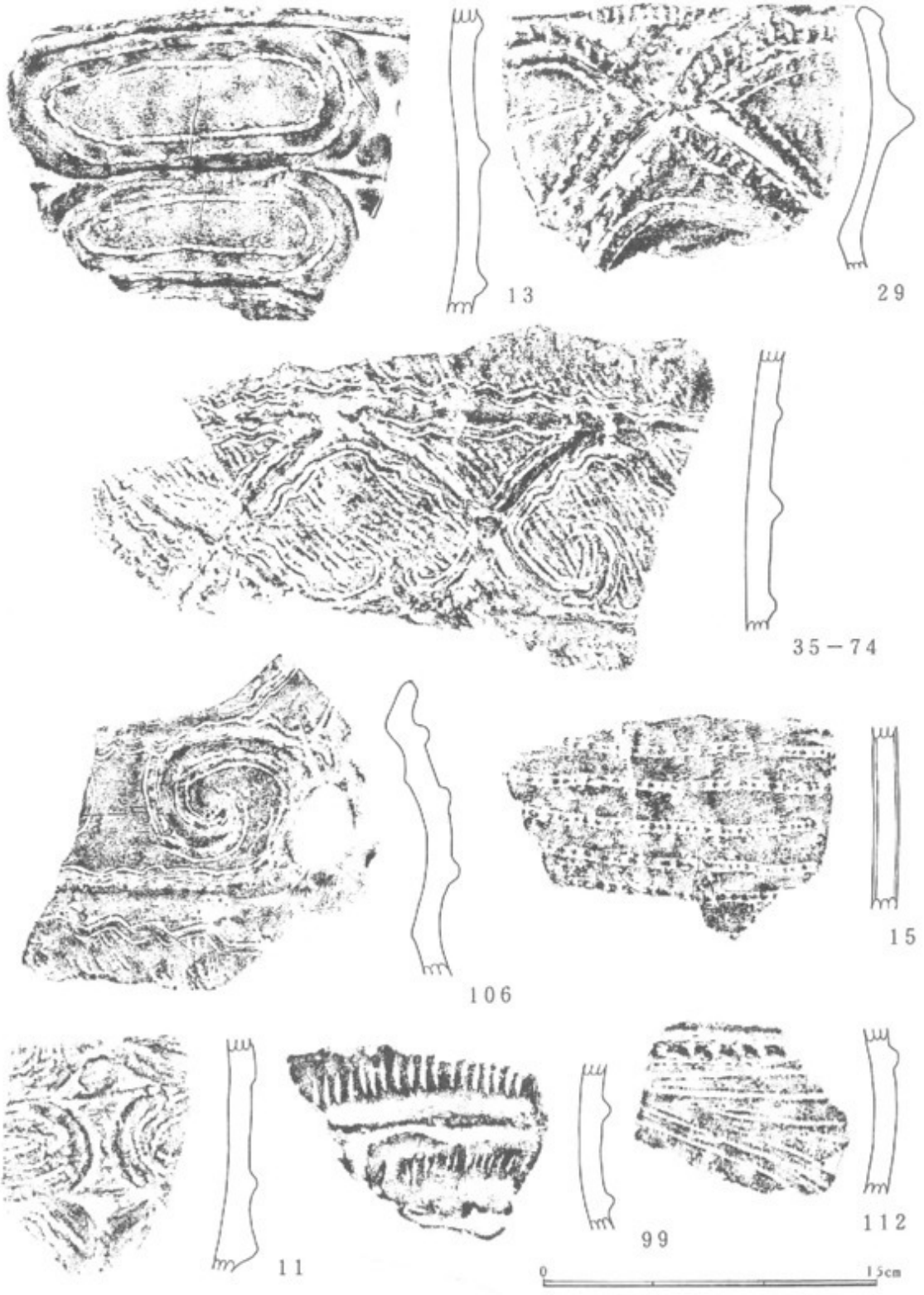
第三五図　第九号土壙出土土器実測図・拓影図



第三六図　第一〇号土壙出土土器実測図

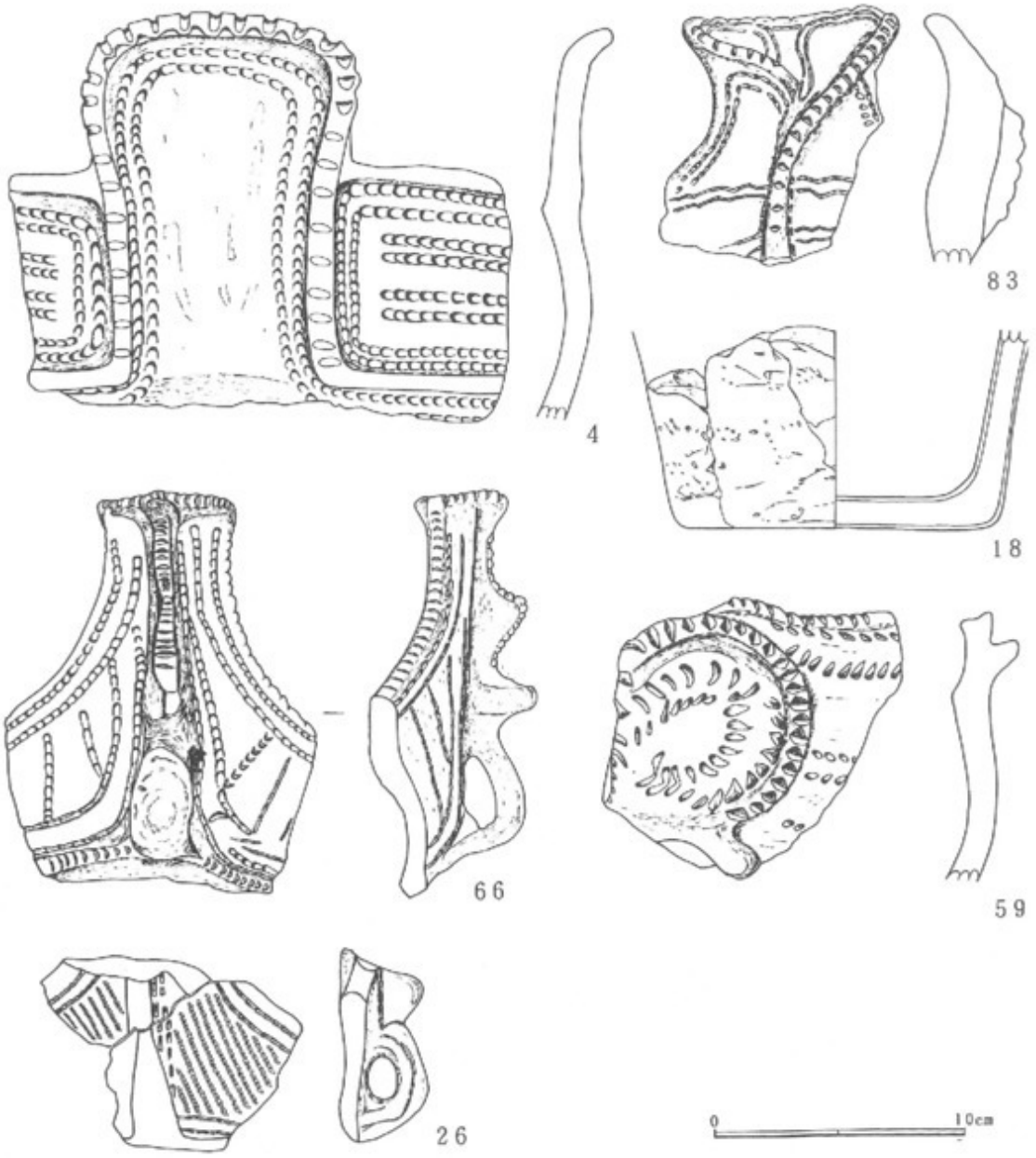


第三七図　坂場遺跡第一号溝状遺構出土土器実測図

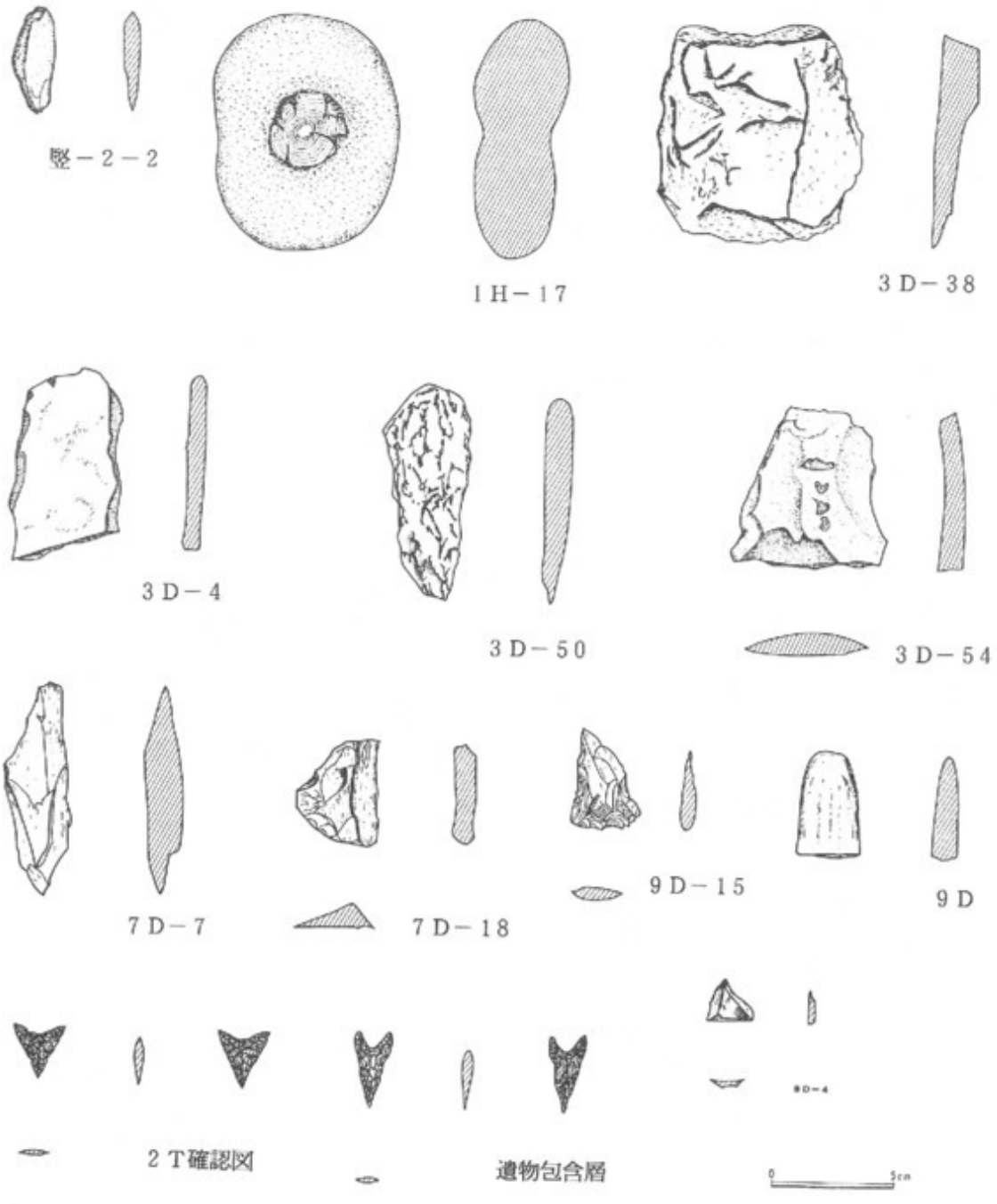


第三八図　遺物包含層出土土器拓影図（一）

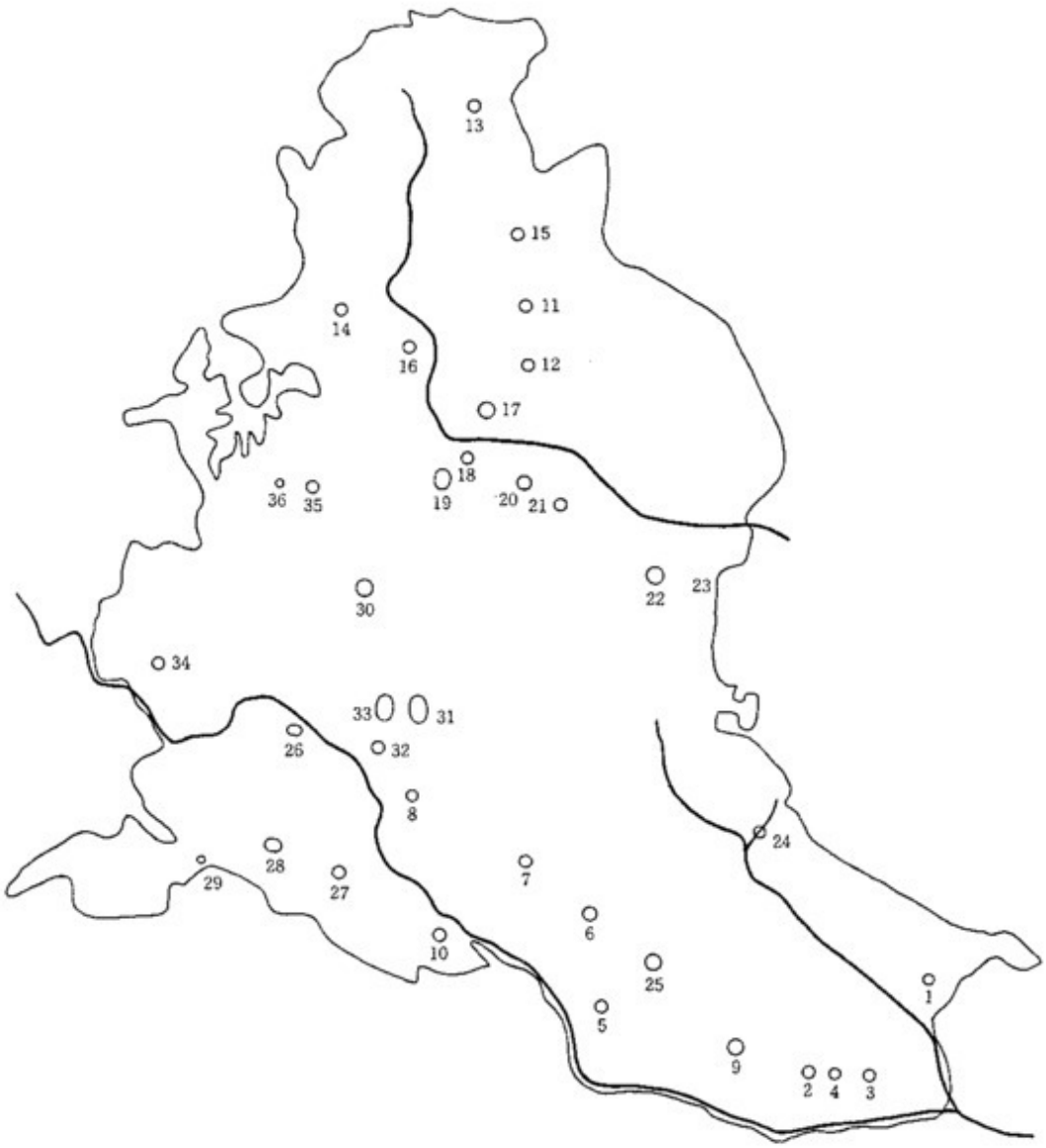
第三九図　遺物包含層出土土器実測図・拓影図（二）



第四〇図　遺物包含層出土土器実測図（三）



第四一図　石器，石器片実測図



遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名
1	柏井遺跡	11	坂場遺跡	21	家前遺跡	31	八幡台遺跡
2	釈迦堂遺跡	12	小原香取遺跡	22	五平内郷遺跡	32	城の内遺跡
3	仁古田遺跡	13	山内・金山遺跡	23		33	爪形遺跡
4	西仁古田遺跡	14	猿子池遺跡	24	本郷遺跡	34	屋山遺跡
5	住吉遺跡	15	柏原遺跡	25	下宿遺跡	35	北山不動尊遺跡（石山神）
6	寺山遺跡	16	御城遺跡	26	稲荷神社北側遺跡		
7	川郷地池西側遺跡	17	松崎台遺跡	27	南小泉遺跡	36	石山神遺跡
8	上郷遺跡	18	宮前本郷遺跡	28	善九郎遺跡		
9	長兎路遺跡	19	久保遺跡	29	内田遺跡		
10	大古山遺跡	20	家前遺跡	30	光金寺遺跡		

付図　友部町内縄文遺跡分布図

第一一章　ま　と　め

友部町町道１級３号線の拡幅改良工事に伴う小原香取・坂場遺跡の発掘調査の概要は以上に記述してきたとおりである。

しかし，遺跡全体の面積からみれば，今回調査した範囲はまことに狭小であって，この結果からただちに遺跡の全容を律することは不可能である。

確認された遺構は縄文時代（一部歴史時代）のもので，第四章で述べたとおりであるが，友部町の考古学的情報と資料獲得の面では或る程度の成果を収めることができたものと思われる。

本調査区から発見された遺構は縄文時代中期に形成されており，時期的には阿玉台式期末葉に属するものと思われる。

本遺跡はかなり広汎なエリアを有するので，未調査の部分には相当数の遺構が存在し，このなかにはおそらく後期の遺構も含まれるものと考えられる。

本調査区から確認された竪穴住居址は１軒だけで，関野克氏の竪穴住居居住人数算定方法によれば0.9人（１人）が居住していたことになるが，縄文時代中期の集落の規模は，一体どのくらいの大きさで，何人くらいの人口を有していたのだろうか。

土肥孝氏の研究を要約してみよう。

わが国では，一つの中期集落を遺構一つ残らず完全に調査し，全貌を明らかにしたという調査は，残念ながらほとんど行われていないようである。

ただ，一つの台地上の集落をそっくり調査した例として千葉県船橋市高根木戸遺跡をあげることができるが，この遺跡も北側の貝塚がすでに宅地化されており，全貌をつかんだとはいいがたいそうである。

高根木戸遺跡では１万㎡の台地上で75軒の住居址と129個の小竪穴遺構が発見されているが，縄文時代中期という長い時間の幅の中で連続して生活が営まれたわけであるから，同時に75軒の住居が軒を連ねていたわけではない。

時間の流れを示す土器を基準にして時期を分けると，大まかには四つの時期に分かれ，古い方から順に４軒，23軒，14軒，18軒となり，さらに住居址の重複・土器の型式差・炉の形態・貝層のあり方など細かく分けられる要素を検討していくと５～８軒の戸数になるという。

１軒の構成人員を４～５人とすると，高根木戸遺跡は20～40人ほどの人口であったろうと考えられている。

しかし，台地上にあった北側の貝塚も同じ集落と考えると，この台地上で同時期に生活した人数は30～55人ほどと推定されている。

中期の集落でもその占有する台地の大きさ，獲得できる食料の量，他集落との距離など自然的・

人為的条件で著しく規制されるため，様々な規模の集落があったものと考えられているが，今までに大規模な調査が行われた集落の分析結果と考え合わせると，高根木戸遺跡くらいの規模が平均的縄文時代中期集落ではなかったかと考えられている。

おそらく小原香取・坂場遺跡の場合もこれに近似する規模であろうと思われる。

一住居の構成人数を示す例としては，不慮の事故によって住居内の家族全員が同時に死亡し，その状態がそのまま残った千葉県市川市姥山貝塚では５名（大人３人，子供２人），千葉県松戸市中峠遺跡では４名（大人２人，子供２人）が有名である。

一方，人骨が残らない遺跡での一般的家族数の割り出し方としては，姥山貝塚の例が１軒の住居の人数・性別・年令別構成が適当であることに注目し，竪穴住居址居住人数を計算する公式（$n = \frac{FS}{3} - 1$）が作られた。前述の本遺跡竪穴住居址の居住人数はこの公式によって算出したものである。

末筆ながら小原香取・坂場遺跡の発掘調査報告書を上梓するにあたり，調査開始から遺物整理が終るまで，友部町教育委員会社会教育課，町建設課，文化財保護審議委員の方々からあたたかいご高配とご協力を賜ったことに対し，深い感謝の意を捧げる次第である。

また，地元作業員の方々の真摯で意欲的なご協力にもあらためて謝意を表すものである。

本報告書の原稿執筆中の主任調査員のもとへ，友部町のベテラン作業員富田　満氏急逝の訃報がもたらされた。

本書図版第九上段の写真が，富田氏を偲ぶ遺影になってしまったことは悲しい限りである。

平成２年６月，北山不動遺跡の発掘調査以来，調査を共にしてきた富田氏のご逝去に慎んで哀悼の意を捧げ，ご冥福を祈り，本書をご霊前に捧げるものである。

調査員　一同

友部町小原香取・坂場遺跡発掘調査会組織

会長	宮山茂夫	友部町教育委員会教育長
副会長	大槻寿雄	友部町文化財保護審議会会長
理事	柏崎勇美	友部町教育委員会社会教育課長
同	小谷清治	友部町文化財保護審議委員
同	白田清郎	同
同	井東温	同
同	高野克巳	同
同	檜山成勇	同
同	友部平重郎	同
同	成田正三	友部町教育委員会社会教育委員長
同	千種重樹	主任調査員（茨城県埋蔵文化財指導員）
監事	永山幹夫	友部町建設課長
幹事	上野学	友部町教育委員会社会教育係長
同	鶴田宏之	友部町教育委員会社会教育係

発掘調査作業従事者

主任調査員	千種重樹（団長）				
調査員	水谷正	飯島栄子			
作業員	桑島四郎	高輪隆雄	柳岡悦子	深谷喜三郎	
	富田満	龍福貴代枝	田村正行	加藤友三郎	
	吹野義明	永山秀夫	藤枝とみ	萩原ろく	
	塙みき子	横井義夫	卜部貞夫	渡辺幸友	
	小松重男				

遺物整理・報告書作成従事者

千種重樹　水谷正　飯島栄子　田村みどり

指導及び関係機関

茨城県教育庁文化課

茨城県水戸教育事務所生涯学習課

図　　版

遺跡の遠景〈南方より〉（上）

遺跡から眺めた西方の景観（下）

調査区の現況（一）〈南側より〉（上）

調査区の現況（二）〈南側より〉（下）

遺跡中心部の現況〈南側より〉（上）

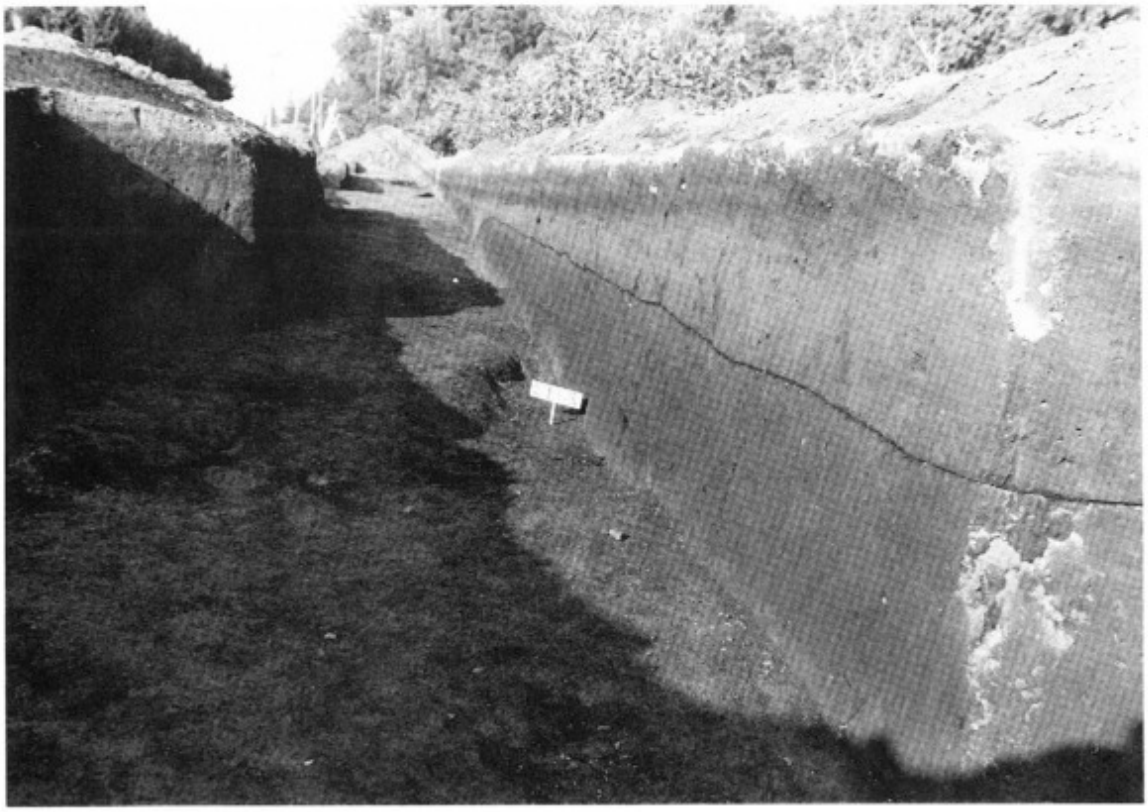
調査安全祈願祭を厳修して（下）

第１トレンチ調査風景〈南側より〉（上）

第１トレンチ全景〈南側より〉（下）

第２トレンチ調査風景〈南側より〉（上）

第２トレンチ遺物出土状態〈南側より〉（下）



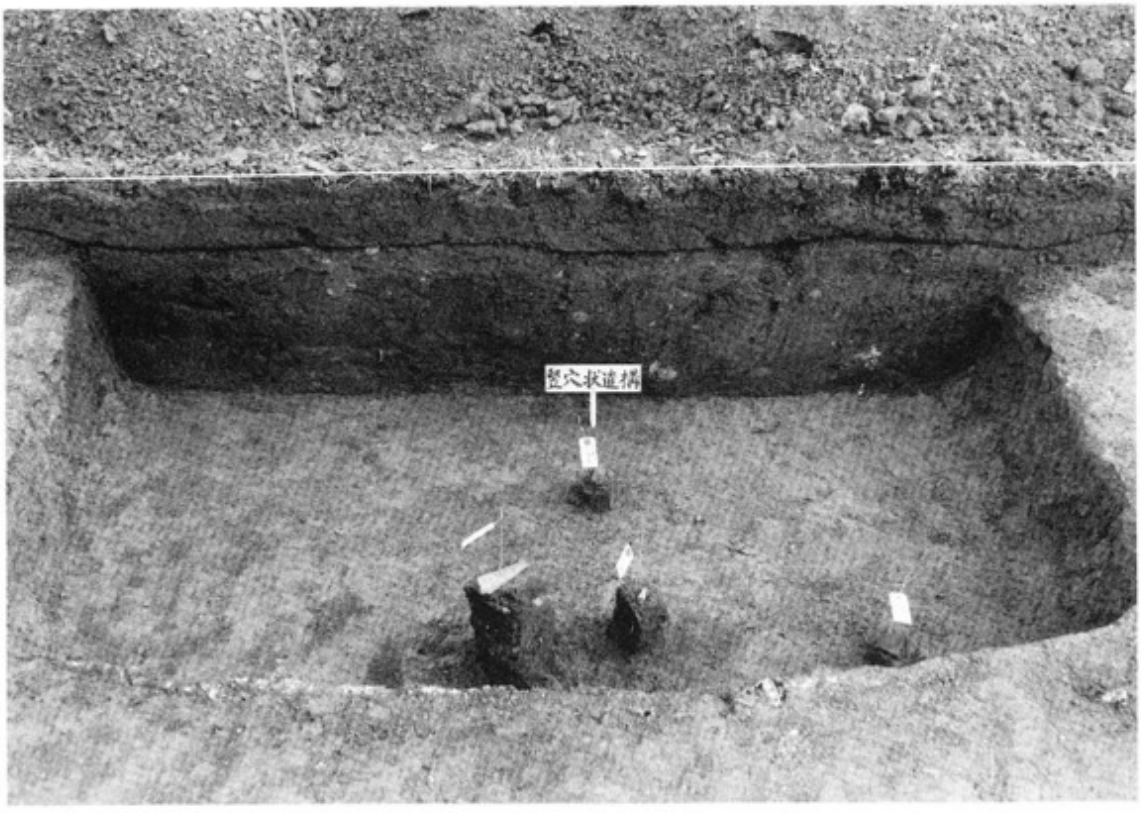
第２トレンチ全景〈南側より〉

石鏃出土状態

第3トレンチ全景〈南側より〉（上）

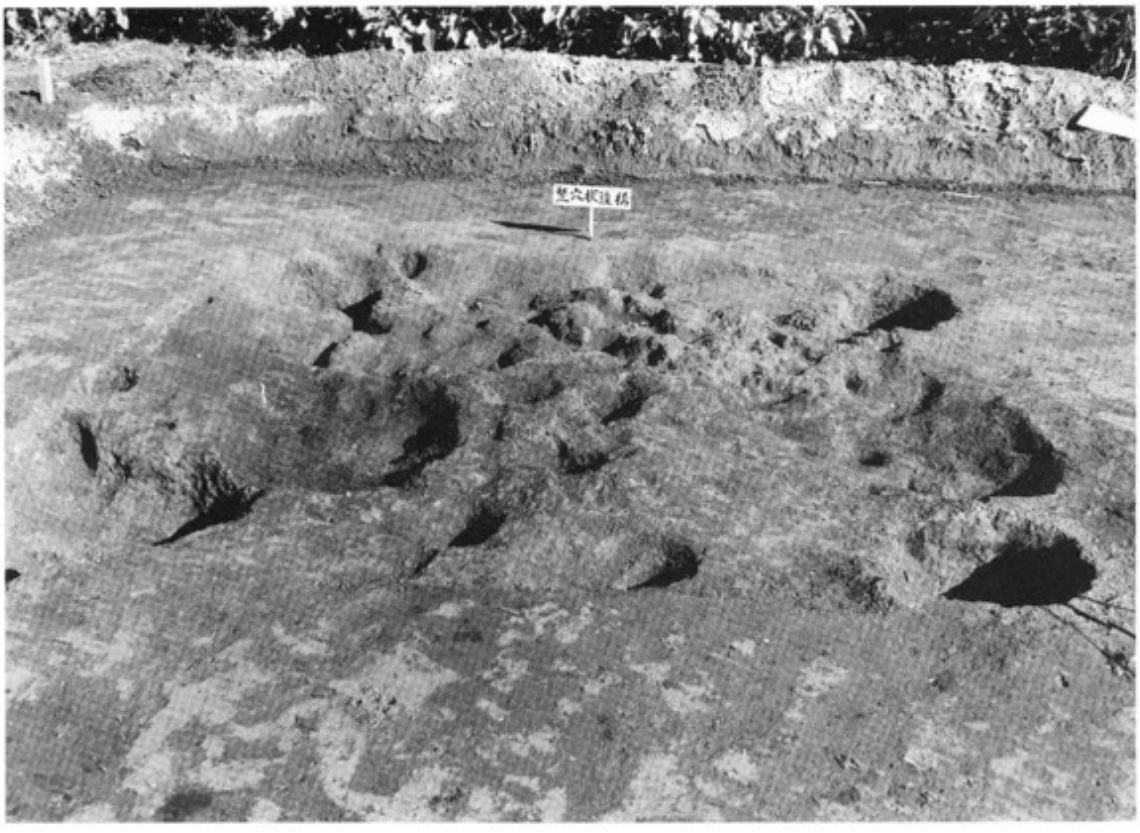
第4トレンチ全景〈南側より〉（下）

第５トレンチ全景〈南側より〉（上）

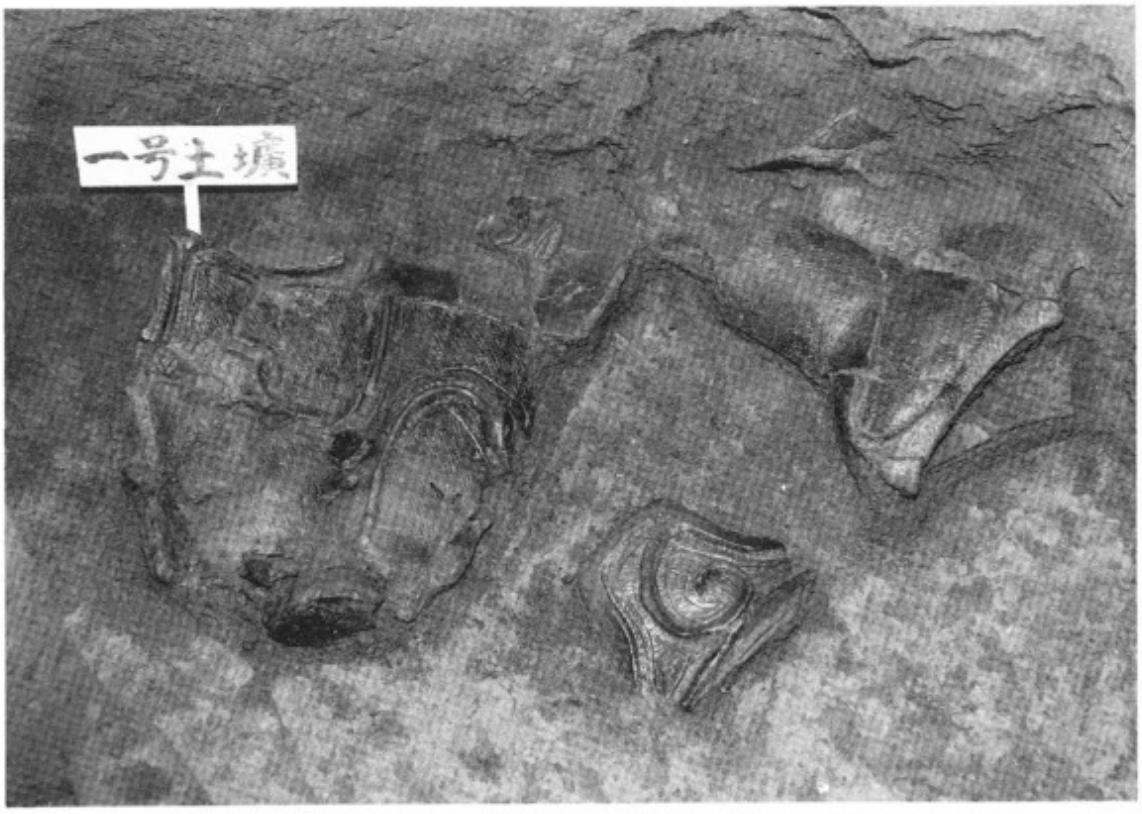


第１トレンチ第一号竪穴状遺構遺物出土状態〈西側より〉（下）

調査風景（第一号竪穴住居址）〈南側より〉（上）

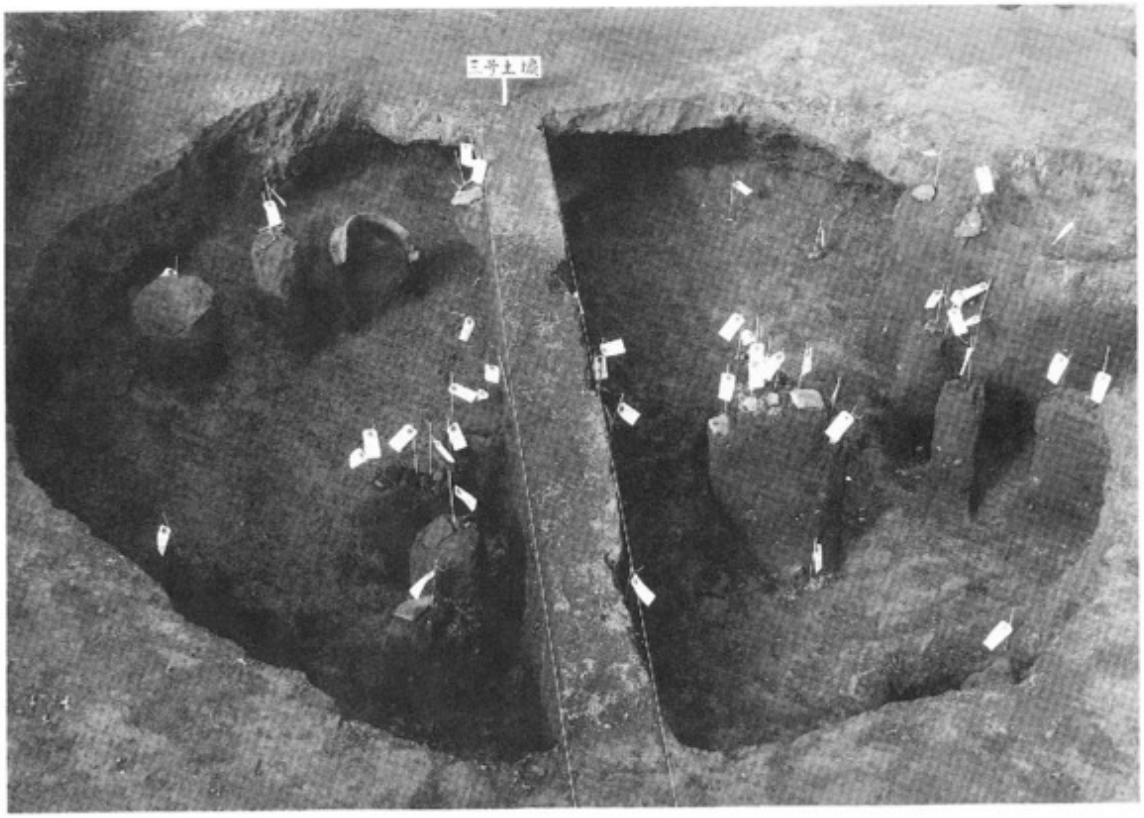


第一号竪穴住居址全景〈西側より〉（下）



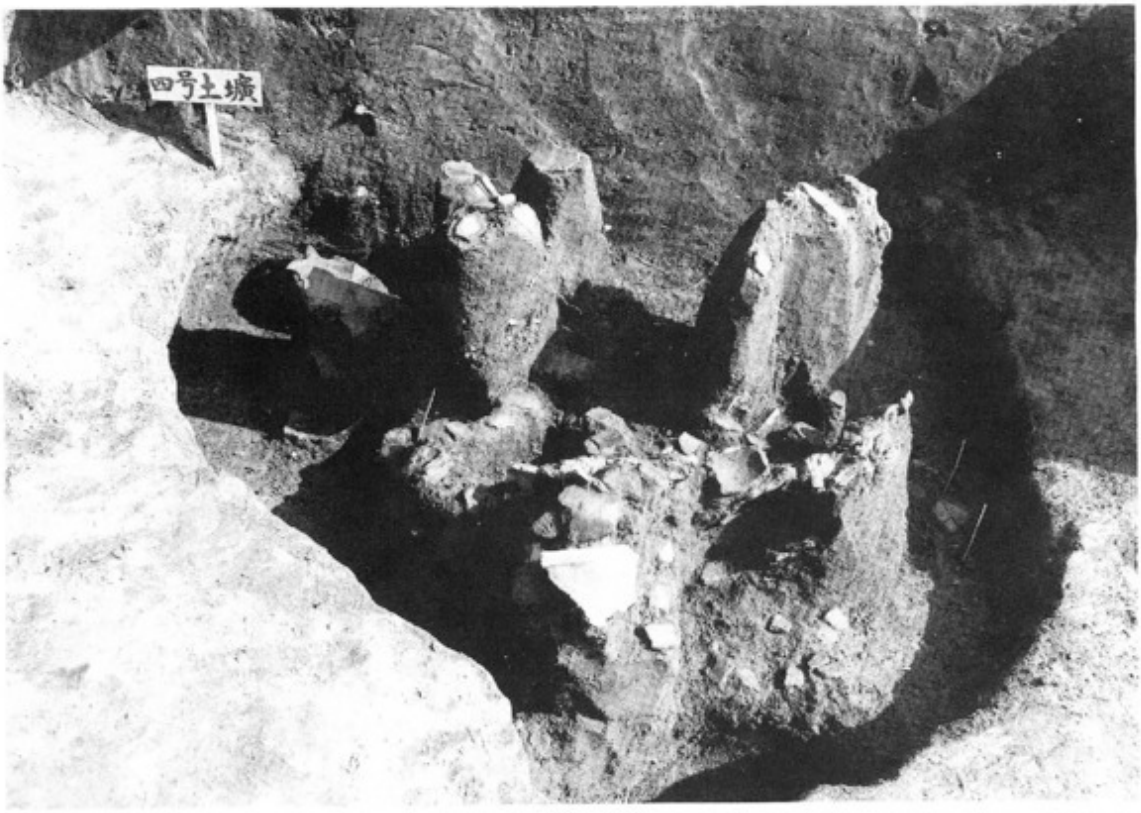
第一号土壙遺物出土状態〈南側より〉（上）

第二号土壙遺物出土状態〈南側より〉（下）

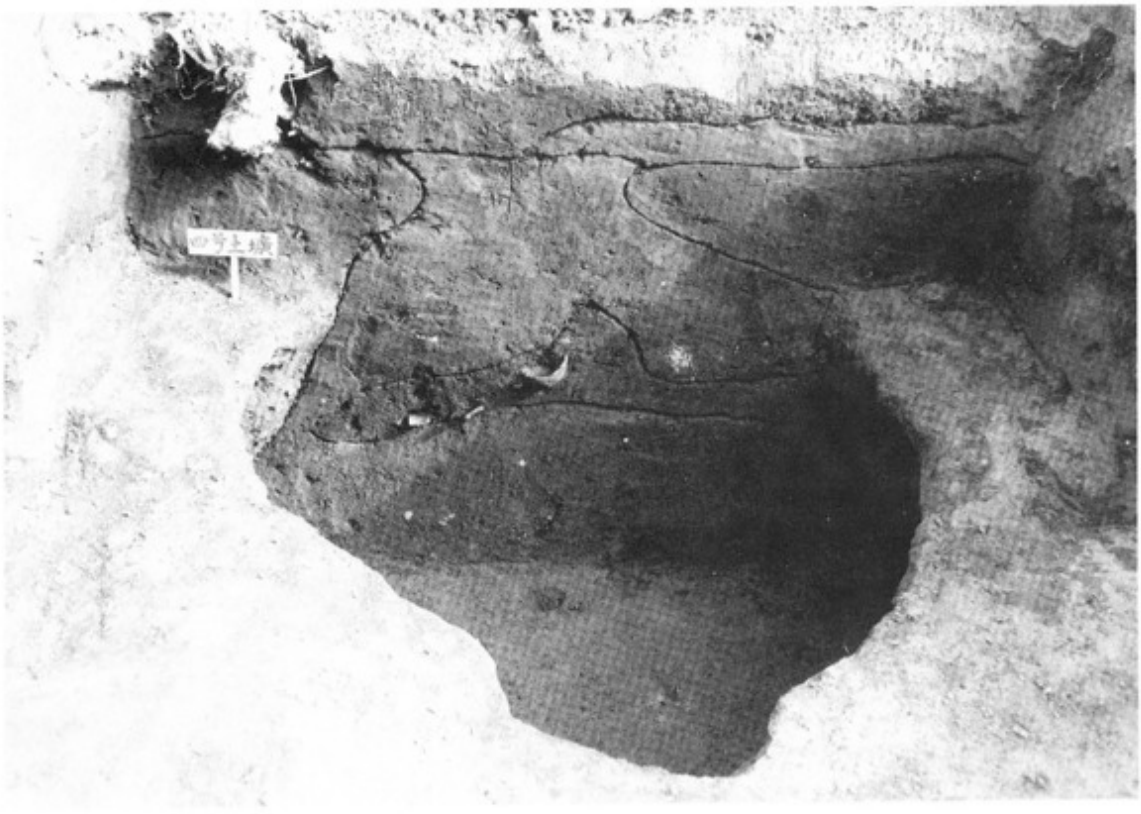


第三号土壙遺物出土状態〈東側より〉（上）

第三号土壙遺物出土状態〈西側より〉（下）

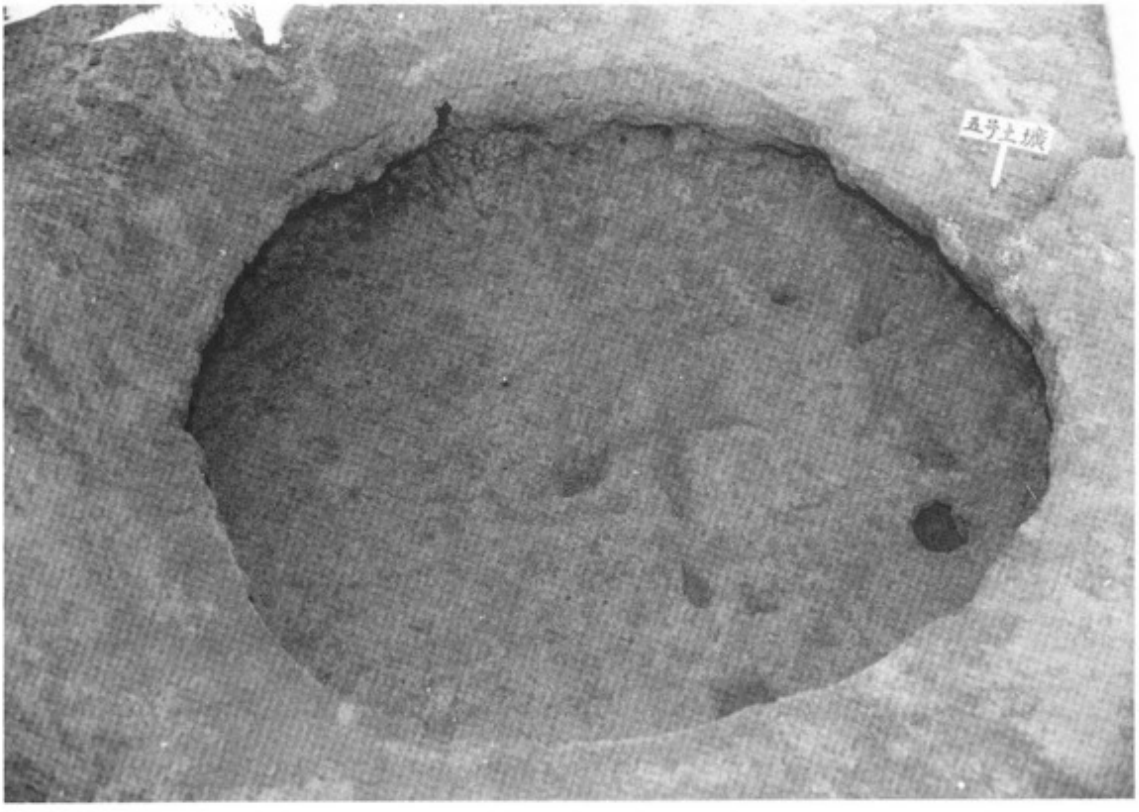


第四号土壙遺物出土状態〈西側より〉（上）

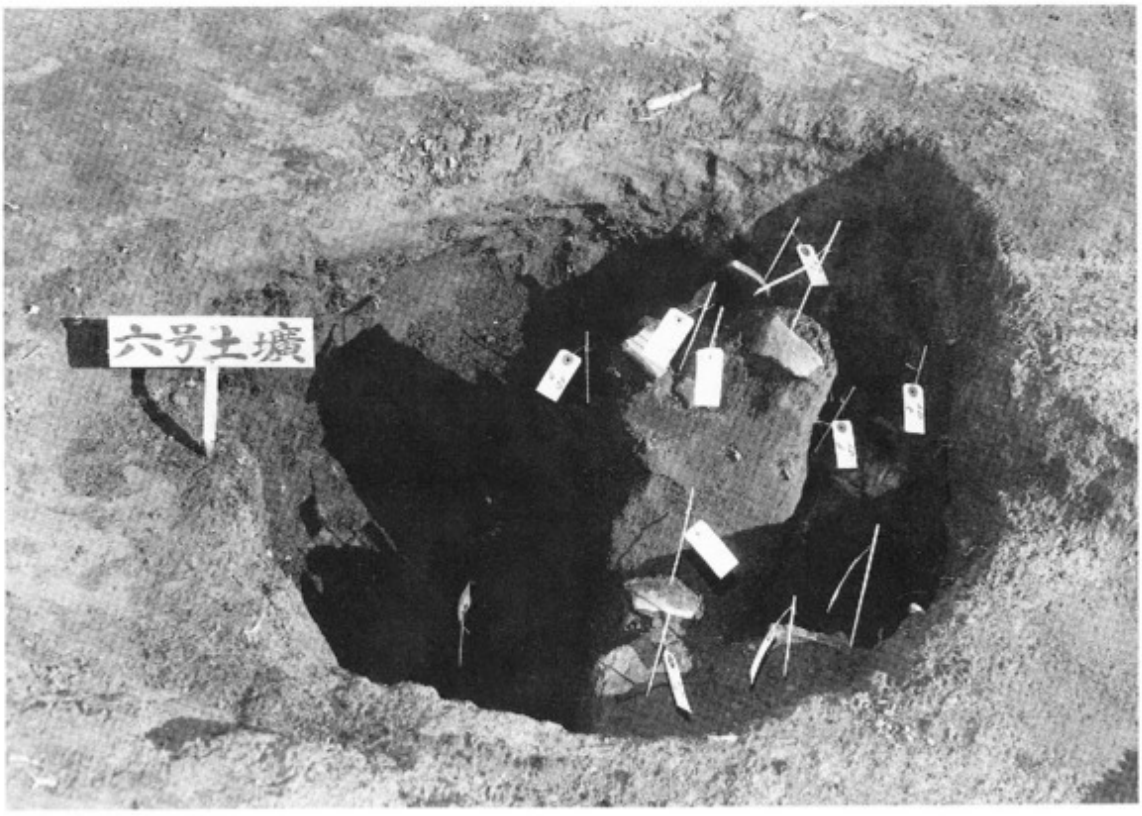


第四号土壙埋没土層の状況〈西側より〉（下）

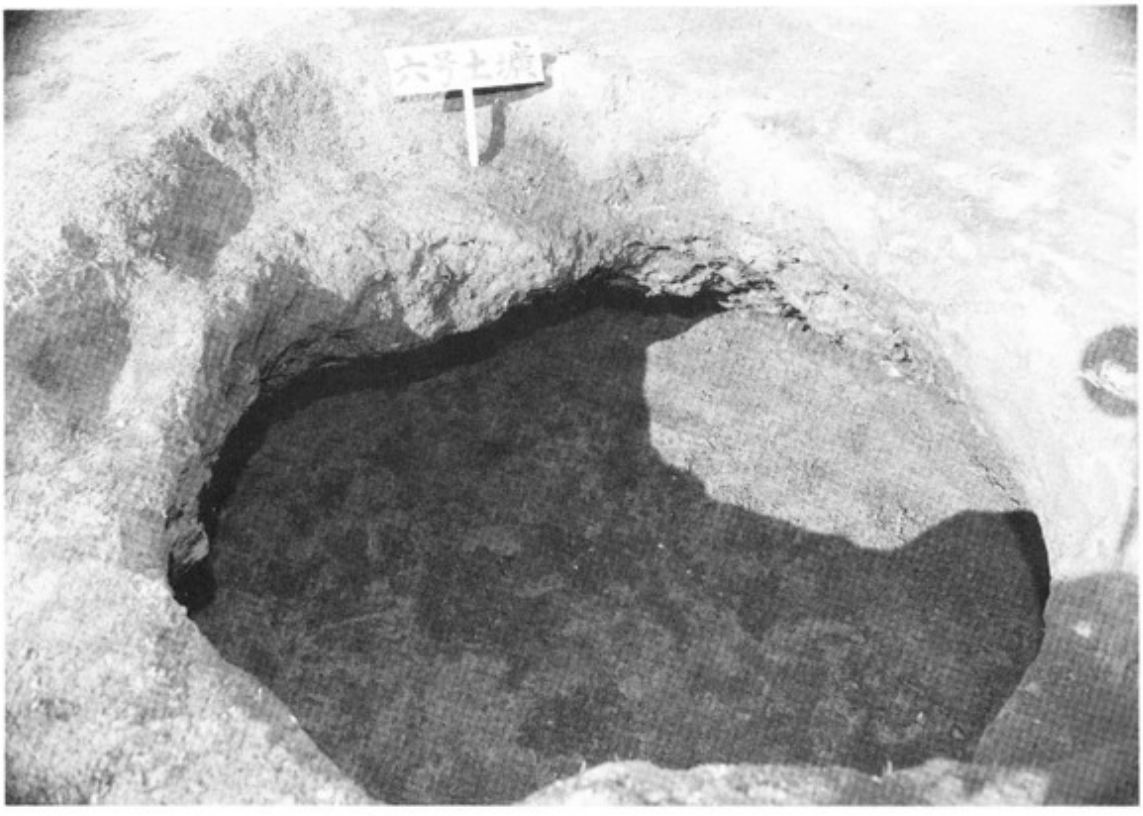
第五号土壙遺物出土状態〈東側より〉（上）



第五号土壙全景〈東側より〉（下）



第六号土壙遺物出土状態〈南側より〉（上）

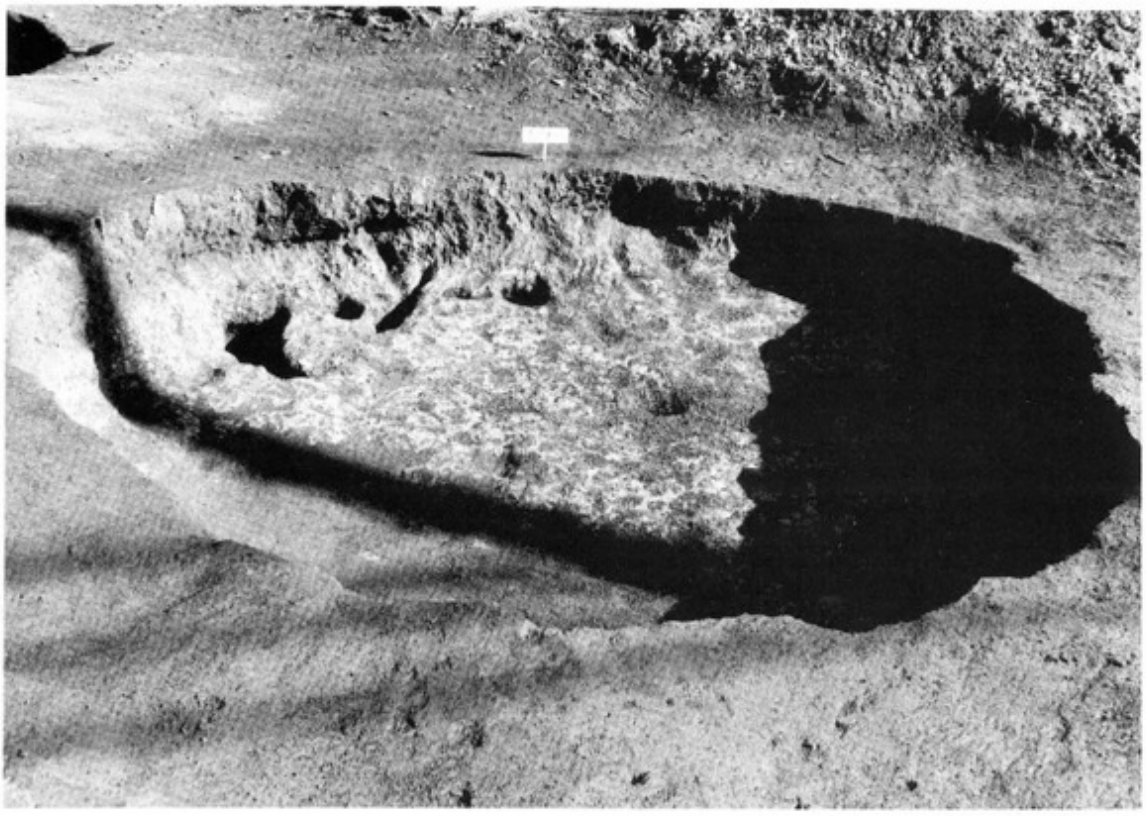


第六号土壙全景〈南側より〉（下）

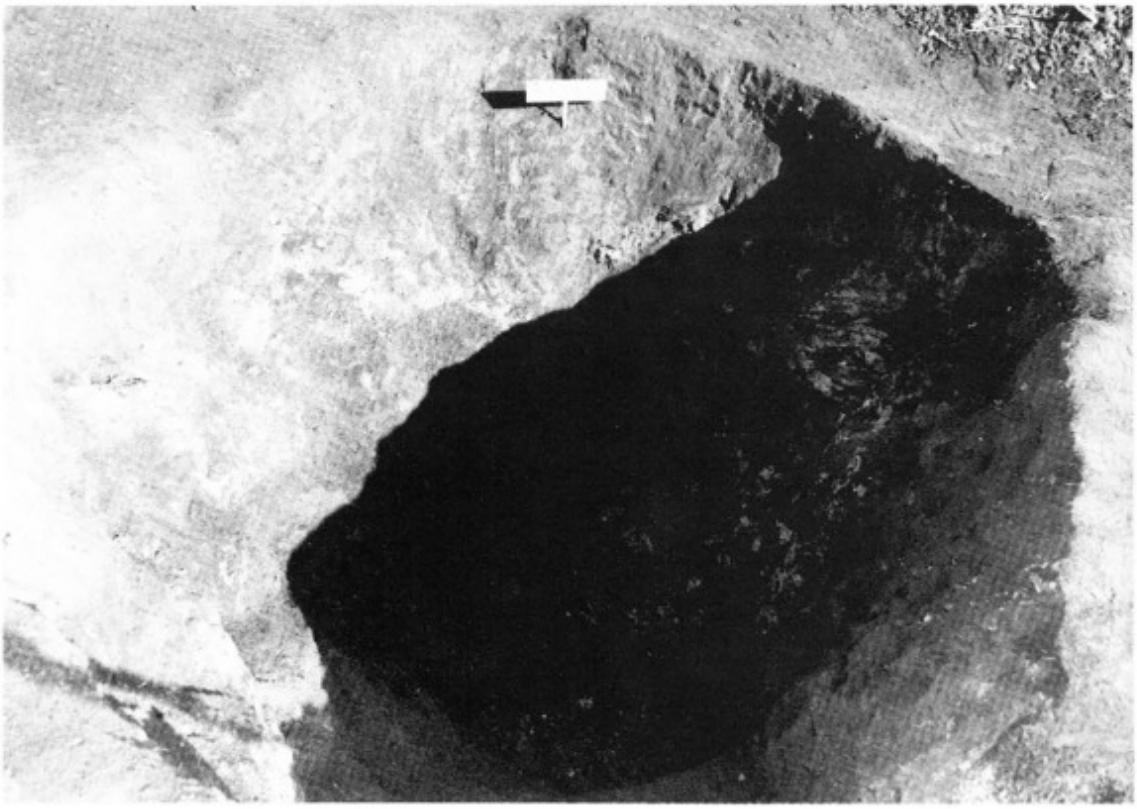
第七号土壙遺物出土状態〈東側より〉（上）

第七号土壙（上），第八号土壙（下）全景〈南側より〉（下）

第九号土壙遺物出土状態〈西側より〉（上）

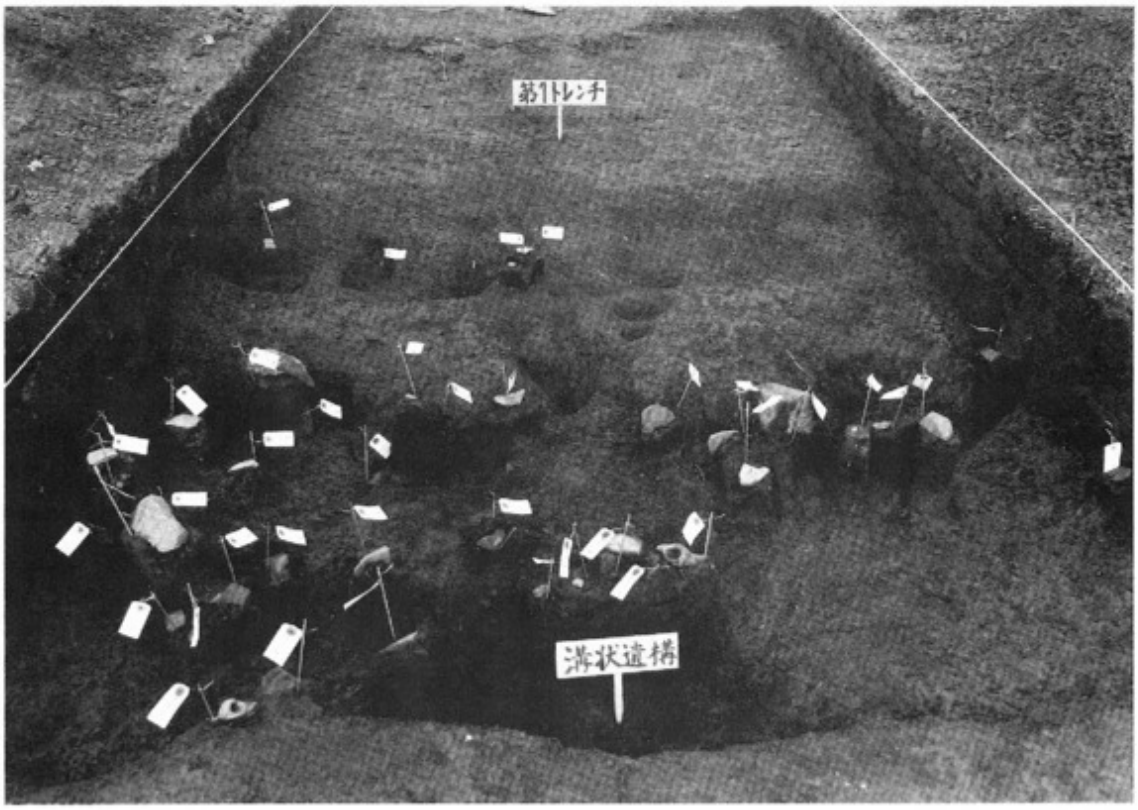


第九号土壙全景〈南側より〉（下）

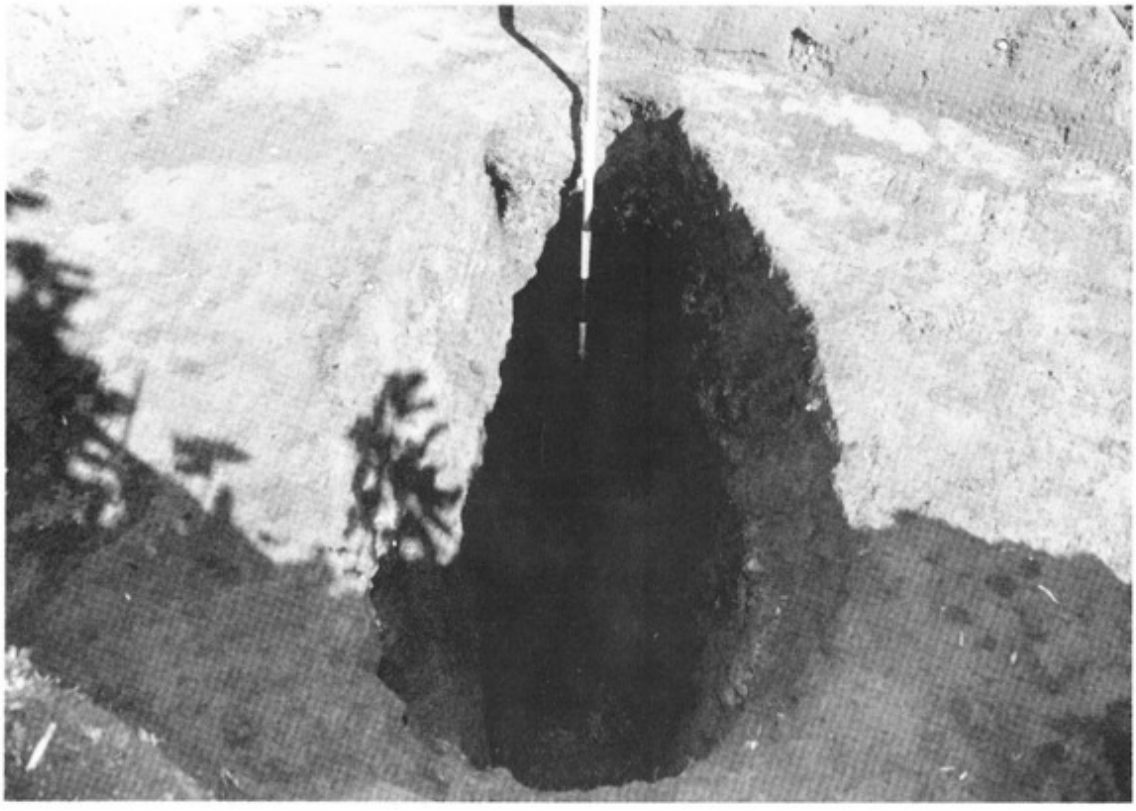


第一〇号土壙全景〈西側より〉（上）

第２トレンチ遺物包含層遺物出土状態〈西側より〉（下）



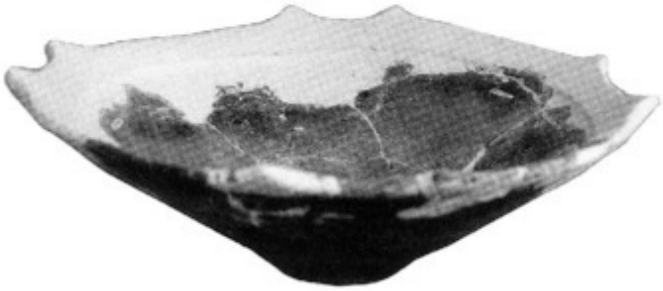
第１トレンチ溝状遺構遺物出土状態〈南側より〉（上）



第一号落し穴状遺構〈西側より〉（下）

1D－6－8

1D－10



1D－70－22－69

1D－9

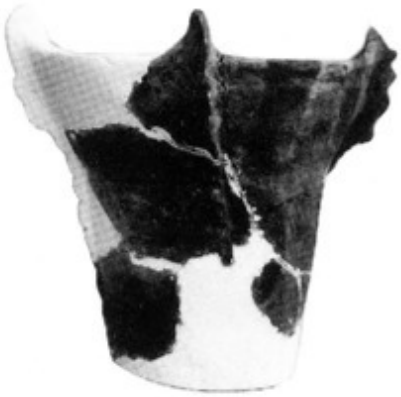
5D－6－1－2

接合復元土器（一）

5D－13

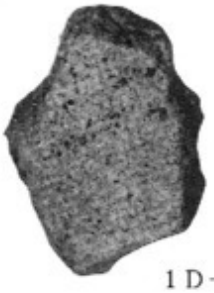
5D－26－36－63－47

7D－1－14－20

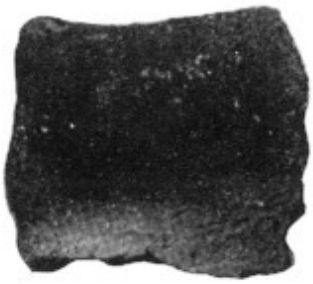


包含層

接合復元土器（二）



1D－1

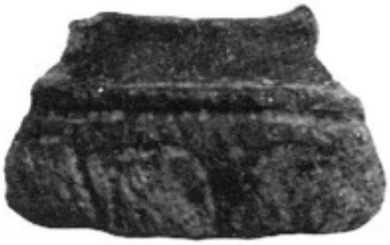


1D－3

1D－4

1D－2

2D



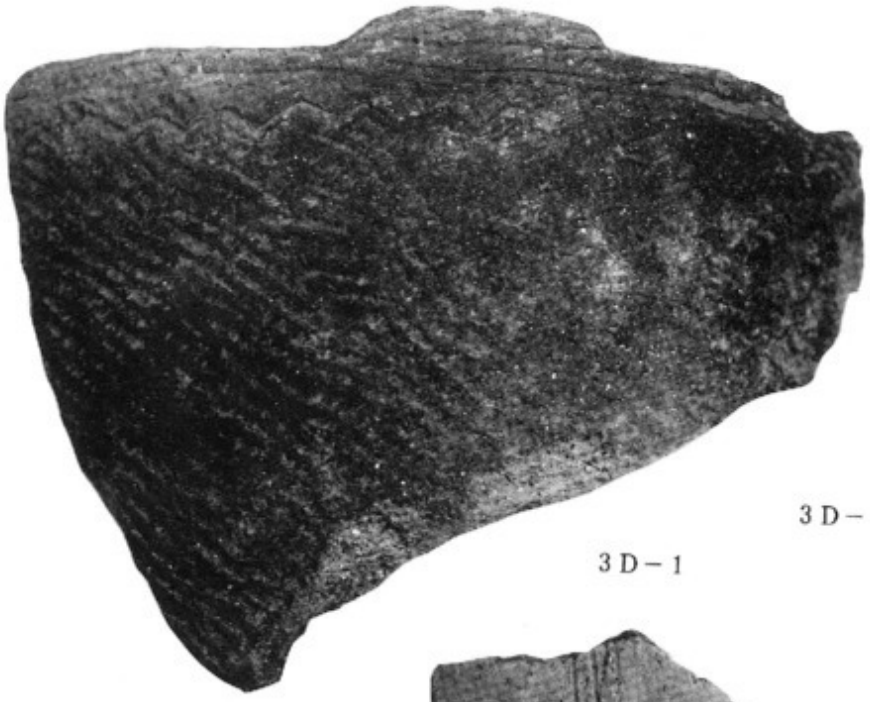
3D－46

3D－40

3D

3D－23

第一号・二号・三号土壙出土土器



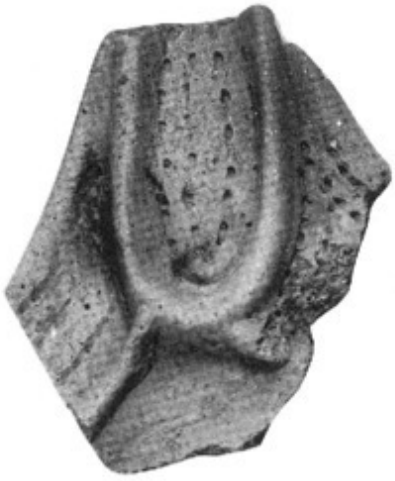
3D－1

3D－14

3D－42

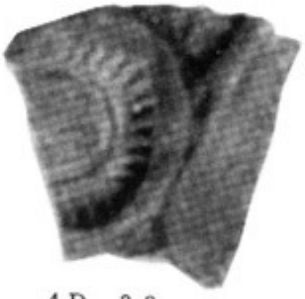
3D－29

3D

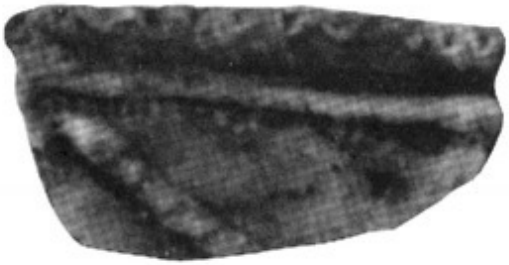


3D－7

3D－50



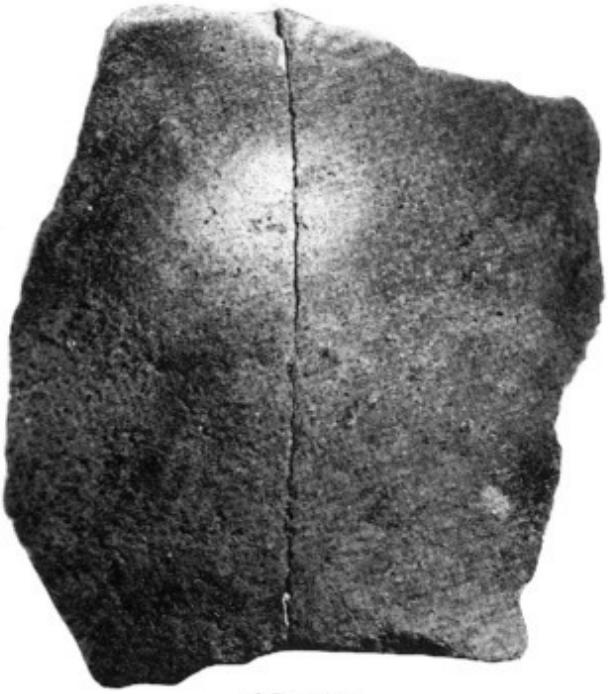
4D－33



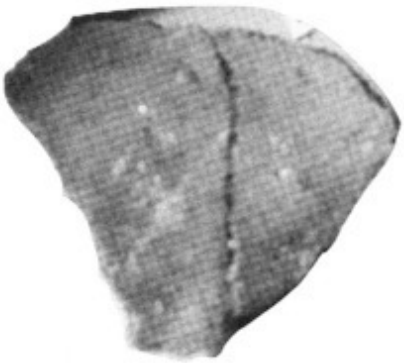
4D－58－116

4D－112－117

第三号・四号土壙出土土器

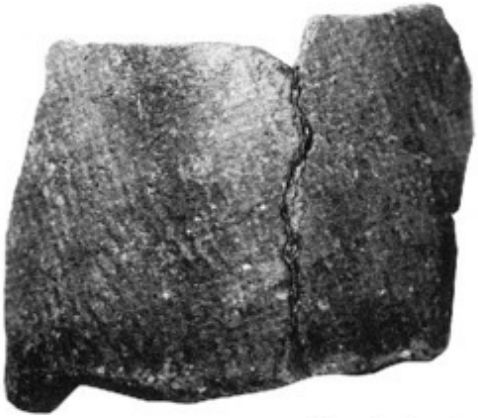


4D－27



4D－34－37

4D



4D－96－99

4D－27

4D－39－91

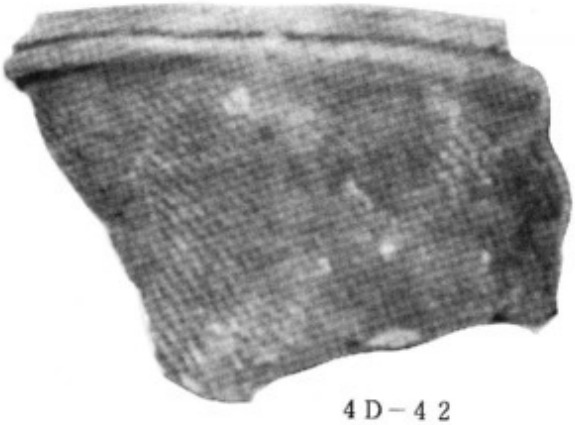
4D－114

第四号土壙出土土器

4D－98

4D－110

4D－72

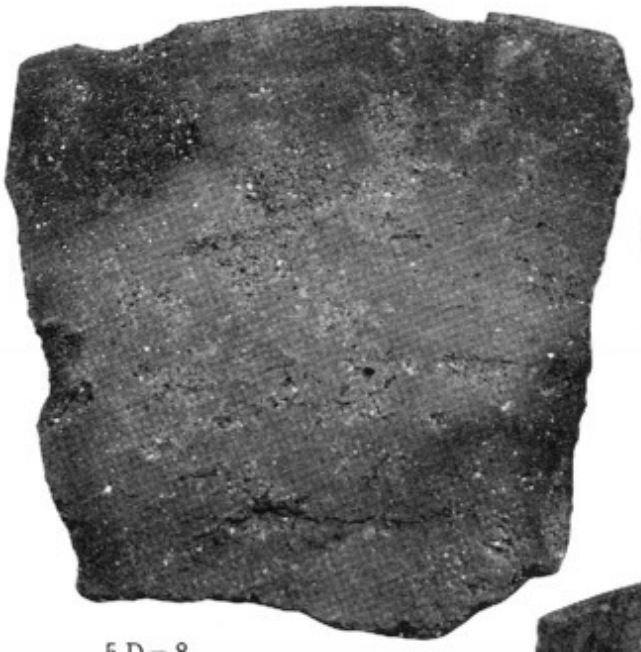


4D－42

5D－12－71

5D－56

第四号・五号土壙出土土器



5D－8

5D－20

6D－16

6D－2

6D－13

6D－10－8

6D－3

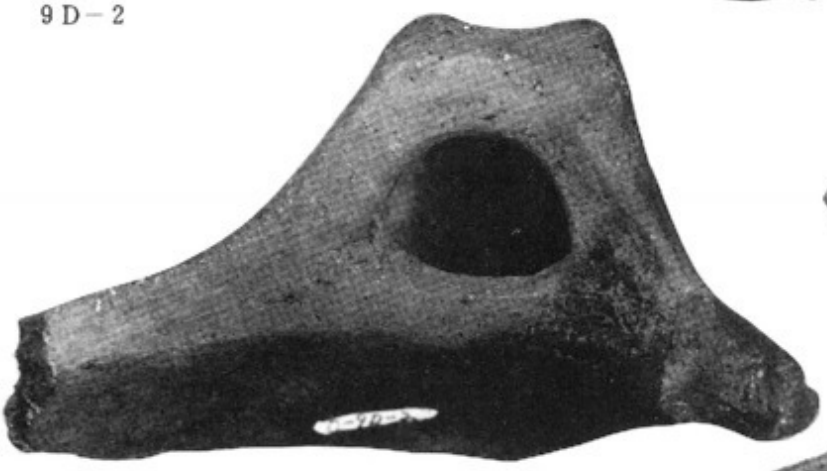
6D－20

第五号・六号土壙出土土器

9D－2

9D－16

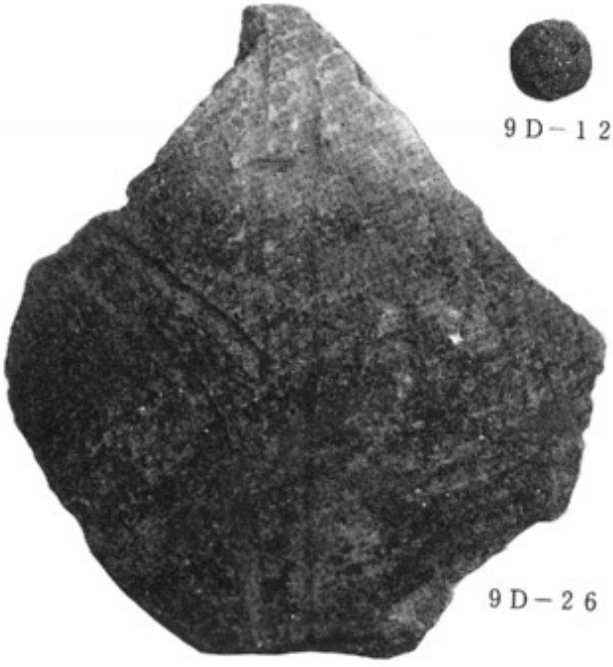
9D－6



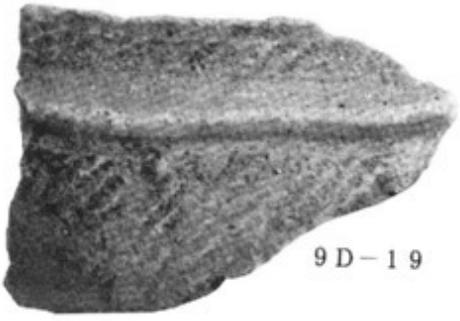
9D－25

9D－12

9D－21



9D－26



9D－19

第九号土壙出土土器

10D－11－13

10D－11

10D－15

10D－11－イ

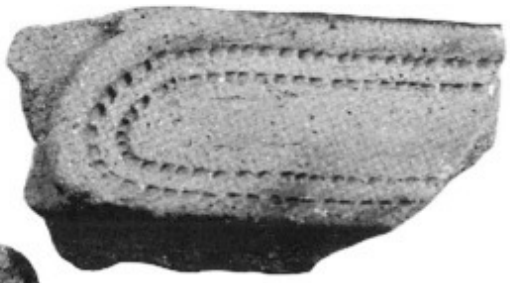
ホ－4

ホ－66

ホ－1

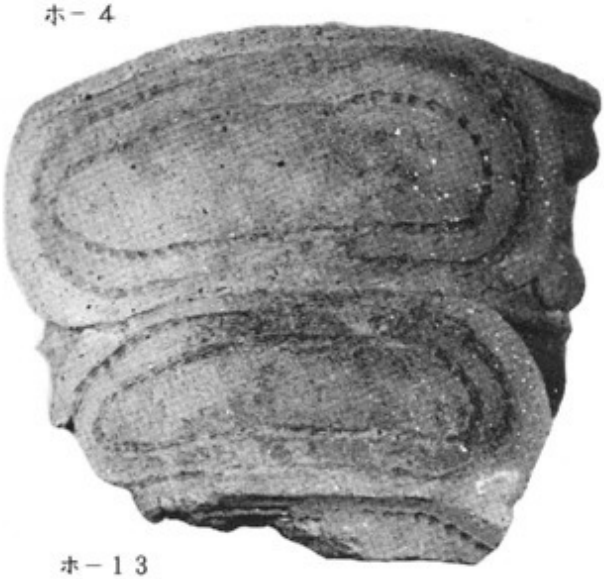
第一〇号土壙・遺物包含層出土土器（一）

ホ－４



ホ－２８

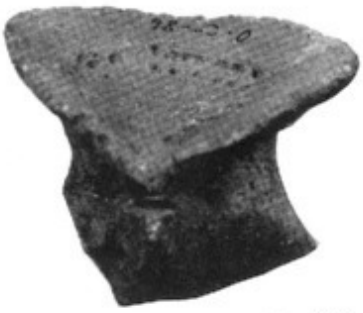
ホ－９９



ホ－１３

ホ－３

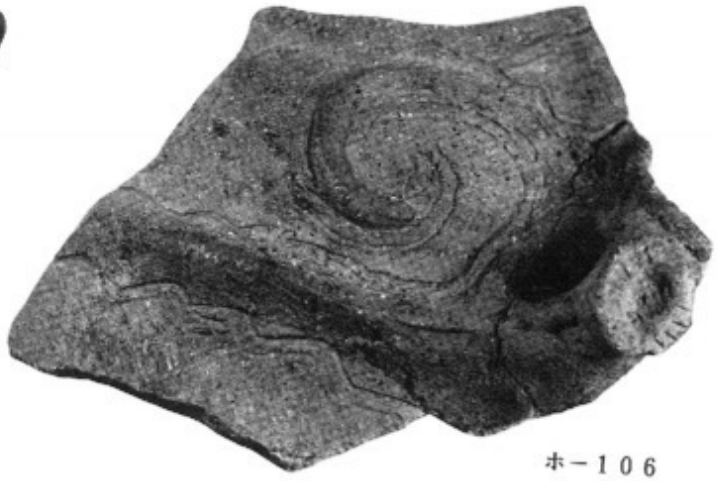
ホ－１５



ホ－８６

遺物包含層出土土器（二）

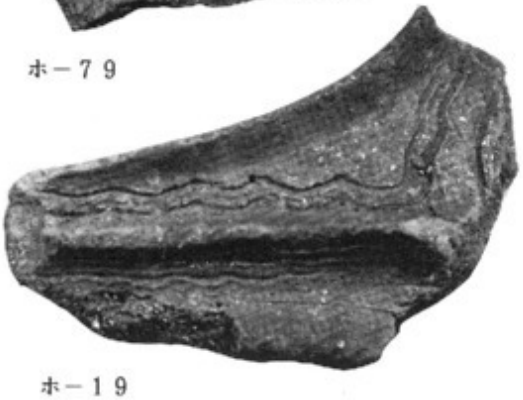
ホ－８３



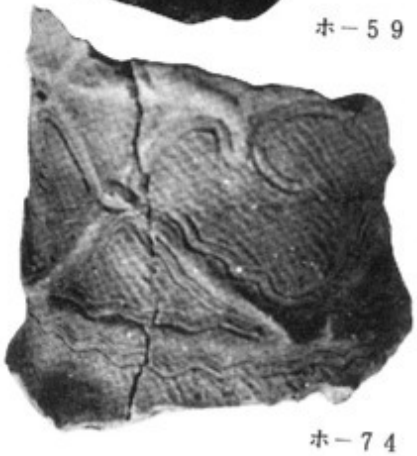
ホ－１０６

ホ－７９

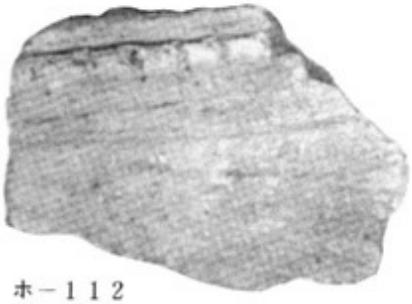
ホ－５９



ホ－１９



ホ－７４



ホ－１１２

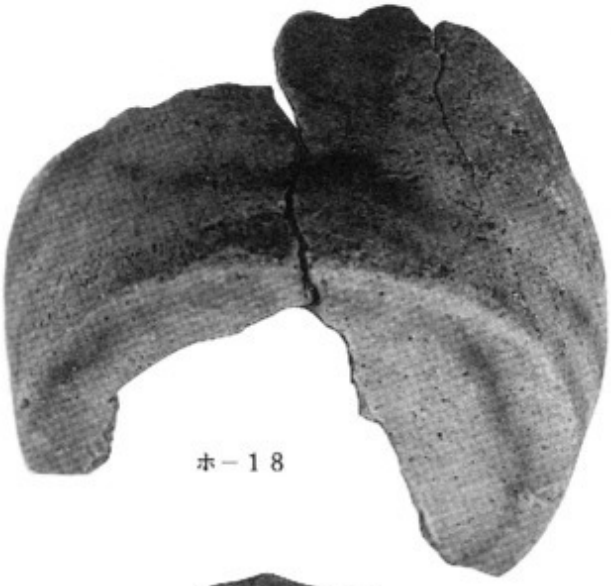
ホ－１８

遺物包含層出土土器（三）

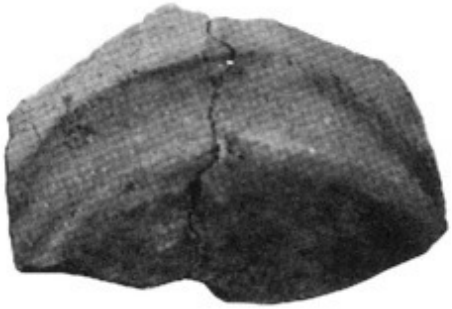
ホ－９９

ホ－９９

ホ－１３

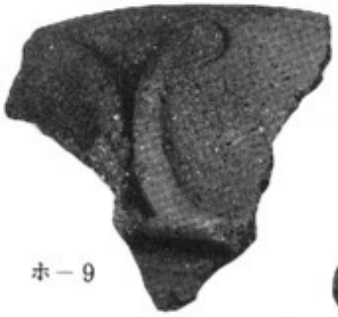


ホ－１８



ホ－５０

ホ－８６－イ



ホ－９

ホ－６１

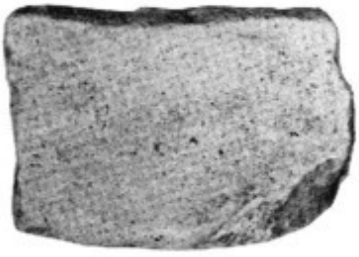
ホ－８７

遺物包含層出土土器（四）

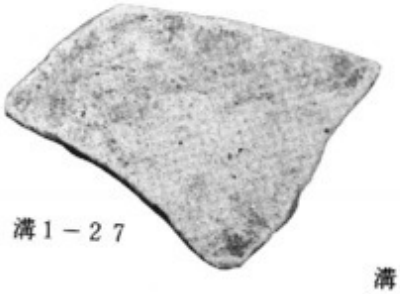
溝1－1

溝1－3

溝1－18



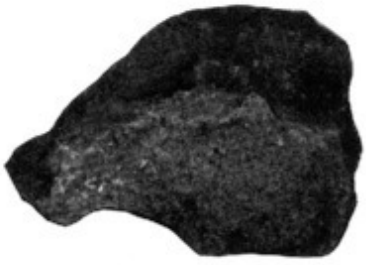
溝1－40



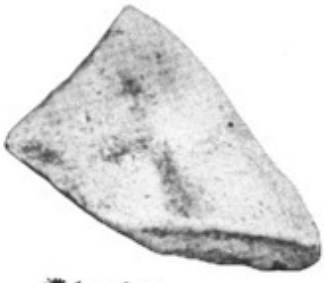
溝1－27

溝1－6

溝1－25



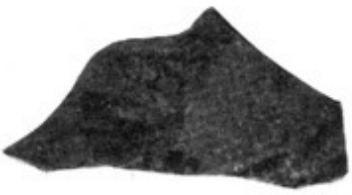
溝1－16



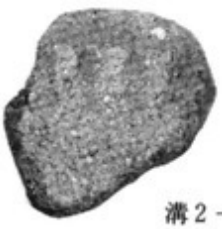
溝1－33

溝1－39

溝1－20



溝1－29



溝2－3

溝2－10

溝2－14

溝状遺構出土土器

1H

3D

5D

7D

9D

9D

確認面

包含層

1H

出土石器・石器片

小原香取・坂場遺跡

平成6年11月

執筆編集　千　種　重　樹

発　　行　小原香取・坂場遺跡発掘調査会

印　　刷　大　塩　企　画